

大菩薩峠

他生の巻

中里介山



清澄の茂太郎は、ハイランドの月見寺の三重の塔の九輪くりんの上で、しきりに大空をながめているのは、この子は、月の出づるに先立って、高いところへのぼりたがる癖がある。人に問われると、それは、お月様を迎えに出るのだというが、しかし今晩は、どうあつても月の出ないはずの晩ですから、茂太郎も、それを迎えに出る必要はないはずです。

天には星の数

地にはガンガの砂の数

大声あげてうたいました。

してみると、茂太郎は、星をながめるべくこの塔の上へのぼつ

たものです。

茂太郎が、星をながめる興味は、今にはじまったことではありません。

「星は雨の降る穴だ」

と教えられた時分に、ふと清澄山の頂^{いただき}で、海の上高く、無数の星をつくづくとながめて、

「穴ではない、星だ、星だ」

と叫んだのが最初で、それからこの子は、天界の驚異のうちに、星の観察を加えました。

見れば見るほど、星の正体がこの子供には神秘にも見え、また親愛にも見え出して来たので、月を迎えに出るのを口実に、ほんとうは星の数をかぞえて帰ることが多かったものです。

もとより、この子は、天文の観察を、少しも科学の基礎の上

には置いていない。

「あの星がいちばん光る」

という直覚の第一歩から踏み出して、それを標準に、夜な夜なの変化を観察して、その記憶を集めているうちに、

「動かない星がある」

という第二段の知識で、北極星を認めたことから進み、今では星座の知識をほとんど備えて、普通の肉眼では六ツしか見えな
いという牡牛座おうしぎの星も、この少年には、たしかに十以上は見え
たものらしい。

星は決して雨の降る穴ではない、どの星も、この星も、おの
おの独立した個性を持つて大空に光っていると見たこの少年は、
昔の杞国きこくの人が憂えたと同じように、いつあの星が落ちて来な
いものでもないという恐怖に、一時はとらわれましたが、恐怖

の対象としては、星の光は、あまりに美しくて、懐かしいので、
久しからずして、その怖れから解放されて、驚異のみが加わっ
てゆくのです。

清澄山や日本寺あたりの空は広く、気は澄んでいて、天候の
観察には便利でありましたが、このハイランドは、それに比べ
ると壺中こちゅうの天地のようなものでしたから、一時は迷いましたけ
れど、今ではすっかりお馴染なじみになつて、

天には星の数

地にはガンガの砂の数

を歌い出すと、おのおのの星が舞い出して、茂太郎の周囲に降
りてくるようです。

色の最も赤い、運動の最もはやい、マースの星が、茂太郎の
愛するところの一つでありました。

茂太郎の天文学は、科学に基礎を置いていないように、迷信にも囚とらわれておりませんから、西洋ではローマ以来、戦いくさの神と立てられているこの星、東洋ではその現わるるのは戦の前兆として怖れられたこの星も、茂太郎には、ただその色が美しく、そして舞いぶりがことにいさましいのをよろこばすだけのものです。

すべて、物は、純な心を以て見ないものに、その美しさを示すということがありません。清澄の茂太郎にとっては、天上の星の一つ一つが、充分にその美しさを旋廻して見せるのですから、見れども飽くということを知らず、ある時は星と共に大空の奥深く吸い込まれ、ある時は星が来つて、わが周囲に舞いつ、おどりつしているもののように見え、

「弁信さん、星がキレイにおどっているよ、とても綺麗……」

と呼びました。

清澄の茂太郎が、天上の星をながめている時、地上の庭では、弁信法師が虫の鳴く音に耳を傾けております。

「トテモ綺麗だよ」

茂太郎は天上の星に恍惚^{うつつり}として躍動した時、地上の虫を聞いていた弁信は、

「茂ちゃん、わたしは今、虫の音を聞いているところですよ」

この返事は、塔の上はるかな茂太郎の耳には入らなかったでしょう。

「いろいろの虫が、草むらで鳴いておりますよ」

おのおのの虫は、おのおのの生を語るが如く、力いっぱい奏楽を試みている。弁信は、今、その一つ一つが持つ生命の曲を聞きわけようとして離れられないものらしい。茂太郎は、あら

んかぎりの愉悅を以て、あらんかぎりのあこがれを捧げて、星をながめているのだが、虫を聞いている弁信の面から、泣くが如く、憂うるが如き、一味の哀愁を去ることができません——これは二人の性格の相違にもよるのでしょうが、すべて天上を見るものには、無限のあこがれがあつて、地上に眼を転ずる時は、誰しも一味の哀愁をわすれることができないのでしょう。そこで、天上と地上の二人の交渉は、暫く絶えてしまいました。

星はほしいままに天上にかがやき、虫は精いっぱい地上で鳴いていると、

「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず、日蓮は泣かねど涙ひまなし……と日蓮上人が仰せになりました」

弁信法師がこういつて、見えない眼をしばたたいたのは、物

に感じて、また例のお喋りしゃべを禁ずることができなくなつたものでしょう。

「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず、日蓮は泣かねど涙ひまなし……と日蓮上人が仰せになりましたのは……」

弁信法師は、地上の虫が咽むせぶように咽むせび出して、

「現在の大難を思うも涙、後生ごしようの成仏じようぶつを思うてよろこぶにも涙こぼるるなり、鳥と虫とは鳴けども涙落ちず、日蓮は泣かねど涙ひまなし……と御遺文のうちから、私が清澄にあります時に、朋輩から教えられたのを覚えているのでございます」

といつて、あらぬ方かたに向き直つて、いつもするように、誰をあとにともない申しわけ。

「ええ、私でございますか……いつも申し上げる通り、この眼が見えないものでございますから、耳の方が発達しておりますし

て、一度聞かせていただいたことはわすれません、二三度、と、つくりと聞かせていただきますと、生涯わすれないのが、幸か不幸か私にはわかりませぬ……ことに、達人高士のお言葉には、必ず音節とおなじような律りつがございますものですから、それが音律の好きな私には、ひとりでに、すらすらと覚えられてしまう所以ゆえんでございます」

弁信は、ふらふらと庭の中を二足ばかりあるいて踏みとどまり、

「日蓮上人は、安房あわの国、小湊こみなとの浜でお生れになりました。こう

いう山国とちがいで、あちらは海の国でございます、大洋の波が朝な夕なに岸を打っては吼ほえているのでございます……

小湊へおいでになった方も多いでございましょうが、あの波の音をお聞きになりましたか……今も波の音が南無妙法蓮華經と

響いて聞えるのが不思議でございます、それは日蓮様がお生れになる以前から、やはり南無妙法蓮華經と響いていたのでございましょう……海の波がしらは獅子の鬣たてがみのようだと、人様が申しましたが、私共が聞きますと、大洋の波の音は、獅子の吼える音とおなじなのでございます」

虫の鳴く音から誘われた弁信の耳には、東夷東条安房の国、海辺の怒濤どとうの響が湧き起ったようです。

二

その時、塔の上では茂太郎が、けたたましい声で歌い出しました——

とっつかめえた

とっつかめえた

星の子を

とっつかめえた

星の子を

とっつかめえて

五両に売った！

五両の相場

五両の相場は誰^たが立てた

八万長者のチョビ助が！

けれども、下にいた弁信法師の耳には、この時海潮音^{かいちようおん}の響が
いっぱい、茂太郎のけたたましい声が入りませんでした。

弁信法師は今默然^{もくねん}として、曾^{かつ}て聞いた片海^{かたうみ}、市河、小湊の海
の響を思い出しているのです。梵音^{ぼんおん}海潮音^{かいちようおん}はかの世間の声に勝^{まさ}

れりという響が、耳もとに高鳴りして来たものですから、その余の声を聞いている違いとまがありません。

こうして、天上のあこがれと、地上の瞑想めいそうが、二人の少年によつて恣ほしいままにされている時、その場へ不意に一人の殺生者せつしょうものが現われました。

殺生者——といつても白骨の温泉へ出発した机竜之助が立戻つたわけではなく、極めて平凡なその道の商売人である獵師の勘八が、抜からぬ面かおで立戻り、ひよつこりとこの場へ現われたものであります。

「弁信さん、お前、そこで、あにゆう、かんげえてるだあ」

獵師の勘八は、いま山からもどつたばかりのなりで、鉄砲をかつぎながら言葉をかけたものですから、

「あ、勘八さんでしたか」

「今、け、えりましたよ」

「そうでしたか、獺はたくさんございましたか」

「大物を追い出すには追い出したですが、また追い込んでしまったから、これから出直しをしようと思ってけ、え、つて来たところですがよ」

「あ、左様でございましたか。そうしてその大物というのは何でございます」

「熊だよ」

「え、熊がこの辺にもおりますか」

「いますとも」

「お怪^け我^がをなさらないようになさいまし」

「有難う。それから弁信さん」

「はい」

「お前さんは、お銀様という人を知っているだろうね」

「お銀様——ああ、知っておりますよ、それがどうしましたか」

「その方を、わしが連れて来ましたよ」

「お銀様を連れておいでになった……勘八さん、お前こそ、どうしてお銀様を知っているのですか」

「山の中で拾って来ました」

「拾って……それは、どうしたわけでしょう」

「委くわしいことは、お銀様から直接じかにお聞きなすつたらいいだろう」

「本人のお銀様を、お前さんがここへ連れておいでになったのですか、そうしてお銀様はドコにおいになりますか」

「いま、庫裡くらの方へ御案内をして上げておいたから、お前、行つて、お目にかかっておやりなさい」

「有難うございます……そうしてなんでございますか、勘八さんがお連れ下すつたのはお銀様だけでございますか、それとも、あの若いおさ、むらいの方も御一緒にお帰りになりましたか」「あの方は、け、えりません、お銀様だけ一人連れてきました」「そうでしたか……お銀様のこれへおいでになつた理由は、私にも思い当ることがないではございませんが……」

と云つて弁信は、何か思案にくれました。

三

月見寺の一室に控えているお銀様は、ふと床の間に目をつけ、その草花を生け替える気になりました。

というのは、青銅の大花瓶に乱雑に投げ込んである秋草は、

多分清澄の茂太郎あたりの仕事だろうが、無論、式にも法にもかなつてはいない。そこで、お銀様が見かねて、それを整理する氣になつたのです。

かなり丹念に、花と枝を整理してゆくと、見ちがえるばかりのあざやかなものとなりました。

それでもお銀様は、まだ不足なものがあるように、活いけ終つた草花を、ためつすがめつして、ながめていること暫し、ここといつて改めたいところはないが、そうかといつて、これだけでは物足りない心持を、どうすることもできないらしい。

これは、どうしたものだろう。お銀様は、花を活ける手際には、相当の自信を持っているつもりなのに……

結局、これは、自分の活け方の悪いのではない、この方式で活けた花は、この室内にはうつらないのだ、と氣がつかしました。

花にも、手際にも、難があるのではない、この室そのものが、花と、手際とにそぐ、わ、ないのだ。つまりこの室が悪いのだという結論になりました。

ですから、この室を作り変えない以上は、この花に得心がゆくべきはずがない。室を作り変えるのは、家を作り変えるのだ。問題が、そこまで行くと、お銀様も不本意ながらこのままて安んずるほかはありません。

そんならば、この室のどこが悪いのだ、一見したところで、無理に作られているとも思われない。仔細に見たところで、世間並みの書院造りの手法様式と変ったものが、あろうとも思われないが、どうも気分そのものが気に喰わない。

と思つて、見廻しているうち、ふと、お銀様の眼にとまつたのは、床の間に立てかけであつた、長い白鞘物しらさやものです。これは、お

寺の床の間には似つかわしからぬもので、今までお銀様が気がつかなかったのは、燈火あかりの具合で、隅の柱に隱形おんぎようの印をむすんでいたからです。

お銀様は、ようこそあれと、その白鞘の長物をとって、自分の膝の上まで持つて来ましたが、やがて行燈あんどんの下で、半分ばかり鞘を抜き出してながめ入ったものです。

この時とても、お銀様はいつもするように、頭巾ずきんをまぶかにかぶっていたし、山をのがれてきたのにかかわらず、着物の着こなしは端然たるものです。

お銀様の眼が怪しくかがやきだしたのは、それから後のことで、息をはずませながら、刀をもとのままにおさめて、もとあつたところへ置く手先がふるえているのも不思議でしたが、刀を置いた手を、すぐに棚の戸にかけて、スルスルと押し開くと、中

をながめていましたが、手をさしのべて、中から引き出したのは、若い娘などの持ちたがる蒔絵まきえの香箱こうばこであります。

それを、大事そうに、以前のところまで持つて来たお銀様は、嫉むねたような目つきと、おそれをなすような胸のさわぎで、箱の蓋ふたを払つて見ましたが、中にはやわらかな紙が二三枚、丁寧にたたんで入れてあるだけのものでした。

これは、水につけて蔭干しにして、やわらかくもみ上げた奉書の紙で、これで刀剣の中身をぬぐうのだとは、お銀様もち、やんと知り抜いているので、かたえに刀剣がある以上は、ドコかにこれが必要ならぬ——

それは、家があれば台所のあるのとおなじことで、お銀様も、幾度か、机竜之助のために、この紙を用意してやった覚えがあるのですが、現在、ここにあるこの紙は、お銀様がこしらえて

やつたものではありません。

そう思つて見ると、自分が常にこしらえてやつたものよりは、揉み方がやわらかである——お銀様は、急にその香箱を持つて、自分の鼻先に持つて来ると、紛^{ぶん}として立ちのぼる香りは椿油の香いであります。椿の油は、刀剣を愛する人の好んで用うるものであると共に、髪の毛の黒いことを望む女の人は、誰でもこれを珍重しますから、ドチラにしてもその香いは不自然ではありません。

けれども、お銀様は、その油の香いが嫌でした。この場合、お銀様には、奉書の紙の揉^もみ方のやわらかいのが癩^{しやく}にさわつたと見え、この紙を取り上げてズタズタに引裂いた時です、

「お嬢様——」

と弁信法師のおとずれの声が聞えたのは——

「はい」

お銀様は引裂いた紙を、従容^{しょうよう}として香箱の中に詰めながら返事をしました。

「弁信さんですね」

「ええ」

と答えたその弁信は、この室へ入って来たものではありません。それは次の間にいるのだから、また廊下の辺にでもたたずんでいたか、夜来て、夜この室に入ったお銀様には、更に見当がつきません。

「お嬢様」

再びお銀様の名を呼んだ弁信は、前の通りどこにいるか、所在を知らせないで、

「あなたが、何のためにここへおいでになって、何を、私にお

たずねになろうとするのか、それは、私によくわかっております。しかし、お嬢様、たとい、あなたがおたずねになろうとするほどのことを、私がいつさい存じておりましたにしても、それを残らず申し上げねばならぬという責^{せめ}は、私にないものと御承知下さいまし……つまり、私は、あなたがこれへおいでになつて、私にお尋ねになろうとすることに、いつさい御返事を申し上げないことに、きめてしまいました」

何も尋ねられない先に、弁信はこういつて予防線を張つてしまったのは、尋ねられないまでも、その先、その先をいつてしまいたがるこのお喋^{しゃべ}り法師としては、異数の現象でありました。

「それでは無理におたずねは致しますまい」
とお銀様が冷やかに答えましたが、

「お前が教えてくれなくても、わたし一人で探してみせるか

ら……」

と針をふくんでいいかえました。しかし、この針も弁信法師の胸には立たず、

「すべての女の人は、男を畏おそれますけれども、あなたは男を畏れるということを知りませぬ、通例の場合では、女一人を男の前へ出すことは危険でございますが、あなたに限つては、女の前へ男を出すことがあぶないのでございます」

弁信法師一流のいい廻しで、前提を置き、言葉をついで、その註釈を述べようとする時、

「今晚は……」

とその間へハサまったのは、それは弁信の声ではありません。お銀様の挨拶でもありません。清澄の茂太郎が、自分の身体が押しつぶされるほどの夜具蒲団やぐふとんを荷になつて、お銀様のいるところ

へやつて来たのです。

「御苦労さま」

とお銀様が言いました。

「ああ、重たかった」

夜具蒲団を頭から投げおろした茂太郎が、ホッと息をつく有様を、お銀様がつくづくとながめて、

「随分重かったでしょう、よく、これだけ持てましたね」

「随分重かったよ……どちらへお休みになりますか」

といつて、茂太郎は座敷の部分を、キョロキョロみまわしますと、

「ええ、ようござんす、そうして置いて下さい」

「そうですか、それじゃ枕を持って来て上げましょう」

茂太郎は取ってかえしました。

お銀様は立つて、その蒲団を程よいところへしきのべた時分には、弁信法師のことはわすれていました。弁信もまた、それきりで、どこにいたのだから、どこへ行ったのだから、最初からわからないままです。

まもなく一つの箱枕を持って来た清澄の茂太郎は、燃ゆるばかりの緋絹ひぎぬの広袖の着物を着ていました。

そこでお銀様が、

「たいそう綺麗きれいな着物を着ていますね」

「ええ、もとは坊さんの法衣ころもだったのです、それをお雪ちゃんこしらが、あたいに拵こしらえ直してくれました」

「そうですか」

茂太郎は今、下着には、あたりまえの袷あわせを着て、その上へいっぱいいぎように緋絹の広袖を着ているのですから、その異形のよそおい

が、たしかに人の目を引きまゝす。けれども、その緋絹が無用になつた坊さんの法衣ころもを利用したものと思えば、出所が知れてゐるだけに、不思議でもなんでもありません。

「お雪ちゃんというのは、あなたの姉さんですか」

お銀様は、この子供の言葉尻を利用することを忘れませんでした。

「いいえ、お雪ちゃんは、ここのお寺の娘さん分ですよ」

「そうですか。そのお雪ちゃんは、いまもここにいて……？」

「いいえ……」

茂太郎が頭を振るのを、お銀様は透すかさず追いかけてました。

「此寺ここのにはいないの？」

「ええ、この間までいましたけれど……」

「この間まで……そうして、今どこへ行つたの？」

「温泉へ行きました」

「温泉へ……？」

「ええ」

「どこの温泉」

「さあ……」

お銀様の追窮が急なので、茂太郎に困惑の色が現われましたから、お銀様も、ちよつと手綱たづなをゆるめる気になって、

「お雪ちゃんという娘さんは、幾つぐらいのお歳なの」

「そうですね、あたいは聞いてみたこともないんだけれど……十七か八でしょう」

「そうして、お雪ちゃんは誰と温泉へ行きました」

「誰とだか……」

「お前、知らないの？」

「ええ。だけでも、一人で行ったんじゃないんだよ」

「一人じゃないの、幾人で？」

「三人連れで……」

「その三人は、誰と誰？」

お銀様の追窮が、やつぱり急になってゆくので、茂太郎の困惑が重なるばかりです。

「それは、わかつてるにはわかつてるが、弁信さんが、いうなといったからいわれない」

「そう……」

お銀様も、それ以上は押せなくなりました。しかし、これだけ聞けば、全然得るところがなかったとはいえない。

そうするとお銀様は、十七八になるお雪という娘の骨を、食い裂いてやりたいほど憎らしくなりました。

「おばさん、お前はなぜ頭巾ずきんをかぶっているの……？」

その時、不意に茂太郎が反問しました。

「これはね——」

お銀様は行燈あんどんの方へまともに面おもてを向けて、

「お前さん、わたしの面かおを見たいの？」

といいました。

「見たかないけれど、家の中で頭巾をかぶっているのはおかしいじゃないか」

「お前、おばさんの面かおが見たいんでしょう、見たければ見せて上げましょうか」

「見たかないけれど……」

「見たいんでしょう……」

といって、お銀様は膝を進ませて茂太郎の手を取りました。

「見たければいくらでも見せて上げるから、この頭巾の紐ひもを解いて頂戴……」

「だって……」

「いい児だから解いて頂戴……」

お銀様は茂太郎を膝の上へ抱き上げ、そうしてあわただしく自分の頭巾を取ってしまいました。

「おばさん、何をするの」

清澄の茂太郎がもがくと、お銀様は、

「何もしやしません、わたしは鬼子母神きしもじんの生れ変りですからね」といって、放そうとはしませんから、

「いやだ、いやだよ、おばさん」

「怖こわありませんよ、鬼子母神は人の子を取って食べるのですけれども、わたしは食べやしません、可愛がるだけなのよ、わ

たしは千人の子供を可愛がつてみたい」

「いやだつてば、おばさん」

「いいのよ、わたしの面を^{かお}ごらん」

「え」

といつて茂太郎は、頬^ほ摺^{おず}りをするほどさしつけたお銀様の面^{かお}を

見つめると、

「怖^{こわ}い面でしょう、わたしの面は……」

人に隠して見せまいとつとめた自分の面を、この時に限つてお銀様は、打開いて茂太郎に見せようとします。

満面が焼けただれて、白眼^{しろめ}勝ちの眼が恨みを含んで、呪^{のろ}いそのもののような面をまともに見た人は、誰でもゾツとして身の毛をよだてないものはありません。しかし茂太郎は、それを怖れないでうるさがり、

「怖がありません、おぼさんの面は怖くないけれども、こうやって抱かれるのが窮屈でならない、放して下さい」

「お前、ほんとうに、わたしの面を怖いとは思わない？」

お銀様は、なお、おびやかすように茂太郎の面に、呪いそのもののような自分の面を見せようとすると、

「怖がありません、あたいは人の怖がるものを怖がらないけれど、窮屈なことがいちばんきらいなのよ」

「いいえ、おぼさんの面はこわい面でしょう、それにくらべるとお前の面は、綺麗な面ね」

「いいえ、怖がありません、あたいは蛇だって、狼だって、何だつて怖いと思ったことはないけれど、人に可愛がられるのが大嫌いさ、息が詰まるんだもの……」

「お前の名は何というの？」

「清澄の茂太郎」

「茂ちゃんていうの」

「ああ、おばさん、放して頂戴よ、息苦しくて仕方がないからさ」

「おとなしくして、鬼子母神様きしもじんさまの子におなりなさい」

「放して下さい、ほんとに熱苦しいんだもの……よう、おばさん」

「おとなしくしておいで——」

「いやだ、いやだ……おばさん、何をするの、放さないの？」

「わたし一人で淋しいから、茂ちゃん、泊っておいでなさいな」

「息が詰まるじゃないか、おばさん、どうしても放さなけりや、あたい、口笛を吹いて狼を呼ぶからいいや」

「何ですって、狼を呼ぶ……？」

「ああ、あたいがここで口笛を吹くと、狼が出てくるんだから……」

「まあ怖い……お前は狼より、わたしの方が嫌いなのか？」

「だって、息がつまりそうなもの」

「あたしの顔は、狼より怖い……」

「そんなことはないけれど……」

「わたしの息は、蛇の息より、熱苦しいの？」

「おばさん、堪忍かんにんして頂戴ね、あたいは怖いものはないけれ

ど……」

「だから、おとなしく、おばさんのいうことをお聞きなさい、あたしは千人の子供を食べる鬼子母神様の生れ変わりなんですもの」

「いけませんよ、おばさん。あ、それじゃ、あたいたい口笛を吹きますよ」

「吹いてごらん、いくらでも」

お銀様は、その呪いのろそのもののような面おもてに、凄すごい笑いを漂わ
せて、茂太郎の口をおさえました。

四

お銀様の膝をのがれ出た茂太郎は、弁信に向っていいました、
「弁信さん、奥にいるおばさんはこわいおばさんですよ、人の
子を取って食べるんですとき」

「そばへ寄らないようにおし」

「嘘でしょう、千人の子供を取ってたべるなんて……」

「それは鬼子母神のことです」

「でも、鬼子母神様の生れ変りだっていいましたよ。ナゼ、鬼

子母神様は、人の子を取って食べるの？」

「それは愛に餓えているからです……」

弁信法師はこういつて、その話を打切つて、二人は例の如く枕を並べて寝に就きました。

その夜は無事。

翌日になつて、またしてもこの寺へ一人の珍客がやつて来ました。

それは武州高尾山の半ぺん坊主が、やけに大きな奉加帳ほうがちょうを腰にブラ下げて、この寺に乗込んで来たことで、

「こういうわけで、今度お許しが出ましたから、またまた山を崩し、木を伐きつて、車を仕掛けることになりました。ところで、役人の方はうまくまるめちまいましたが、工事をうまくまるめ

るには、別にそれ、丸いものが余分にかかりますでな……」
といつて、頤あごを撫でながら奉加帳をくりひろげたものです。

奉加帳をひろげて、べらべらと能書のうがきを並べた末、

「さて高い声ではいえませんが……そうして登りが楽になりますてえと、山の上へ金持がバクチを打ちに参ります、商売人を連れて、おんかでバクチを打ちに参ります、これがそのテ、といつては出しませんが、この連中の納める杉苗が大したものなんで。それにのぼりが楽になりますてえと、連込みの客もだいぶ入つてまいります、こういうのが、また杉苗を余分におさめるといふわけでございますから……その杉苗でございますか、そんなに杉苗をもらつてどうするのだとおっしゃいますか……へ、へ、それは徳利の中でも、半ぺんの下でも、どこへでも植えますから御心配下さるな。そういうわけで、この車が

出来さえすれば、一割や二割の配当は目の前でございます」

半ぺん坊主は、言葉たくみに説き立てました。

その時、応対に出たのが幸か不幸か、弁信でありました。

弁信は半ぺん坊主のいうところを逐ちくいち一聞き終り、その終るを待って、

「御趣意の程、よく承うけたまわりました。承つてみますると、私はそう

いうことを承らない方が仕合せであつたという感じしか致さないのでが残念でございます。あのお山は、私もついこの間まで御

厄介になっておりましたから、よく存じておりますが、車を仕

掛けて人様を引き上げねばならぬほどの難渋なんじゆうなお山ではござい

ませぬ、斯かよう様に眼の不自由な私でさえも、さまで骨を折らずに

登ることができましたくらいですから、御婦人や子供衆たちでも御同様に、さまで骨を折らずに、お登りになることができよ

うと存じます。よし、多少、お骨は折れるに致しましても、ここに信心の有難味もございまして、登山の愉快というものもあるのではございませぬか、信心のためには、木曾の御岳山までもお登りなさる婦人たちがあられるではございませぬか。それにくらぶれば、あのお山などは平地のようなものでございます。それに承れば、せつかく、代々のお山の木を切りまして、それを売払っていくら、いくらとのお話でございしますが、昔のおきてでは、一枝を切らば一指を切るともございます、お山によつては、山内の木を伐^きつたものは、死罪に行うところすらあるのでございます、それをあなた方、多年、そのお山の徳によつて養われている方が先に立つて、そういうことをなされて、御開山方へ何とお申しわけが立つのでございましょう……なおお聞き申しておりますと、せつかく信心の方々が杉苗を奉納なさるのを、

あなた方は徳利の中へ入れて、飲んでおしまいになつたり、半ぺんの下へ置いて、食べておしまいなさるそうですが、そうして、あなた方は、自分で自分の徳をほろぼしておしまいになることを、自慢にしておいでなさるのですか……樹木は地上の宝でございます、木を植ゆるは徳を植ゆるなりと申されてあります、あなた方の御先祖代々が、せっかく丹精して、あれまでに育てて靈場を莊嚴そうごんにしてお置きになるのを、むぎむぎと伐つて、それでよい心持が致しますか……また山の自然の形には、自然そのままで貴いところがあるのでございます、これを切り崩して、後日の埋め合わせはどう致すつもりでございますか。俗世間でも、家相方位のことをやかましく申しますのは、一つは、この自然さながらの形を、重んずるところから出でているのではございませぬか……それほどまでにして、車を仕掛けて

あなた方は、いったい、だれをおよびになろうという御了簡ごりようけんな
のですか。聖衆は雲に乗っておいになりまする、信心のとも
がらは遠きと、高きを厭いとわぬものでございます、ゆさんの人た
ちは足ならしのために恰好かつこうと申すことでございます……ところ
の幽閑、これ大いなる師なりと古人も仰せになりました。出家
のつとめは、俗界の人のために清い水を与えることでございま
す、清い水を与えるには、清いところにおらなければならぬ
約束ではございませぬか……山を莊嚴にし、出家が空閑におる
のは、俗界の人に、濁水を飲ませまいがためでございます。釈
尊は雪山せつせんへおいでになりました、弘法大師も高野へ精舎しょうじやをお営
みになりました、永平の道元禅師は越前の山深くかくれて勅命
の重きことを畏かしこみました、日蓮聖人も身延の山へお入りになり
ました、これは世を逃のがれて、御自分だけを清くせんがためでは

ござりませぬ……源遠からざれば、流れ清からざるの道理でございます。もし、あなた方が、どうしても人の世のまん中に立ち出で、衆と共に苦しみ、衆と共に楽しむ、の思召おぼしめしでございすならば、いつそ、浅草寺せんそうじの觀世音菩薩のように、都のまん中へお寺をおうつしになつては如何いかがでございますか……」

弁信法師が一息にこれだけのことをしゃべつて、なお立てつづけようとするから、半ぺん坊主は青くなつて、

「話せねえ坊主だなあ」

奉加帳を小脇に、逃ぐるが如く走り出しました。

五

半ぺん坊主が出て行つた日の夕方、宇津木兵馬ひょうまが飄然ひょうぜんとして

この寺に帰つて来ました。

その晩、前と同じ部屋で、兵馬は燈下こうりに行李を結びながら、
「私は、明日再び山へ入ります、そうして今度は当分出て来ないつもりです」

と言うと、あちらを向いていたお銀様が、

「どちらの方の山へ？」

とたずねました。

「以前の方の山を、もう少し深く、入れるだけ入ってみようと思います」

「そちらの山を深く行きますと、温泉がございますか？」

「温泉……あちらの方面には温泉がありません」

「わたしは、また温泉のある方の山へ行つてみたいと思います」
「そうですか……では、信州の方面へおいでになるとよろしう

ございます、甲武信と申しましても、甲州と武州には、温泉らしい温泉がありません」

「あなたは御存じですか」

とお銀様があらたまった質問を、兵馬に向つて試みようとしま

す。

「何でございますか」

「このごろ、此寺ここのの娘さんはドチラの温泉へまいりましたか」

「ああ、お雪ちゃんですか……あの子は、そうですね、どこでしたか……」

と兵馬が小首を捻ひねりました。

「あなたも、そのお雪ちゃんという娘さんを御存じでしょうね」
「知っていますとも、親切なよい娘さんです。わたしもそのお雪ちゃんの親切で、この寺へ御厄介になる縁になったのです」

「そうですか。その娘さんはひとりで温泉へおいでになりましたか？」

「いいえ、ひとりではありますまい、娘さん一人では遠くへは出られますまい……誰か近所の人が附いて行ったようです」

「その近所の人というのは、誰ですか御存じ？」

「知りません、私のいない間のことですから……」

「わたしも、そのお雪ちゃんとやらの行った温泉へ、行ってみたいと思うのですが、それは、あなたのおいでになろうとする山の方角とは違いますか」

「さあ、それが……私の行こうとする方面には、こころあたりの温泉がないのです」

「誰も、そのお雪ちゃんという娘さんの行った先の温泉を、知らないというのが不思議ではありませんか」

「知らないはずはありますまい、留守の人に尋ねてごらんになりましたか」

「尋ねてみましたけれど、誰も教えてはくれません」

「それでは、あとで私が尋ねてみて上げましょう、誰か知っていなければならぬはずですよ」

そこで、兵馬は、少し進んでたずねてみようかと思いました。いったい、この不思議な女の人は、誰をたずねてこの寺へ来たのだ。男の姿に身をかえてまで、一人旅をしてたずねて来たのは、どうもお雪という娘をめぐって来たのではないらしい。よくよくの深い仔細しさいがあればこそだろうが、今まで兵馬には、そんなことを立入って、たずねてみるほどの余裕がないのでした。今となって、燈下にうつるこの女の呪のろわしき影法師を見ると、何か知らん、強くわが胸を打つものがあるように思われてなら

ぬ……男装した女。行くにも、住まるにも、覆面を取らぬ女……
その生涯にはかぎりなき陰影がなければならぬ。道はちがうが、
われも多年人を求むる身だ。こう思つて兵馬が、新しい感興に
駆かられた時に、

「あなた、もし、この刀の持主を御存じはありませんか？」

といつて不意に立つてお銀様が持ち出したのは、例の床の間の
しらさや
白鞘の一刀です。

宇津木兵馬はその刀を見て、こんな刀が、この寺にあつたの
かと疑いました。

行李をまとめていた手を休めて、お銀様の手からその刀を受
取ると、多大の疑惑を以て、その刀を抜きにかかりました。

兵馬はまだ刀を見て、その作者を誰といいあてるほどの眼識
はない。けれども、刀の利鈍と、品質はわかる。ことに一たび

実用に用いた刀……露骨に言えば、最近において人を斬ったことのある刀は、一見してそれとわかる。到るところの社会で、血のりを自慢の刀をよく見せられていたものだから――

ところで、寺院には似げもない^{ながもの}長物を、思いもかけぬ人の手で見せられて、^{さや}鞘を払って見るといつそう^{きょうもく}驚目に^{きょうもく}価するのは、その刀が最近において、まさしく人を斬った覚えのある刀に相違ないと見たからです。

十分に拭いはかけたつもりだけれども、拭いが足りない。

そこで兵馬は、まずこの刀の作者年代が、誰で、いつごろ、ということとは念頭にのぼらないで、

「これは寺の刀ですか、それとも誰か持って来たのですか？」

「この床の間にあったのです」

「それでは、寺の物ですな」

「そうかも知れません」

兵馬の疑点が一步ずつ深く進んで行きました。身に寸鉄を帯びざることとは、智識の誇りではあるにしても、寺に刀があつて悪いといふ^{おきて}掟はない。ただ不審なのは、近き既往においてこの刀が、まさしく血の味を知つていたとのことです。この寺の住持は老齡の身で、盗まれたものさえ、訴えては出ないほどの仁者である。それが、この刀を振り廻そうはずがない。それでは弁信か、茂太郎か。どちらにしても、想像の持つて行き場がないではないか。まして、お雪ちゃんにおいてをや。

同時に閃^{ひら}めいたのは……閃めかなければならないのは、過ぐる夜のことで、山窩^{さんか}のものだという悪漢が二人、この寺に押込んで、泊^{はす}り合わせた兵馬のために傷つけられて逃げた、それが町の外れの火の見櫓の下でおおかみに食われて死んでいた、罰^{ばち}

はテキ面だと人をして思わしめたのは、遠くもない先、つ頃のこ
とで、その当座は——今でも、誰も狼に食われたものと信じて
疑わない。事実また狼に食われたものに相違ないが、当時、駈
けつけて親しく検視をやってみた兵馬だけは、単に狼に食われ
ただけで済ますことはできなかった。けれども、あの場合、狼
に食われたことに一切を解決してしまった方が、民心を安んず
る上において都合がよかったので、兵馬もこれをこぼまなかつ
た。しかしあれば、食われたのは後で、斬られたのが先である。
一刀のもとに斬って捨てた手練のほどに戦おのいたのは——戦くだ
けの素養のあったのは、たしか兵馬一人であつたはず。

これほどの斬り手がどこにひそんでいたか。これは今以て兵
馬には解決がついていないところへ……見せられたこの刀が、
激しい暗示を与える。

「誰がこの刀を持っていましたか？」

「それは、わたくしから、あなたにたずねているのです」

「いや、私にはわかりませぬ、あなたにお尋ねしなければなりません。あなたはこの刀の持主を尋ねて、この寺へおいでになったのですか、その人は、何という人で、何のためにこちらへ来たのですか」

「それは人を殺すことを何とも思わない人です……ですけれども、わたしはその人が忘れられないのです」

「あなたのおっしゃることがよくわかりませぬ」

「それでは、もう一つ付け加えましょう、その人は目の見えな人です……どういう縁故でこの寺へ参りましたかは存じませぬが、今はこの寺にはいませんそうで……温泉へ行ってしまうそうです」

「まだわかりませぬ、もう少しお聞かせ下さいまし」

話が、それから進むと、お銀様は、ついに兵馬に向つて、

「机竜之助」

の名を語らねばなくなりました。そうでなくてさえ一語一語に、何かの暗示を強^しいられていた兵馬は、最後に「机竜之助」の名を聞いて、ながめていた白刃を伝つて、強烈な電気に打たれたように振り立ちました。

「あ、それだ、その人ならば、あなたが尋ねる人ではない……」
兵馬の昂奮がお銀様を驚かしたのみならず、あわただしく刀を鞘^{さや}に納めて、投げ出した行李^{こうり}を再びひきまとめて、

「私は、あなたと共に、その温泉へ行かなければならぬ、その温泉とはどこですか」

兵馬が最初の当途^{あてど}もない甲武信の山入りを放擲^{ほうてき}したのと、お

銀様と共に、その未だ知られざる温泉へ、発足しようと思ひ立つたのとは同時です。

ここに運命の極めて奇なる因縁で、宇津木兵馬とお銀様とは、その翌日、行を共にして尋ね人のあとを追うことになりました。温泉の名をハッコツとだけは、知ることができましたが、そのハッコツとはどこ。それは誰に聞いても要領を得ることができませんでした。

今ならばハッコツの音から解いて、白骨しらほねの字をさぐるのはなんでもないことですけれども、その当時にあつて、日本人の一人も、日本アルプスの名を知らないように、信濃しなのと飛驒ひだの境なる白骨温泉の名は、誰の耳にも熟してはおりませんでした。

ともかくも、温泉として聞えたる信濃の国、諏訪の地名から推して、多分それに近くとも遠くはない地点だろうとの二人の

想像は、さのみ無理ではありません。そこで二人は、まず諏訪の温泉を目標として、探索の歩を進めることに相談をきめました。

欲望を異にして、目的を同じうするこの悪戯あくぎに似たるほどの奇妙な道連れは、単に道連れとしてはおたがいに頼もしいものでありました。なぜならば、お銀様は長途の旅に、兵馬ほどの護衛者を得たわけであり、兵馬はまた今の最も欠乏している路用の上に、最も有力なる後援者を得たということになるのです。事実、お銀様はこの時もまだ多分の金を懷中に入れてありました。なお、これから諏訪の方面へ向けて旅立ちの途中、故郷の有野村へでも手を入れようものなら、自分の所有のうちから、誰にもはばからずに、ほとんど無限の融通をつけるのは何でもないことです。

お銀様は今も、持てる金のすべては兵馬に附託して、これで旅の用意の万事をととのえるように、そうして乗物も二人分、通しを頼んでもらいたいということを行いました。

しかし兵馬は、お銀様だけは都合のよい乗物で、自分はまだでもそれに附添うて、徒歩で行こうと決心をきめて、それによつて旅行の準備を進めてしまいました。

兵馬は計らずして、敵かたきの行方ゆくえに一縷いちるの光明を認めたと共に、

思い設けぬ富有の身となりました。附託されたかなりのお金は、

いやでも自分が保管するのが義務のようになってゐる。この奇

怪にしてしかも鷹揚おうようなお嬢様は、今後必要に応じて、いくらで

も兵馬のために、支出することを辞せない様子を見せてゐる。

あてどもない山奥に、半ば自暴やけの身を埋めに行こうと決心した兵馬は、ここにゆくりなく、幸運の神に見舞われたようなも

ので、暫く茫然と夢みる心地でいましたが、若いだけに早くも心に勇みが出て、踏みしめる足許もなんとなく浮き立つように感じ、ほとんどこの何年来にもなかったよろこびに、心が跳るおどのであります。

そうかといつて、この世に代価を払わない幸運というものは一つもない。兵馬にこの幸運を与えた祝福の神は、人の子を取つて食う鬼子母きしもの神であつてみれば、早晚何かの代価を要求せられずしては済むまいと想われる。

六

駒井甚三郎は、房州の洲崎すのさきに帰るべく、木更津船きさらづふねに乘込みました。

その昔お角が、清澄の茂太郎を買込みに行く時に乗込んで、大難に遭^あつたのとおなじ航路で、おなじ性質の乗合船。

なるべく人目に立たないように、駒井は帆柱のうしろ、荷物の隅に隠れていました。

乗合の客は、例のおなじように、士分階級をのぞいた農工商のものと、今日は、それ以外の遊民が少なからず乗合わせている。

遊民というのは、玄治店^{げんやだな}の芝居に出てくるような種類の人。赤間の源左衛門もいれば、切られないの与^よ三^さもいる。お富を一段上へ行つたようなお角がないのが物足りない。

しかし、きょうは、天気も申し分なく、近き将来の時間において、思い設けぬ天候の異変もこれあるまじく、たとえ、お角が乗合わせていたからとて、人身御供^{ひとみごくう}に上げられる心配もまず

ありそうなことはなく——そうそうあられてはたまらない——それで江戸湾内を立ち出でる木更津船の形は、ひろしげ広重に描かせて版面にしておきたいほど、のどかなものです。

隠れているといつても、なにしろ限りある木更津船の甲板の上で、書物を開いている駒井甚三郎の耳には、乗合船特有の世間話が、連続して流れ込んで来るのを防ぐことはできない。ある時は耳を傾けて、これに興を催してみたり、ある時は書物に念を入れて、それを聞き流したりしているうちに、こまつたことには、例の遊民の連中がいつか気を揃えて、いたずらを始めてしまったことです。

はんかた「半方が二十両あまる、ないか、ないか」
なかぼんと中盆が叫び出すと、

「おい、音公、お前に五本行つたぞ」

貸元が念を押す。

「合点だ^{がつてん}」

向う鉢巻が返答する。

「六三に四六を負けるぞ、負けるぞ」

と中盆が甲^{かん}高^{だか}声^{ごえ}で呼び立てると、

「は、ぐり、をうつちやれよ、打棄^{うっちゃ}れよ」

と片肌脱^{かたはだぬぎ}がせき立てる。

「一番さいてくれ、さいてくれ」

鳴海^{なるみ}の襦袢^{じゅばん}が居催促をする。

「金公、それ三本……ええ、こつちの旦那、お前さんは十本で
したね」

貸元は盛んにコマを売る。

「いいかげんに、やすめを売れやい」

「勝負、勝負……」

駒井甚三郎も、これには弱りました。

この連中も最初のうちは、やや控え目にしていたのが、ようやく調子づいて来ると、あたり四方に遠慮がない。もろはだぬぎ諸肌脱になった壺振役が、手ぐすね引いていると、こえめ声目を見る中盆なかぼんの目が据わる。ぐるわの連中が固唾かたずを呑んで、鳴りを静めてみたり、またけたたましくはしやぎ出したりする。

こうなつては隠れていることも、書物を読むこともめぢやめぢやです。駒井は一方ならぬ迷惑で、避難の場所を求めようとしたが、やはりかぎりある船中に、人と荷物でなかなかそのところがない。ひとり駒井が迷惑しているのみならず、乗合いの善良な客はみな迷惑しているのです。しかし、善良な客が進んで船内の平和を主張するには、どうも相手が悪過ぎる——船頭

でさえ文句が附けられないのだから、暫く、無理を通して道理をひっこめておくより思案がないらしい。

駒井甚三郎とても、相手をきらわれないというかぎりはない。見て見ないふりのできるかぎり、立ち入りたくない。しかし、この船中で見渡したところ、かりにも土分の列につらなっている身分のものは、自分のほかにはいないらしい。万一の場合、義において自分が、船内の平和を保つ役目を引受けなければならぬのか、とそれが心がかりになりました。その時分、勝負がついたと見えて、船の上はひっくりかえるほどの騒ぎです。

こういう場合の役まわりは、宇治山田の米友ならば適任かも知れないが、駒井甚三郎ではあまりに痛々しい。

それを知らないで、調子づいた遊民どもは、全船をわが物顔に熱興している。

彼等が、熱興だけならば、まだ我慢もできるが、船中の心あるものを迷惑がらせるのみならず、その善良な分子をも、この不良戯ふりようぎのうちへ引込まずにはおかなのが危険千万です。

いわゆる良民のうちにも、下地したじが好きで、意志がさのみ強くないものもあります。見ているうちに乗気になつて、鋸山のこぎりやまへ石を仕切しきりに行く資本を投げ出すものがないとはかぎらない。くろ、うとの遊民どもも、実はそのわなを仕掛けて待つてゐる。

「へ、へ、へ、丁半さいは采さいコロにかぎるて、なぐささい、じゃあるめえな」

「じようだんいいなさんな」

「五貫ばかり売つてもらいてえ」

罷まかり出でたのは乗合しろうといの中の素人にしては黒つぽく、黒人くろうとにしては人がよすぎる五十男。

「合点だ、さあ五貫……」

貸元が景氣よくコマを売る。

「丁が余る、丁が余る……いかがです、旦那、負けときまずぜ、や、すめを一つお買いになつては……」

「へ、へ、へ」

前のよりはいつそう人のよかりそうな、純乎じゆんこたる素人が、ワナを眼の前につきつけられて、まんざらでもない心持。

こうやつて彼等の景氣は増すばかりで、心あるものの氣持は苦々にがにがしくなるばかりです。

暫くしている間に、最初にしたり、面がをして出た半黒人はんくろうとも、まんざらでもない心持の純素人じゆんしろとも、グルグルとグループの中へ捲き込まれてしまうと、中盆なかぼんが得意になつて、

「運賦うんぷてんぷ天賦のものですから、本職だつて勝つときまつたもので

はなし、ドコへ福がぶつつかるかわかりませんや」

いざやと壺振りが、勢い込んで身構えをする。

二三番するうちに、新入者がまた二三枚加わる。加わった当座は多少の目が出ると、有頂天うちようてんになり、やがてそのつぎは元も子もなくして、着物までも脱ぎにかかる。取られれば取られるほど、眼が上うわずつてしまいう有様が見ていられない。

こうなつてみると駒井甚三郎も、相手を憚はばかつてはいられない。そこで思いきつて、一座の方へ進み出でました。

「これこれ、お前たち、いいかげんにしたらいいだろう」

「何が何だと……」

諸肌脱もろはだぬぎで壺振りをやっていたのが、まずムキになつて駒井に食つてかかりました。

「そういうことをしてはいけない、乗合いのものが迷惑する」

と駒井が嚴然としていいました。

しかし、この遊民どもは、駒井が前の甲府勤番支配であつて、
ともかくも一国一城を預かつて、牧民の職をつとめた経歴のあ
る英才と知る由もない。このことばには莊重なものがあつて、
嚴として警告する態度はあなどり難いものがあつたとはいえ、
今、異様の風采ふうさいをして、ことには女にも見まほしいところの青
年の美男子であるところに、彼等の輕侮のつけ目がある。そう
して見廻したところ、相手は一人であるのに、自分たちは血を
すすった一味徒党でかたまっている。こいつ、一人を袋だたきに
して、海の中へたたき込むには、何の雜作ぞうさもないと思つたから、
多少、事を分けるはずの貸元も、中盆なかぼんも、氣が荒くなつて、
「何がどうしたんだつて——人の楽しみにケチをつける奴は殴なぐ
ちまえ」

「殴つちまえ」

風雲実に急です。駒井もこうなつては引込めない……かえすがえすも、米友ならば面白いが、駒井では痛ましい。

その時、帆柱のかげからムツクリとはね起きた六尺ゆたかの壮漢、

「こいつら、ふざけやがつて……」

盆ゴザも、場錢も、火鉢も、煙草も、手あたり次第に取つて海へ投げ込む大荒れのおおあ勇者が現われました。

七

これほどの勇者が、今までどこに隠れていたか、駒井も気がつかなかつたが、乗組みの者、誰も気がついていなかったよう

です。

不意に飛び出したこの六尺豊かの壮漢が、痛快というよりは乱暴極まる荒れ方あをして、あつというまもなく、賭場とばを根柢くつがから覆えしてしまいました。

さしもの遊民どもが手出しができないのみならず、あいた口がふさがらないのは、その荒れあつぷりの乱暴と迅速とのみならず、六尺豊かの髯面ひげづらの大男の、威勢そのものに吞まれてしまつたからです。

といつてこの六尺豊かの髯面の大男、そのものの人体にんていがまた甚だ疑問で、相手を向うに廻して荒れていなければ、これが無頼漢ぶらいかんの仲間の兄貴株であろうと見るに相違ない。そうでなければ、船頭仲間の持余し者と見たであろう。しかし、よく見ると、無頼漢でもなければ、船頭仲間の持余し者でもない、れつきとし

たこの乗合船のお客様の一人で、身なりこそ無頼漢まがいの粗野な風采をしているが、寝ていたところをよくごらんさい、両刀が置きっぱなしにしてあるのです。しかもその長い方の刀は、人の目をおどろかすほどすぐれて長いものです。

それですから、さしもの遊民どもも、一層おそれをなしました。

「人の安眠を妨害する奴等、船底へ引込んで神妙にしとれ」

中盆と壺振の二人の襟首をひっぱって、船底の方へ投げ込んでしまったのは、あながち怪力というわけではない、吞まれてしまった遊民どもが、自由自在になつてゐるのです。

そこで、さしも全権を振^{ふる}つていたこの連中が、一時に閉塞^{へいそく}して、ことごとく船の底へ下積み^{きんこ}にされてしまいました。

船中の者も、この勇者を欽仰^{きんかう}することは一方^{ひとかた}ではありません。

その勇氣といい、筋骨といい、身に帯びたすばらしい長短の刀といい、天下無敵の兵法ひょうほうの達者、誰が見ても疑う余地はありません。最初の口火を切った駒井甚三郎の影は、この勇者の前に隠されて、一人もそれを讃仰さんぎょうするものはないのです。

駒井もまた、この豪傑が不意に現われて、自分の解決すべき難関を、一気に解決してくれた幸運をよろこびましたから、讃仰者のないのを恨みとする理由はありません。こういう場合においては、第一声を切ることが勇者の仕事で、その出端でばなを利用して敵を驚かして、一気に取挫とりひしぐことは、喧嘩の気合を知っているものにはむしろ容易たやすいことですが、駒井は閑却されて、あとから出た豪傑が人気を独占しましたけれど、駒井にとっては不足どころではありません。

こうして一時無頼漢どもに占領されていた船の甲板は、再び

良民の天下となつて、乗合船そのものの平和な光景が回復されました。

駒井能登守は思いました。これはこれ一場の喜劇のようなものだが、一代の風潮もこの通りで、進んで身を挺するの勇者さえ現われるれば、悪風を退治するのはむしろ容易たやすいことで、悪は本来退治せられるがために存在するものであるのに、怯懦きようだな人間が、それにこわもてをして触ろうとしないから、彼等が跋扈ばっこするのだ……本当の勇者が一人出づれば一国がおこる、というようなところまで考えさせられました。

ただ、ここに現われた勇者は、体格の屈強なるに似ず、勇氣りんりんの凜々たるに似ず、ドコかに多少の愛嬌と和気がある。駒井甚三郎はともかくもお礼の心を述べておこうと、彼に近づいて、慇懃いんぎんに、

「どうも御苦労さまでした……失礼ながら、あなたは何とおつ
しやいますか、そうして何の目的で対岸あちらへお渡りになるのです
か」

駒井から慇懃に尋ねられた六尺豊かの壮漢は、

「は、は、は、拙者は絵師ですよ、足利あしかがの田山白雲といって、
田舎廻りの絵描きですよ」

駒井甚三郎も、この返答には、いささか面喰めんくらいました。

誰もが天下無敵の勇者であるように思い、またそう思われて
も、さしつかえないほどの体格と力量を持ち、今やこの船中
は、偶像的にまで渴仰かつどうされようとしているその御本人が、「おれ
は絵師だ……しかも田舎まわりの絵描きだ」と淡泊にぶちまけ
てしまった気取らない純一さを、駒井は微笑せずにはいられま
せんでした。さいぜんの蛮勇は真似まねができて、この淡泊は真

似ができないと感じました。

そこで、駒井甚三郎と田山白雲との、うちとけた談話がはじまります。

田山白雲は、今の画界の現状と、その弊風とを語りました。

「あの書画会というやつ、あれがいけないんです……柳橋の万八で、たいてい春秋二季にやりますな、あれが先輩を傲らしめ、後進を毒するのです。それとても、書画会が悪いのではない、書画会をそういう機関にした組織そのものが誤ってるんでしような。あなたも、万八の書画会へはおいでになったことがありますでしょう」

「ありません」

「それは話せない、一度はごらんになってお置きになるがよろしい、あれは新進の画家には登竜門になるのですから、あの別

席へ陳列されるということは、画家にとつてはなかなかの光栄なのですから、若い人たちが勉強します……勉強して、なかにかいいものを作ることがあります、その点だけは画界のためになりますが……」

と、いいながら田山白雲は、そのすぐれて長い刀をいじくりまわすところは、どう見ても塙団右衛門ばんだんえもんといったような形で、いやしくも絵筆をとるほどの人とは見えません。しかし、その話しぶりは、時弊を論じて、一概に意地悪くならないところに、やはり風流人らしい一面はあるようです。

「それからがいけないのです、自分の努力を、正直に人に見せている分には難はないのですがね……そのうちに、人の物を審査してみたくなる、これが間違いのもとです。二三回いいのを見せてくれたなと思つてゐるうちに、いつのまにか大家になつ

て、人の物の審査をやり出すのです、そうして後進に訓示をするような口吻こうふんを弄ろうするんですからいけませんや……それではトテも大物は出ませんね」

「そうでしょう、好んで人の師となるのはよくないことです」と駒井が軽く相槌あいづちを打ちました。白雲は慨然として、

「そこへいくと……浮世絵師とはいいいながら、葛飾北斎かつしかほくさいはエライところがありましたよ。あの男は相当に名を成した時分にも、書画会へ出るには出ましたがね、雨の降る時などは蓑笠みのかさで、ハイ葛飾の百姓がまいましたよ、といって末席でコクメイに描いていたものです。年はたしか九十で死にましたかな。死ぬ前も、天われにもう十年の歳をかせば本物が描ける、どうしてもいなければ、もう五年、といって死んだというのは本当でしょう。おれには猫一匹も描けない、描けないと、絶えず妹に訴え

ていたというのも、嘘ではあるまい……」

それから白雲は、当代の画家にはこの己れを責むる心がなく、社会に真の画家を養成する大量のないことを説き、天然の名勝や、善良な美風が破壊される時に、腹を立てる美術家はないが、舶来はだかもの裸物に指でもさすと、ムキになって怒り出す滑稽を笑い、我が国の古来の大美術はもちろん——近代になって、東州齋写楽とうしゅうさいしやらくの如きでも、その特色を外国人から教えられなければわからないでいる。自分をわすれるにも程のあつたものだというようなことを論じているうちに、船が木更津きざらづへ着きました。

ここで、こそこそと例の遊民どもは上陸し、乗客の大部分も下船しましたが、この二人は船の上に留とどまったまま、談論に耽ふけっているのです。

聞くとところによると田山白雲は、保田ほたから上陸して房総をめ

ぐり、主として太平洋の波を写生して帰るのだそうです。

白雲のいうところによると、古来、日本の画家で、水を描いて

応挙おうきよの右に出づるものはないが、まだ大洋の水を写したのを見ない、房総の鼻をめぐって見ると人から勧められたままに、出て来たのだということです。房総の海は自分に何を教えるか知らないといっている。

駒井は、自分の仮住居かりずまい、洲崎すのさきの番所の位置をよく説明して、行程のうち、ぜひ足をとどめるようにとのことを勧め、田山は喜んでそれを請け入れました。

「わしは、こうして歩いていると、誰も画家とは見てくれないで困りますよ。いや困りはしません、結局、それが幸いになることもあるのです……そうです、十人が十人、拙者を武芸者だと睨にらんでかかるのですな。それが都合のよいこともあります、滑

稽を引起すことも珍しくはない。いや、武術も少しやるにはやりました。拙者の藩は小藩ですから、僅かに一万石の小藩です。すから、家老上席になつたところで九十石の身分です。しかし、武術は好きで、ずいぶんやるにはやりましたよ、自慢ではないが、まあ、大抵の喧嘩には負けません。武術も好きでしたが、絵も好きでした。子供の時分、拙者は江戸で生れました。浅草の観世音へ行つては、あの掛額をながめて、絵をかいたものです、あれが拙者の最初の絵のお手本です。文晁ぶんちようのところへも、ちよつと行きました。ありや俗物です、俗物ですけれども、一流の親分肌のところもありましたね……絵の本当の師匠は古人にあるのです、古人よりも山水そのものですな。雪舟もいましたね、大明国だいみんこくにわが師とすべき画はない、山水のみが師だ……と。要するに写生です、一も二も写生ですよ……しかし、この写生

観は応挙のそれとは性質を異にしているかも知れませんが、写生はすなわち自然で、自然より大いなる産物はありませんから——いけません、西洋の山水画というものも、うす物を通して見るには見ましたが、それは支那のものとは比較になりませんよ。あなたは、支那の山水画を御存じでしょうな、雪舟、その他一二を除いては、日本の山水画も、あれにくらべると侏儒いつすんぼうしです、支那の山水画は人間の手に出来たものの最上至極のものです、あれがみんな写生ですよ……西洋画の写生よりも、もつと洗練された写生なんです」

といって白雲は、支那の古代からの、宋、元、明に及ぶまでの絵画の歴史と品評とを始めました。駒井甚三郎はここでもまた、異常なる傾聴を余儀なくされたのです。

駒井も今まで絵を見ていないということはない。また絵につ

いても当時の上流の士人が持っていただけの教養は持っている。ただ、当時上流の士人が持っていただけの教養以上にも、以外にも出でなかったのみだ。南北の両派、土佐、狩野かのう、四条、浮世絵等についての概念を以て、人の高雅なりとするものは高雅なりとし、平俗なりとするものは平俗としていたのが、ここで思いがけない写生一点張りの画論を聞いて、容易ならぬ暗示を与えられたようにも感じました。

彼は船乗りの小僧、金椎キンツイによつて、西洋文明の経たてを流れているキリストの教えを教えられ、今はまた、ここで自分が絵画と美術とかいうものに対する知識と理解の、極めて薄いことを覚さとらせられました。

学ぶべきものは海の如く、山の如く、前途に横たわっている——という感じを、駒井甚三郎はこの時も深く銘きざみつけられま

した。

船が保田に着く。田山白雲は、一肩いっけんの画囊がのうをひっさげて、ゆらりと船から棧橋へ飛び移りました。

「さようなら、近いうち必ず洲崎の御住所をお訪ね致しますよ」
笠を傾けて、船と人とは別れました。まだ船にとどまつて、
館山たてやままで行かねばならぬ駒井甚三郎は、保田の浜辺を悠々ゆうゆうと歩み行く田山白雲の姿を見て、一種奇異の感に堪えられませんでした。

八

その名のような白雲に似た旅の絵師を、駒井甚三郎は奇なりとして飽かず見送っておりしました。

ほどなく松の木のあるところから姿を隠してしまつた後も、
髭髯ほうふつとして眼にあるように思います。

しかしながら、人の生涯は、大空にかかる白雲のように、切り離してしまえるものでないと思ひました。人情の糸が、必ずどこかに付いていて、大空を勝手に行くことの自由をゆるされないのが人生である。あの男もどこかで行詰まるのではないか。あの男の蔭に、泣いて帰りを待つ妻子さいしけんぞく眷族というものもあるのではないか。

さりとて、人間は天性、漂泊を好む動物に似ている。

自由を好んで不自由の中に生活し、漂浪を愛して、一定の住居にとどまらなければならぬ人間。それでもその先祖はみな旅から旅を漂泊して歩いたものだから、時としてその本能が出て来て、人をして先祖の漂浪にあこがれしめるのではないか。

物慾の中に血を沸かして生きている人々が、どうかすると西行や芭蕉のあとに、かぎりなき憧憬どうけいを起すのは、ふるさとを恋うるの心ではないか。

左様なことを駒井は考えました。

船はその夜、保田の港へ泊ることになったものですから、駒井も船の中に寝ることにきめました。この時分には、もう大抵の乗客は上陸してしまつて、船は駒井だけのために館山へ廻航するの有様で、船のしたには駒井の携えてきた書物をはじめ、手荷物の類がかなり積み込まれているから、駒井も、ここであつと、船とはわかれられないようになっていゝのです。

まだ日脚ひあしは高いので、このまま船中に閉じ籠こもるのも氣きの利かない話です。

そこで、駒井甚三郎は、程遠からぬ鋸山のこぎりやまの日本寺へ登ること

を思い立ちました。久しく房州にいるとはいえ、この山へ登つてみたいと思ひながら、その機会がなかったのを、今日は幸いのことと思つて、船頭に向い、

「これから日本寺へ参詣してくる、ことによると今夜はあの寺へ泊めてもらうかも知れない、しかし、明日の午後、船の出帆までには相違なくもどつてくる」

といつて、笠をかぶり、田山白雲が右の方、保田の町へ入り込んだのとちがつて、左をさして、乾坤山けんこんざん日本寺の山に分け入りしました。

切石道を登つて、楼門げんこう、元亨の銘めいある海中出現の鐘、頼朝寄進の薬師堂塔、庵房のあとをめぐつて、四角の竹の林から本堂に詣もつで、それを左へ羅漢道らかんみちにかかると、突然、上の山道から途方もない大きな声で話をするのが聞える。

「羅漢様に美^いい男てえのはねえものだなあ」

「べらぼうめ、こち^らと等は羅漢様からお釣りをもらいてえくれえのものだ」

「ちげえねえ、いよう羅漢様」

「羅漢様——」

「羅漢様——」

山を遊覧する人間が、大きな声を出してみたくなるのは、妙な心理作用であると思いました。江戸あたりから遊覧に来た連中らしいが、とうとうそれらは羅漢様からお釣りを取ろうという面^{かお}を見せずに、あちらの山に消えてしまう。

さて、石の千体の羅漢はこれから始まる。あるところには五体十体、やや離れて五十体、駒井甚三郎は、その目をひくものの一つ一つをかぞえて行くうち、愚拙^{ぐせつ}なるもの、剽軽^{ひょうきん}なるもの、

なかには往々にして凡作ならざるものがある。無惨なのは首のない仏。しかしながら、首を取られて平然として立たせたもう姿には、なんともいえない超然味がないではない。

やがて駒井が足をとどめたところには小さな堂があつて、その傍らにかなり古色を帯びた石標——「秋風や心の燈ともしうごかさず 南総一燈法師」と刻んである。

それよりも、駒井の心をひいたのは、まだ新しい羅漢様の一もとなつに「元名米商岡村ふみ」と刻まれた、その女名前が、妙に駒井の心をなやませました。

そこを少しばかりのぼつてまた曲りにかかる。

その曲りかどで風が吹いて来ました。

その風の中からおりて来たのが妙齡の美人です。

駒井もゾツとしました。高島田に結つて、明石あかしの着物を着た

凄^{ばたんどうろう}いほどの美人が、牡丹燈籠のお露のような、その時分にはまだ牡丹燈籠という芝居はなかつたはずですが、そういつたような美人が、舞台から抜け出して、不意に山の秋風の中から身を現わしたのだから、駒井ほどのものも、ゾツとするのは無理もありません。

それだけではありません。見ればその娘の胸に抱えられているものがある。

娘が後生大事ごしょうだいじに抱えているそれを、よく見ると羅漢様の首でありましたから、駒井はいよいよ怪しみの思いに堪えることができません。

すれちがつて、娘は曲りかどを下へ、駒井は立つて見送つていると、一間ばかり行き過ぎた娘があとを振り返つて、駒井を見て、つこりと笑いました。

「これからお登りなさるの？」

「ええ」

もののけ

駒井は物怪から物を尋ねられたように感じながらうなずいて見せると、

「お帰りに、わたくしのところへ泊っていらつしやいな」

これには急に挨拶ができませんでした。しかし、そこで駒井は、ああ気の毒なと感ずることができました。

この娘は、その風姿の示す通り、しかるべき家のお嬢様として、恥かしからぬ女性ではあるが、何かにとらわれて気が狂っているのだ。そこで、

「どうも有難う……」

駒井は愛嬌を以て答えると、娘はうれしそうに踏みとどまつて、

「ほんとうに来て頂戴……待っていますから」

「行きます」

駒井はお世辞のつもりでいいました。

「きつと」

「……………」

深くは相手にならないがよいと駒井が思いました。常識を逸しているものを苟くも信ぜしめるのは、それを弄ぶと**同じ**ほどの罪であるように思われたからです。そこで駒井は自分から歩みを進めて、**また**も登りにかかりました。

登る途は、くみちの字なりになつていきますから、次の曲りかどへ来ると、どうしても、以前の曲りかどを見ないわけにはゆきません。

以前の娘は、まだそこに立って、駒井の後ろ姿をながめてい

るのと、ピタリと眼が合いました。

「きつと、いらつしやい」

「行きますから、早くお家へ帰っておいでなさい」

駒井は早くこの娘を家へ帰してやりたいものだと思います。家ではまたなぜこういう病人を一人で手放して置くのだろうと、それを心もとなく思っていると、娘は恥かしそうに、

「もし……あなた、そこいらに茂太郎が見えたら、お帰りにぜひおつれ下さいましな」

それでは、やつぱり連れがいたのか……そこへにわかには雲がまいて来ました。

日本寺の裏山はすなわち鋸山で、名にこそ高い鋸山も、標高といつては僅かに三百メートルを越えないのですから、そうにわかには雲を呼び、風を起すほどの山ではありません。しかし、

このとき、にわかには雲がまいて来たのは、比較的、風が強かつたせいでしよう。山も、木萱きがやも、一時にざわめいてきました。

髪と着物の裾すそをこの風と雲とに存分に吹きなぶらせて、山を駆けおりる女は、羅漢様の首ばかりを後生大事に抱いて、

「いやな人……」

九

駒井甚三郎はその晩は日本寺へ泊り、翌あくる日は予定の通り船へ戻ると、船も予定の通りに館山へ向けて出帆したものですから、多分、無事に洲崎へ着いていることでしょう。

これよりさき、保田の町へ入り込んだ田山白雲は岡本兵部ひょうぶの家へおちつき、その夜は兵部の家の一間で、熱心に主人が秘蔵

きゆうじつしゅう
の仇十洲の回錦図巻を模写しておりました。

あれほどに写生を主張していた男が、船から上ると早々模写をはじめたことは、多少の皮肉でないこともないが、そうかといつて、写生主義者が模写をして悪いという理窟もありますまい。つまり、よくよくこの仇十洲の回錦図巻に惚れこんだればこそ、万事を抛つて模写にとりかかったものと見るほかはない。仇十洲の回錦図巻の模写に、田山白雲が寝ることも、飲むことも、忘れていると、

「今晚は……」

そこへ、極めてものなれた女の声。

「はいはい」

田山白雲も筆を揮いながら洒落に答えますと、

「入ってもようござんすか」

「ようござんすとも」

「そんなら入りますよ」

「おかまいなく」

白雲は始終描写の筆をやすめませんでした。白雲の頭は仇十洲の筆意でいっぱいになつてゐるものですから、障子の外のおとずれなどはつけたりで、調子に乗つて、うゝわの空で返事をしてみただけのものです。

「御免下さい」

障子をあけて、そこに立つたのは、スラリとした牡丹燈籠のお露です。

「はい」

それでも田山白雲は筆もやすめないし、頭を後ろへまわして、来訪に答えるの労をも惜しんでいる。

「御勉強ですね」

「ええ、御勉強ですよ」

「お邪魔になりやしなくつて？」

「ええ、お邪魔になりやしませんよ、話していらつしやいな」

白雲は柄がらになく優しい声でお世辞をいいました。けれど相変らず模写に頭を取られているものですから、相手の誰なるやを考えているではありません。

「どうも有難う……何を、そんなに勉強していらつしやるの？」

幽霊のような裾すそを引いて、するすると入つて来て、後ろから白雲の模写ぶりを覗のぞきにかかりましたけれども、白雲はいつこ
う平気で、

「ここの主人から借り受けた仇十洲の回錦図巻があまり面白いから、こうして模写を試みているところですよ」

白雲は、やはり言葉はうわの空で、頭と、手と、目とが、図巻に向つて燃えているのです。

「そんなによいのですか、その絵巻物が？」

「結構なものですよ、全く惚^ほれ込んでしまいましたね」

「そうですか、そんなによいものなら、わたしにも見せて頂戴な」

といつて無遠慮に図巻の上へ伸ばしたその手が、白魚のように細かつたものですから、ここに初めて田山白雲は愕然^{がくぜん}としました。

「え」

そこで初めて振返つて見ると、例のゾツとするほどの妙齡の美人です。

「あなたは何ですか」

「幽霊じゃありませんよ」

疑問を先方が答えてくれましたから、白雲ほどのものが度肝どぎもを抜かれました。

「いつ、ここへ入つて来ました?」

「いつ……? 今、あなたにお聞きしたんじゃないやありませんか、それで、あなたがいいとおっしゃったから入つて来たのよ」

「そうでしたか、拙者がいいと言いましたか」

「いいましたとも」

「そうでしたか……」

田山白雲が呆あきれ返つてながめると、その上に解げせないことは、この美人が後生大事に胸に抱きかかえているものがあります。それが人間の生首でなくて仕合せ。

「あなた、わたし、今日、鋸山の日本寺へ参詣して来たのよ、一

人で……」

「そうですか」

「そうしてね、途中で美しい男に会いましたのよ、それはそれは美しい男」

「そうですか、それは結構でしたね」

白雲がしうことなしに話相手になりました。

「あなたより美しい男よ……」

「そうですか、わたしより美しい男でしたか」

と白雲が苦笑いしました。

「ですけれども、あなたも美しい男よ……美しい男というより男らしい男ね、あなたは……」

「大きに有難う」

「ですけれども、茂太郎も美しい子ね、あなたそう思わなくって？」

「左様……」

「そうでしょう、あのくらい美しい子は、ちよつと見当らないわ」

「そうかなあ」

「それに第一声がいいでしょう、あの子の声といったら素敵よ。昔は、わたしが歌を教えて上げたんだけど、今ではわたしより上手になつてしまつたわ」

「ははあ、そんなに歌が上手でしたか」

「上手ですとも。あなた、それで、あの子は声がよくつて、歌うのが上手なだけではないのよ、自分で歌をつくつて、自分で歌うのよ」

「そうですか、それはめずらしい」

「一つ歌つてお聞かせしましょうか」

「どうぞ」

「わたしは茂太郎ほどに上手じゃありませんけれど、それでも茂太郎のお師匠さんなのよ」

「何か歌ってお聞かせ下さい」

「何にしましょうか」

「何でもかまいません」

「それでは、わたしが茂太郎に、はじめて歌の手ほどきをして上げた、あれを歌いましょうか」

「ええ」

「それは子守唄なのよ」

「子守唄、結構ですね」

「それでは歌いますから、よく聞いていらつしやい」

「いって、女は胸に抱いているものをあやなすようにして、

ねんねがお守もりは

どこへいた

南条長田おさだへと買いに

そのとと買うて

何するの

ねんねに上げよと

買うて来た

ねんねんねんねん

ねんねんよ

そうすると、女が歌の半ばにほろほろと泣き出してしまいま
した。

田山白雲は胸を打たれて気の毒なものだと思いました。この
年で、この容貌きりようで、そしてこの病。

これが岡本兵部の娘なのか。

娘は泣きながら両袖を合わせて、抱えたものをいよいよ大事にし、

「ねえ、あなた、茂太郎はどこへ行きましたろう……鋸山の上にもいませんでしたわ」

「そのうち帰るでしょう」

「そうか知ら、帰るかしら、いつまで待ったら帰るでしょう」

ねんねんねんねん

ねんねんよ

ねんねのお守は

どこへいた

お山を越えて

里越えて

そうしてお家へ

いつ帰るの……

女は蠟涙ろうるいのような涙を袖でふいて、

「ねえ、あなた、この子の面かおが茂太郎によく似ているでしょう、そつくりだと思わない？」

といって、今まで後生大事に胸にかかえていたものを、両手に捧げて白雲の机の上に置きました。それは石の羅漢らかんの首ばかりです。

「うむ」

白雲が挨拶に苦しんでいると、

「似ているでしょう。もし似ていると思ったら、それを描かいて頂戴な……」

田山白雲は保田を立つ時、予期しなかつた二つの獲物えものを画囊がのうに入れて立ちました。

仇英きゅうえいの回錦図巻と狂女の絵。その二つを頭の中で組み合わせながら、再び白雲は旅にのぼつたものです。

下谷の長者町の道庵先生が、かねての志望によつて、中仙道筋を京大阪へ向けて出立したのも、ちょうどその時分のことでありました。

先生のは、もっと、ずっと以前に出立すべきはずでしたけれども、米友の方に故障もあつたり、何かとさしつかえがそれからそれと出来たものですから、つい延び延びになつてしまいました。

いよいよ出立の時は、近所隣りや、お出入りのもの、子分連中が盛んに集まって、板橋まで見送ろうというのを強いて辞退して、巢鴨の庚申塚こうしんづかまでということにしてみました。物もの和やわらかな豆腐屋の隠居、義理固い炭薪屋すみまぎやの大将といったような公民級をはじめとして、子分のデモ倉、プロ亀に至るまでがはしやぎまわってみおくりに来ました。

しかし、これらの連中は、みな庚申塚でかえしてしまい、あとに残るのは先生と、同伴の宇治山田の米友と二人だけ。

「米友様」

と道庵先生が呼びかけると、

「うん」

と米友がこたえます。

道庵がしやれて褻折笠つまおりがさに被布ひふといういでたち。米友は竹の笠

をかぶり、例の素肌すはだに盲目縞めくらじま一枚で、足のところへ申しわけのように脚絆ぎやはんをくつつけたままです。二人ともに手頃の荷物いっぴようを振分けにして肩にひっかけ、別に道庵は首に紐をかけて、一瓢いっぴようを右の手で持ちそえている。米友は独流の杖槍。

「さて米友様、永ながの旅立ちというものは、まず最初二三日というところが大切でな……静かに足を踏み立ててな、草鞋わらじのかげんをよく試みてな……そうしてなるべく度々休んで足を大切にすることだ」

「なるほど」

「旅籠屋はたごやへ着いたら、第一にその土地の東西南北の方角をよく聞き定めて、家作りから雪隠せついん、裏表の口々を見覚えておくこと……」

「うん」

「もしまた、馬や、駕籠かごや、人足の用があらば、宵よいのうちに宿

屋の亭主にあつてよく頼んでおくがよい、あいたい相対でやると途中困ることがあるものだ。朝起きては膳の用意をするまでに仕度をして、草鞋をはくばかりにして膳に向うようにしなくちやならねえ」

「うん」

「朝はせわしいものだから、よく落とし物をする故、宵のうちによく取調べて、風呂敷へ包んで取落さぬようにしなくちやならねえ」

「なるほど」

「旅籠屋は定宿じようやどがあれば、それに越したことはないが、初めてのところでは、なるたけ家作りのよい賑やかな宿屋へ泊ることだ、少々高くてもその方が得だ」

「そうかなあ」

「道中で腹が減ったからといって、無暗に物を食つてはいけねえ、また空腹すきばらへ酒を飲むのも感心しねえ……酒を飲むなら食後がいいな、暑寒ともにあたたためて飲むことだよ、冷ひやは感心しねえ」

「おいらは酒は飲まねえ」

と米友がいました。

「そうか、では道中は、別してまた色慾を慎まなければならぬ……道中には、飯盛めしもりだの売女ばいじよだのというものがあつて、そういうものには得て湿毒しつどくというものがある」

道庵先生は、丁寧親切に米友に向つて、道中の心得を説いて聞かせているつもりだが、酒を飲むなの、色慾を慎めものということは、この男にとってはよけいな忠告で、御本人の方がよっぽど、あぶないものです。

それでも米友は神妙に聞いていると、ほどなく板橋の宿へ入りました。

「さあ、米友様、ここが板橋といって中仙道では親宿だ。おやしゆくこれから江戸へは二里八丁、京へ百三十三里十四丁ということになっている、先は長いから、まあいつぶくやって行こう」と、あるお茶屋へ休みました。

こうして二人がつれ立って歩くと、こまつたことには道庵の方はそれほどでもないが、米友の姿を見て、みかえらないものはないことです。極めて背の低いのが、もうあわせ衿を重ねようという時分に、素肌めくらじまに盲目縞ひとえの単衣で元氣よく、人並より背のひよろ高い道庵のあとを、後れおくもせずにびっこ跛足の足で飛んで行くかっこう恰好がおかしいといって、みかえるほどのものが笑います。

「やあ、チンチクリンが通らあ……」

正直な子供たちは、わざわざ路次のうちから飛んで出て、米友の周囲にむらがるのです。

そのたびごとに、米友に腹を立たせまいとする道庵の苦心も、並々ではありません。

「何でも米友様、旅に出たら、堪忍^{かんにん}が第一だよ、腹の立つことも旅ではこらえつつ、言うべきことは後にことわれ……お前は頭がいいから、物の見さかいがなく、大名でも、馬方人足でもとつつかまえて、ポンポン理窟^{りくつ}をいうが、あれがいけねえ、物言いを旅ではことに和^{やわ}らげよ、理窟^{りくつ}がましく声高^{こわだか}にすな……と

いうのはそこだて……」

しかし、米友とても、そう無茶に腹を立つわけのものでもなし、道庵とても好んで脱線をしたがるわけでもありませんから、町場を通り過ぎてしまえば、心にかかる雲もなく、道庵はいい

氣持で、太平樂たいへいらくを並べて歩きます。

太平樂を並べて歩きながらも道庵は、折々立ち止まつて路傍の草や木の枝を折つて、それをいい加減こぎに小切つては束ねたばて歩きますから、米友が変に思いました。この先生は文字通りの道草を食つて歩いているのだなとさえ思いましたが、道庵のすることことをいちいち干渉していた日には、際限がありませんから、別にその理由もたずねませんでした。

そうして浦和しゅくの宿——江戸より五里三十町、京へ百二十九里二十八町というところへついて、そこで今晚は泊ることになる。ここにはあまり、よい宿屋がありませんでした。泊り客を見かけては道庵がいちいち、途中で手折たおつて来た槐えんじゆのような木の枝を渡していうことには、

「これは苦参くじんといつて蚤のみよけのおまじないになる。見かけたと

ころ、この宿屋には蚤がいるにちげえねえ、これを蒲団ふとんのしたにしいてお寝」

おかげさまで、その晩は蚤に食われなかつたお礼をいうものがありました。そこで米友には、道庵の道草の理由がわかり、

「先生のすることにソツはねえ」

といまさらのように、感心をしてしまいました。

浦和から大宮、武蔵の国の一の宮、氷川大明神ひかわだいみょうじんへ参詣して、ま

たまた米友をおどろかせたのは、道庵先生が見かけによらず敬神家で、いとねんごろに参拝祈願する体ていを見て驚嘆しました。

この先生、いいかげんのおひやかしだと思つているとあてがちがう。この殊勝な参拝ぶりを見て、正直な米友が、いよいよ感心をしてしまったのも無理はありません。しかしあとでいうことには、

「すべて、神仏を大切にすることを知らねえ奴に、ロクな奴があつたためし、がねえ、国々へ行つて見な、いい国主ほど神仏を大切にしたらあ、人間だつてお前、エ、ラ、ク、なるぐらいのやつは、エ、ラ、イ、ものの有難味を知つてらあな、薄っぺらなやつだけが神仏を粗末にする」

と言つて気焰を吐きました。

この気焰によつて見ると、道庵先生自身はエ、ラ、イ、奴の部類に属していて、薄っぺらな奴に属していないという理窟になるのですが、米友はそこまでは追究せず、なるほどそういうものか知らんと思いました。

宇治山田の米友は、伊勢の大神宮のお膝元で生れたから、神様の有難いことを知っている。そこで道庵につづいて笠を取つて、うやうや恭しく氷川大明神の前に礼拝をすると、

「こいつは感心だ、見かけによらねえ」

と言つて道庵が手をうつてよろこびました。

その時、道庵先生は米友に向つて、

「神様を拝むには、少し遠く離れて拝まなくちやならねえ、あんまり賽銭箱さんせんばこの傍へ寄つて拝んじやならねえ……ちようど、この鳥居前あたりがいいところだろう」

と神様を拝む秘伝を教えますと、米友が解げせない面かおをしました。

「先生」

「何だい」

「どこで拝んだつて、心さえ誠ならば、それでよかりそうなものじゃねえか……よしんば賽銭箱の前で拝もうと、鳥居前で拝もうと、信心に變りがなければ、御利益ごりやくにも變りはなかうじやねえか」

と米友が不審を打つと、道庵はそこだとばかりに、

「それが素人^{しろうとかんが}考えというものだ」

と一喝^{いつかつ}を試みました。

「そうかなあ」

米友は無言で何か反省を試むような気色^{けしき}でありましたが、なにぶん解^げせない面色^{かおいろ}を拭うことができません。

「わかったか」

と道庵からいわれて、

「どうもわからねえ」

と白状しました。正直な米友の心では、神様を拝むのに誠心^{まごころ}を論ずるのはよいが、距離を論ずるのは、ドコまでも不当理窟のように思われてならないのです。つまり、お賽銭箱の前で拝もうと、鳥居の前で拝もうと、また自宅の神棚へ招じて拝もうと、

誠心に変りがなければよいものだという理窟を、道庵が排斥しながら説き明^{あか}してくれないものだから、迷います。

道庵はそれを相変らずいい気持で、

「は、は、は、は、は……」

と高笑いしたのは、本気の沙汰だか、ふざけているのかわかりません。

しかし、米友としては道庵を信じ、今までとても、氣^{きち}狂いじみたところに、あとでなるほどと思わせられたり、ふざけきつたのが存外、まじめであつたりしたことを、いつもあとで発見させられるものですから、これにも何か相当のよりどころがあるので、それはあとでおのずから教えられることだろうと、押返してたずねなかったのは、つまり米友もそれだけ修行が積んだものでしょう。

凡庸^{ぼんよう}なる科学者を名画の前へ連れて行くと、心得たりとばかりに画面へ顔を摺^すりつけながら、天文学で使用するような拡大鏡を取り出して両眼に当て、画面の隅々^{すみずみくまぐま}隈々までも熱心に見つめる。そうしていう。この線とこの線の間は何ミリメートルある、この紙質は植物性のもので耐久力は何年、この墨を分析してみると成分はこれこれ……というようなことを、おどろくばかり精密に教えてくれる。しかし、最後に、「して、いったい、この画は何を表現しているものですか」とたずねてみると、その科学者がいう、「あ、それには気づかなかった……」

つまりこの科学者は、その絵の全体が、道釈^{どうしやく}だか、山水だか、人物だか、最後までわからなかったのです。

これは凡庸なる科学者の罪ではない、遠く離れて画を見ることを知らなかったその罪です。

道庵先生が、米友に向つて、神を拝むには離れて拝めと教えた秘伝も、或いはその辺の理由から来ているのかも知れません。

しかし、医者はその職業の性質上、科学者でなければならぬことを知っているはずの先生ですから、科学を輕蔑するつもりはないにきまつている。近く寄つて見ることを悪いとはいわないが、遠く離れて拝むことを忘れてはならないとの老婆親切かも知れません。偉大なる科学者は必ずこの二つを心得ている——というような気焰は揚げませんでした。

こうして二人は社前を辞して大宮原にかかる。ここは三十町の原、この真中に立つと、富士、浅間、甲斐^{かい}、武蔵、日光、伊香保などの山があざやかに見える。

原の中で米友が草鞋^{わらじ}の紐を結び直しました。

十一

こうしてある者は南船し、ある者は北馬して江戸の中心を離れる時、例の三田四国町の薩摩屋敷ばかりは、いよいよ四方の浪人の目標となつて、ここへ集まるものが絶えません。

今日も数十人の者が一席に集まつて、群議横生のところ。

いよいよ甲府城を乗つ取るの時機が熟したという者がある。

さて、甲府を定めて後は、天険てんけんによつて四方を攻略すること、

武田信玄の如くあらねばならぬというものもある。

それに備えるの要害を利用すること、北条氏康ほうじょううじやすの如くでなければならぬというものもある。

さてまた一方には、相州荻野山おぎのやまなか中の陣屋を焼討して、そこに蓄えられた武器と、軍用金を奪い取るは、朝飯前だと豪語する

者もある。

他の一方には、関東の平野を定めるにはやはり平野から出づるのがよろしい、それには野州の野に越したものは無い、栃木おおひらやまの大平山、岩舟山いわふねさん、出流山等いずるさんは、平野のうちの屈竟くつきようの要害だと主張するものもある。

或いは房総の半島から起ること、源頼朝の如くあつてよろしいというものもある。

水戸を背景として、筑波によることも決して拙策ではないと補修するものもある。

それよりも手っ取り早いのは、もう少し手強く江戸の内外を荒して、全くの混乱状態に陥れるに越したことはないと言導するものもある。

もう少し手強く江戸の内外を荒すというのは、つまり以前よ

りもモット豪商や富家をおびやかすことと、役人に楯をつくことと、徳川幕府を侮るあなじことなどで、それがかなり露骨にこの席で話が進みました。

本所の相生町で牛耳を取っていた南条力は、この時はひとり、席の中心からは離れてたつみの隅の柱によりかかり、白扇を開いて、それに矢立の筆を執つて、地図らしいものを認しためていると、それを覗のぞき込んでいるのが、鬢びんをつめて色の浅黒い四十恰好のドコかで見たことのあるような男です。よく考えてみると、それそれ、これは先日、武州の高尾山の宿坊で七兵衛と泊り合かわせた神楽師かぐらしの一行の中の長老株の男でありました。

南条は扇面に地図を引いて、席の大勢には関係のない二人だけの内談で、

「こういうふう^にに地の利がひつぱっているから、ここ^のところ

に手は抜けないのだ。江戸を計るものは、甲州を慮おもらなければ仕事ができない、家康も甲州の武田が存する以上は天下が取れなかつたのだ、甲州は捨てておけない」

と言いますと、神楽師の長老が眉根を曇らせて、

「甲府が関東の險要であるとおなじ理由によつて、飛驒ひだの国が京畿けいきの要塞になるのでござる——ござんなさい」

と言つて懷中から一枚の地図を取り出して、南条力の前にひろげ、

「ござんの通り、飛驒の高山は、彦根に対して俯ふして敵を射るの好地にあるではござらぬか、加賀と尾張の二大藩を腹背に受けているようではござるが、一方は馬も越せぬ山つづき、一方は大河と平野によつて別天地をなしてござる、一路直ちに西へ向えば、彦根までは手に立つ藩はござらぬ、飛驒を定めてしか

して後に……」

話ぶりによると、南条力はまず甲州を取らなければならぬといい、神楽師の長老は、それよりも飛騨を取るのが急務であると主張し、おのおの天険と地の利を説いて相譲らないらしいが、なにぶんにも二人の会話は、席の中心を離れた内談だから、中央の高談放言に消されて、その話がよく聞えない。ややあつてかぐらし神楽師の長老が、

「では、貴殿、ともかく高村卿におあいくだされよ、今日あたり当地へおつきのはずでござる」という声だけがよく聞えました。

その晩、薩摩屋敷へまた数名の新来の客がありました。そのい、で、た、ち、はみな先日のお神楽師の連中と同じことでありました。が、なかに一人、弱冠の貴公子がいたことを、邸について後の

周囲のもてなしと、笠を取つて面を現わした時に初めて知りました。

翌朝になつて見ると、この貴公子は上壇の間に、赤地の錦の直垂ひたたれを着て、髪は平紐で後ろへたれ、目のさめるほどの公達きんだちぶりで座をかまえておりましたが、やがて、その周囲へ集まつたこの屋敷の頭株が、みな臣従するほどに丁寧に扱っているのが不思議で、

「そちたち、わしは飛驒の国を取りたいと思うて、そちたちを頼みに来たのじゃ、助力してたもるまいか」

猫の児をもらいに来たような頼みぶりでしたから、豪傑連中も度胆どきもを抜かれたようです。

その時に例の南条力が少しく膝を進ませて、

「その儀につきましては、昨日池田殿より一応のお話をうけた

まわりましたが、飛騨の国を御所望は、まずおやめになつた方がよろしかろうと心得まする」

「何故に？」

そこで南条力は、昨日お神楽師の長老と内談的に議論をたたかわしたその要領を、再び貴公子の前でくりかえして、結局、飛騨を取るよりも、甲州を略するのが急務だという意見を述べる
と、それを聞き終つた貴公子——昨晚、池田なるものはその名をたしか高村卿と呼びました、

「そちたちは江戸を基^{もと}にして考えるからそうなるのじゃ、京都を根本として計略を立てる時には、甲斐を取るよりも飛騨を定むるのが先じゃわい。そちたちが心を揃^{そろ}えて助力をしてくりやるならば、飛騨を取ることは何の雑作もないことじゃ、甲州を定むるのは、その後でよろしい」

弱冠なる貴公子が取つて動かない氣象のほど、侮り難いと見て、相良^{さから}総蔵が代つて答えました、

「仰せではございますが、われわれの今の目的は、関東を主と致します、飛驒の方面まで手の届きかねる實際は、御逗留の上、したしく御覧あそばせばおわかりになると存じまする」

「うむ。そうして、この屋敷にはただいま、何人の人がいますか」

「都合五百人には過ぎませぬ」

「しからば、そのうち三百人を、わしに貸してたもらぬか」

豪傑が沈黙してしまいました。かねて高村卿は豁達^{かつたつ}なお方とは聞いていたが、なるほどその通りだと思つたのでしよう。それと同時に實際、公卿^{くけい}さんの中にも豪い^{えら}氣象の人がいると、舌を捲いたのかも知れません。

十津川^{とつがわ}の時の中山卿、朔平門外^{さくへいもんがい}で暗殺された姉小路卿、洛北^{らくほく}の岩倉卿、それらは慥^{たしか}に公卿さんには珍しい豪胆な人に違いがないが、この高村卿の突拍子には格別驚かされる。

もし、かりにここから三百名の浪士を借り受けたところで、それに伴う兵器食糧はどうするつもりだろう。もしまた仮りに、飛驒^{ひだ}の国を乗っ取つてみたところで、それを守る者、或いは後詰^{ごづめ}の頼みはどうなるのか、その辺の計画は一向にないらしい。ないところが、またこの人たちの無性^{むしよう}に愛すべきところかも知れない。

豪傑連は、この豪胆な貴公子の意気を喜びましたけれども、その豪胆通りに実際が行われるものでないことを、懇々と説諭しなければならぬ役まわりになりました。

豪傑連の説諭を聞き終つた高村卿は、

「それでは要するに、飛騨の国を取ることに助力ができないというのじゃな。それは意見の相違でぜひもないが、そちたち、勤王を名として、私藩の手先をつとむるような振舞があつてはならぬぞ、幕府を倒して、第二の幕府を作るようなことになつては相済まぬぞ」

といつてのけ、彼等がなおも弁明をしようとするのを聞かず、意見の合わぬところに助力の望みなし、助力の望みなきところに長居するの必要なし、直ちに帰るといい出しました。

帰るといい出した英氣風発の貴公子は、誰が留めても留まりそうもない。

十数人のお神楽師かぐらしを差図して、荷物をまとめさせたが、ふと膝を打って、

「せつかくのみやげに羅陵王らりようおうを舞うて見せようか、皆々おどれ」

と言ひ出でました。

そこで、いったん、包みかけた荷物はほどいて、これらのお神樂師が薩摩屋敷の大広間で、腕をすぐつて踊るから、志のあるほどのものは、小者端女こものはしために至るまで、来つて見よとのことであります。特に舞台は設けないが、隔てを取払つて、縁に居い溢あふれた時は、庭を打通して見物のできるような仕組みです。

さて、囃子方はやしかたの座がととう。太鼓があり、鼓つづみがあり、笛があり、笙しょう、ひちりきしの類までが備わっている。

そうして、花やかな衣裳をつけて、この十数人が、われ劣らじと踊り出でました。

この踊りは、一種異様な見物みものであります。古代の雅樂ががくの如く、中世の幸若こうわかに似たところもあり、衣裳には能狂言のままを用いたようでもある。

それに、不思議なのは、一人一役がみな独立して、個々別々に踊っているので、時代と人物には頓着なく、翁おきなのとなりに猩々しょうじょうがあり、猩々のうしろには頼政よりまさが出没しているという有様で、場面の事件と人物には、更に統一というものはないが、拍子ひょうしだけはピッタリ合つて、おのおの力いっぱいにその個性を発揮して踊りぬいていることです。

薩摩屋敷のものは、このめざましい見物みものを見せられて盛んによろこびましたが、何ものの特志で、こうして不時に、われわれに目の正月をさせてくれるのだからないものが多かったのです。それからまた、一行の神楽師に対する豪傑連中のもてなしが、甚だ丁重ていちょうで、いわゆる芸人風情にするものとは行き方がちがつていることを、不思議にも思いました。

これは申すまでもなく、お銀様が、武蔵と甲斐と相模あたり

の山の中で、思いがけなく見せられた一団の舞踊とおなじこと
で、その指揮をつかさどっていたのも、今で思い合わせると、こ
こで高村卿と呼ばれている英氣風発の公達きんたちであつたに相違ない。
前にいった通り、その時分の京都の公卿さんの若手のうちに
は、きかないのがおりました。中山忠光卿や、姉小路公知卿きんともや、
岩倉具視卿ともみあたりもその仲間でありましょう。ここに現われた
高村卿なるものも、多分その一人であろうと思われる。

彼等の憂うところは、徳川幕府よりはむしろ勤皇を名とし
て勢いを作り、幕府の実権をわが手におさめようとする一二雄
藩の野心である。ちやうど、足利尊氏あしかがたかうじ氏が最初に勤皇として起り、
ついに建武中興をくつがえしたように、徳川を倒すはよいが、
徳川を倒した後の第二の徳川が起つては、なんにもならないで
はないか。これは今のうちに、あらかじめ備えておかなければ

ならぬというのが、当時の気概ある公卿の憂慮でありました。

京都の公卿をして、再び護良親王もりながしんのうの轍てづを踏ましむるなかれという気概のために、憎まるるものがないとはかぎらない。烈しく憎まるる時は暗殺される。幕府と勤皇と両方面に敵と味方を持つていて、その味方に対してまた備うるところがなければならぬ。しかも位高くして、実力の乏しい当年の公卿の地位もまた、多難なるものがありました。

その充分なる気概を保留するには、こうして山林にのがれて、舞踊に隠れるの必要があつたかも知れない。それとも単にお公卿さんかたぎ氣質の罪のないやんちゃかも知れません。

この怪異なる総踊りが済んでしまうと、白面にして英氣風発の十八九歳とも見られる貴公子は、ひとり赤地の錦のひたたれを着て、白太刀しらだちを佩はいたまま、羅陵王を舞いました。

羅陵王を舞い終るや、その場へ一座をさしまねいて、疾風のような勢いで荷物を整理させ、以前のお神楽師の旅のなりした十余名のものに守られて、時を移さずこの屋敷を立退いてしまいました。

十二

高村卿の一行が引払つてしまうと、例の南条力と五十嵐甲子雄は、薩摩屋敷の幹部のものと相談して、数名の人夫をひきい、その人夫に荷物をかつがせて、飛ぶが如くにこの屋敷を立ち出でたのは、多分高村卿一行のあとを追いかけるものと思われる。

それは途中で相合あいがつしたかどうか知れないが、ともかく、相州荻野山中の大久保長門守の陣屋が焼打ちされて、かなり多量の

武器と金銭を奪われたのは、それから十日ほど後のことであり
ます。

そうして高村卿の一行も、それを後から追いかけた南条、五
十嵐らの一行も、薩摩屋敷へは戻って来ないところを見ると、
この両者が議論をたたかわした通り、甲斐か飛騨かの方面へ、
落合ったのかも知れません。

そう思つて見ると、この間少しばかり途絶とだえていたあやしの
神楽太鼓が、またしても、三国みくにの裏山にあたつて響きはじめた
ことです。そうして夜ごとに、山の奥へ奥へと響き進んで行く
ようです。

甲武信こぶしの下に山ごもりをしていた猟師の勘八がこの響きを聞
いて、

「またはじめやがつたな」

けれども、この響きを向う河岸の太鼓と聞いておられないことが、まもなく起りました。

ある日、由緒ありげな数人のものが、不意にこの獵師小屋へ押しかけて来て、食糧品と獵の獲物があらば、残らず買つてやるとのことでした。

勘八は驚き呆れて、取蓄えてあつた食物と獲物をそっくり提供すると、この連中はよろこんで、勘八に黄金二枚を与えて行きました。

「小判二枚！」

勘八は、これはニセ物ではないか、あるいは時間がたてば木の葉に変わってしまうのではないかとさえ疑いました。勘八にとつては臍の緒切つて以来、少なくとも黄金二枚を手にしたことは初めてでありますから、一時は疑つてみましたが、正真のもの

であることを信じてみると、うれしくてたまりません。

こうなった以上は、何も命がけで猪を追ひ廻している必要はないと考えましたから、勘八は小屋をほどよく始末して、鉄砲をさげてさ、へ帰つて、とうぶん骨休めをすることにきめました。

帰る途中、谷間の小流れのところへ来て見ると、何か落ちて
いる。

近づいて見ると意外にも、それは角が生えて青隈の入った木彫の面、俗に般若の面と称するものでしたから、手に取り上げて勘八はおどろきました。思いがけないところに、思いがけないものが落ちていた。しかし、子供へのみやげには何よりだと、手に取り上げて見ると、ゾツとするほどのものすごさを感じました。

これは作のいいせいだ——と勘八もなんとなくそう思つて、つくづくながめると、いよいよすごくなくなつてくるので、これはトテモ子供のおもちやには向かないわいと思ひました。とにかく、捨てておくよりは、ひろつて帰つたところで、誰も咎めるものはなからう……と勘八はそれを大事に持つて帰つて、とりあえず月見寺へ立寄りました。

そうして般若の面をひろつて来たと大声で披露すると、どこにいるのだから、暗いところから弁信の声で、

「勘八さん……般若の面をおひろいなさいましたか、それは結構でございます。般若とは六波羅蜜の最後の知恵と申すことで、この上もなく尊い言葉でございますそうですが、それが、どうして恐怖と嫉妬を現わす鬼女の面の名となりましたか、不思議な因縁でございます」

弁信が暗いところで、こんなことをいい出したものですから、勘八は気味が悪くなりました。実はさいぜんとても、面に現われた鬼女の妬相とそうにゾッとするほどおそろしさを見せられていたのに、そこへまた弁信が、何かむずかしい因縁を説き出したものでありますから、勘八は無意識に気味が悪くなり、自分は黄金二枚で果報が充分だ、よけいな面を持って帰って、せっかくの果報が祟たたりに変つては災難だと思ったものですから、ではこの面はお寺へおさめてまいりましょうといつて、そこに置いて、わが家へ帰つてしまいました。

十三

塩尻から五千石通りの近道を、松本の城下にはいつて、机竜

之助と、お雪ちゃんと、久助の一行は、わざと松本の城下へは泊らずに、城下から少し離れた浅間の湯に泊り、そこで一時の旅の疲れを休め、馬をやとい、食糧を用意して、島々谷しまじまだにの道を分け入ることになりました。

浅間を立つ時に、宿で誰かが久助に向つて、こんなことをいうのを、竜之助は耳に留めておりました、

「おやおや、白骨しらほねまでおいでになるのですか、これから、この

寒かんに向おうとする時分に……それはそれは大変なことでございます

ます、あちらでは追々おいおい、お湯をとぎして、大野や松本へ出てま

いりまする時分に、あなた方はあちらへおいでになる……そう

して冬籠ふゆごもりをなさる、いやそれほどの御辛抱がおりますれば、

いかなる難病でもなおらぬということとはございますまいが……

それにしても、まあ、途中だけでも容易なものではございません

んよ……いつそ、この浅間の温泉で御養生をなすつたらいかでございますか。それは、お湯はどうてい白骨ほどのきき目はないかも知れませんが、第一、ここにおいでになれば御城下は近し、四時、人の絶えたことはございせんから、心配というものゝが更にありません。あの、奥信濃の飛驒の国との境、白骨の温泉で冬籠りをなさるといふのは、ずいぶん冒険でございす、それはできないことはございますまいが……雪が降り積つて、山も、谷も、埋めた時は、全く人間界を離れてしまいきますからな、御用意に如才じょさいもございますまいが、食物から寒さをしのご用意まで、念をお入れになりませんと……それと雪の降る日などは、飢えに迫つて猛獣が、人のおいをかぎつけてまいりますから、それもお気をつけなさいませ」

しかしながら、それがために、いまさら思い止まるべきもの

ではありません。

久助だけが徒歩で、お雪と、竜之助は馬に乗り、他の一頭には、米とその他の荷物をつけて、松本をゆつくりと立ち、野麦のむぎ街道を島々の村まで来て早くも一泊。

翌日早朝にここを立つて、島々の南谷を分け入りました。

島々では、案内者がこういうのを聞きました、

「山地は秋の来るのが早いですからね。左様でございます、穂高の初雪は九月のうちに参りますよ。八月の末になりますと、とくしうとうげ徳本峠の頂あたりが真赤になって、九月の上旬になりますと、かみこうち神河内のもみじがととのつて参ります。ごらんなさい、この辺

も、もう青と紅とがとりどりで、錦のようになつてしまっています。これが十月になると、焼ヶ岳も真白になつてしまいます。けれども、まだこの道が通えないということとはございせんが、

十一月になりましたは、もういけません」

とにかくに馬を進ませて行くに従つて、秋の色は深くなつてゆくばかりです。

「まあいいわ……」

ございけんちん

五彩絢爛として眼を奪う風景を、正直にいちいち応接して、酔わされたような咏嘆えいたんをつづけているのはお雪ちゃんばかりで、久助は馬方と山方やまかたの話に余念がなく、竜之助は木の小枝を取つて、折々あたりを払うのは、虫を逐おうのかも知れません。

「大きな山……」

檜峠のおり道で、お雪が眼をあげてながめたのは硫黄いおうヶ岳たけです。

「いつも地獄のように火をふいている焼ヶ岳というものが、あの向うにありますよ」

久助が説明しました。

五彩絢爛たる島々谷の風光の美にうたれたお雪は、風相鬼おにの如き焼ヶ岳をながめて、はじめて多少の恐怖に打たれました。

「火を吹いているんですか？」

「あれごらんさい、あのむらむらしているのは雲じゃありません、みんな山からふき出した煙ですよ。焼ヶ岳の頭は、人間ならば髪の毛が蛇になつてのぼるように、幾筋も幾筋もの煙が巻きのぼっています」

「そうして、白骨しらほねのお湯はその下にあるのですか」

やがて白骨の温泉場に着いて、顧みて小梨平こきなしだいらをながめた時は、お雪もその明媚めいびな風景によつて、さきほどの恐怖が消えてしまいました。

もう、客はおおかた引いていますから、この一行は、存分に広い座敷を占領することができ、どつしりと落着いて、ほとんどわが家へ帰った心になりました。

ことに、竜之助はここへ着くと、まず第一に、「これから充分眠れる」という感じで安心しました。

これから思う存分に眠るのだ、大地のくぼむほど寝つくのだ、という欲望が何よりも先にこの人の心に起つたのは、今まで身を勞することは少なかったとはいえ、その生涯は、ほとんど波に任せてただようと同じことの生涯で、夜半夢破れた時は、いつも枕の下に波の声を聞かぬこととてはない。聞くところによれば、ここは飛驒と信濃の境、晩秋より初春まで、住む人もなき家を釘づけにして里へ帰るのだと。あたか恰もよし、これからようやくその無人の冬が来るのである。三冬の間をじつくりと落着

いて、ここで飽くまで眠り通すに何の妨げがある。

竜之助は、その以前は眠ることを怖れたものです。眠ることを怖れたのではない、眠って夢を見ることを怖れましたが、今はそうではありません。

このごろになって、はじめて夢を見ることの快樂が、少しずつ身にしみて来たようです。

四境閑かんにして呼吸の蜜よりも甘い時、恍惚こうこうとして夢路に迷い入るの快味を味わうものにとつては、この世の歡樂などは物の数ではないとのこと。

またいう、夢の三昧さんまいに入る人は、必ずしも眠つてのみ夢を見るのではない、身を横にして眼をとぎせば、雲煙がおのずからにして直前に飛び、神仙が脱化だっげして人間界に下りて来るのと。と。

今、竜之助は、夢みることに新しい生活を見出し得たかのよう
に夢みていると、お雪が、竜之助の枕もとへ、本を二三冊た
ずさえてやつて来て、

「先生、お退屈でしょう、本を読んでお聞かせしましょうか」
「どうぞ」

と竜之助が夢を現実^{まこと}に振向けると、お雪が、

「王昭君物語という本ですよ。王昭君、御存じでしょう、支那
の美人……」

と言つて、その本を竜之助の前、あんどん行燈の下でくりひろげました。

お雪は本を読むことが、なかなか達者です。これは支那の物
語を、だれか日本文に作り直した物語です。けれどもお雪は、
その中に挟まれている漢文や、漢詩まで、苦もなく読みくだく
ので、竜之助がおどろいているくらいです。お雪になかなかの

読書力があつて、読み方が流暢りゆうちようなものですから、竜之助も引入れられて、こころよい心持で聞いていました。

「これでおしまい、とうとう一冊読んでしまいました」

紙数にして五十枚ほどの一冊を、お雪はスラスラと読み終わつて、巻かんをとぎしながら、

「つまり王昭君という方は、絵をかく人に美人にかいてもらえなかつたために、あんな運命になつたのですね、美人薄命というのを、裏から行つたようなものですね」

と言いました。

「王昭君は本来美人なのだろう、だからやはり美人薄命さ」

竜之助が答えると、

「それはそうですね、本来の美人を、絵をかく人が醜婦にかいてしまったのでしよう、ですから、醜婦として取扱われて

しまつたんですね。つまり絵をかく人が、筆の先で王昭君を殺してしまつたのですね」

「まあ、そんなものだ」

「してみると、人を殺すのは刀ばかりじゃありませんね、筆の先でも、立派に人が殺せるんですから……」

「そうだとも、筆の先でも、舌の先でも……」

と竜之助がいいますと、お雪が、

「わたしなんか美人じゃありませんから……」

それは謙遜けんそんで、お雪ちゃんにもなかなかよいところがあります。

「先生、わたしには、どうしてもまだ一つわからないことがあるのよ、いつかお尋ねしようと思つていましたけれど、つい……」
お雪がこう言いますと、竜之助が、

「何ですか」

「それはね、この間、塩尻峠の上のあの大変の時ですね、勝負がどうなったんだかちつともわかりませんわ、相手の人たちはいないし、斬られてしまったとばかり思っていた先生が、無事でお帰りになったんですから。わたし、あの時から、あなたは幽霊じゃないか知らんと思いました」

「あれですか、あの時は先方が乱暴をしかけたから、こっちがそれを防いだだけです」

「でも、先方は四人でしょう、そうして、あなたはお一人でしょう」

「ええ……」

「それで、どうしてお怪我がなかったのですか」

「こつちも刀を抜いて防いだから……」

「だって、あなたはお眼が見えないでしょう、眼が見えないで刀が使えますか」

「眼が見えなくなつて、手があるじゃありませんか」

「だって、先生……」

「手があるから刀を抜いて防いでいました、そうしたら先方が逃げてしまったのです」

「だって、あなた、斬られたらどうなさるの？」

「斬られなかったから助かりました」

「その斬られないのが不思議じゃありませんか、先方は眼のあいた人が四人で……」

「それでも、こうして刀を持っていれば斬れないじゃないか」
「いって竜之助は、右の指を一本出して刀を構える形をして見せますと、」

「斬られないことにきまつているもんですか、刀を持っただけで、斬られないッてことがあるもんですか」

「それでも……こうしていれば斬れないものだ」

竜之助が横になりながら、右手の指を一本出している形に、お雪はゾツとしました。

「じゃ、あなたは剣術の名人なのですか」

「名人でも何でもないさ、人間が二尺の刀を持って、五尺の身体からだを守れないというはずはないでしょう」

「だって、先生、刀と物差とは違ものさしいましょう」

「そうですね、刀と物差は……」

竜之助は、お雪の比較を珍しそうに暫く考えていましたが、
「同じようなものでしょう、眼をつぶっていても、思う通りの寸尺に切ろうと思えば切れますからね」

「そんなことがあるものでしょうか……」

お雪もそれを考えさせられました。しばらくして気がついたように、

「そうそう、昔、裁縫の名人があつて、年とってから眼がつぶれ、不自由をしたそうですけれど、ハサミを持つと、物差をつかわないで、一分一厘の狂いもなくたちものをしたという話を聞きました」

と言いました。

それぞれ、おれは今でも刀を取れば、何人をものがさないの

なんびと

だと竜之助はいいませんでした。けれどもお雪は、眼が見えなくても、刀は使えるものだとうすうす信ずるようになって、

「それでも先生、もうおよしなさいましよ、ああいう時は早く逃げて、相手になさらないようになさいまし」

「逃げるつたつて、逃げられないじゃないか」

と竜之助が言いますと、

「全く困つてしまいましたわ。つまり運がよかつたんですね」
ここでも運の一字で、偶然と必至とに結論をつけようとして
いる時、下の座敷で、にわかには足拍子の音が起つて、声を合わ
せて歌い出したものですから、

「木曾踊りが始まりました」

ころころナアー

ナカノリサン

節面白く歌う木曾節は、

ころころナアー

ナカノリサン

心細いよ

ナンジャラホイ

木曾路の旅は

ヨイヨイヨイ

笠にナアー

ナカノリサン

笠に木の葉が

ナンジャラホイ

舞いかかる

ヨイヨイヨイ

お雪も、竜之助も、二階で、その歌と足拍子を、手に取るように聞いておりましたが、

「先生、木曾踊りがはじまりました。夏の盛りの時は、あれが毎晩のようにあったんだそうですけれど、もう人が少なくなつ

たものですから、きょうは納めの木曾踊りだそうですね」

お雪は、その歌と踊りの音に、そそられたようですけれども、竜之助は、さほど多感ではありません。

「まだ、あんなに人がいたのですか」

「ええ、総出で踊っているんでしょう、お客様も、宿の人たちも、そうしてきょうは器量一杯に踊って、あすは、みな散り散りに別れるんですって、寒くなりましたから……」

「お雪ちゃん、お前も行つて踊りなさい」

と竜之助が言いますと、

「わたし、踊れやしませんわ、ですけれども、ちよつと行つて見て参りましょう」

「歌をよく覚えておいでなさい」

「ええ」

お雪はこの座を立つて踊りを見に行きました。

十四

お雪が行つて見ると、下の座敷を打抜いて、かれこれ五十人
ろうにやくなんによ
ほどの老若男女が、輪を作つて盛んに踊つているところであり
ました。

木曾のナアー

ナカノリサン

木曾の御岳山は

おんたけさん

ナンジャラホイ

夏でも寒い

ヨイヨイヨイ

あわせ
裕ナアー

ナカノリサン

裕やりたや

ナンジャラホイ

旅の人

ヨイヨイヨイ

お雪が後から駈けつけて立つて見ると、音頭おんどを取っていた五
十ぐらいの、水々しくふとつた婆さんが、お雪を見て、

「あなたもお入りなさいな」

「いいえ、わたし、踊れないんですもの」

「踊れますよ、中へ入つておいでなされば、誰でもひとりでに
踊れるようになりますから、お入りなさいな」

「有難うございます」

お雪がまだ遠慮をしていると、その色気たつぷりの婆さんが、
また輪の中へ戻って、

あわせ
拾ナアー

ナカノリサン

拾ばかりも

ナンジャラホイ

やられもせまい

ヨイヨイヨイ

じゅばん
襦袢ナアー

ナカノリサン

襦袢仕立てて

ナンジャラホイ

足袋そえて

ヨイヨイヨイ

このお婆さんの頬かぶりと踊りぶりが水際立みずぎわだつておりました。やはりここへ湯治に来ているお客様の一人には相違ないが、いつかこのお婆さんが、一座の指揮者のようになってしまい、すべてはその指揮に従つて、喜んで踊っているようです。そう思つて見ると、この婆さん、身なりもお召か何かをきて、年には似合わず色気たつぷりで、そのくせ、茶屋料理屋のおかみさんとも見えず、やつぱりこういった派手好きの素人しろうとの、裕福な家の後家さんともいったようなものでした。

果して、この総踊りを名残なごりに、その翌日になると、泊り客のほとんど総てが別れ別れになつて、帰国の途につきました。

ひとり色気たつぷりな物持の後家さんらしいのは帰りません。その次の日になつても、帰ろうとする模様が見えません。

で、お雪と顔を合わせるごとに、愛嬌あいぎょうたっぷりでお世辞を言いました。

これでは、四十島田をいやがる者まで、ついまきこまれるだろうと思われるほどの愛嬌を売るものですから、お雪も心安くなりました。実際、また今はお雪のほかには女客は、みんな帰ってしまったのですから、いやでも心安くなるのはあたりまえです。

どこのおかみさんで、どういう人で、いつまでこんなところに逗留とうりゅうしているつもりだろう——と、お雪がそれを不審がるのもあたりまえで、それを尋ねもしないうちに、宿の男衆が告げてくれたのは、この人たちにも、かねて疑問となっていたからです。

「ありや、飛騨の高山の名代なだいの穀屋こくやの後家さんですよ、男妾おとこめかけを

連れて来ているんですよ、男妾をね」

と言つたものですから、お雪がそうかと思いました。

ある時、廊下で顔を見合わせた若いのがそれでしよう。色が青ざめてやせていましたが、かなりのやさ男と思ひました。

後家さんは、それを男妾だとはいひません、伴ともにつれて来た男衆だといつていますけれど、到着早々、誰もそれを信ずるものがなくなつてしまつたので、若い男は少しばかりきまり、を悪がつてゐるが、婆さんはしゃあしやあとしたもので、どうかすると、泊り客にも思ひきつたところを見せつけたりなどするものですから、この夏中、評判の中心となつていました。

「あんな婆さんに可愛がられては、男妾もやりきれまい」

岡焼半分に噂は絶えなかつたが、後家さんは闊達かつたつなもので、愛嬌で泊り客をなめまわし、身銭みぜにをきつておごつてみたり、踊

りの時などは、先へ立つて世話を焼いたりするものですから、
つい人心を収攬しゅうらんしてしまつて、この色氣たつぷりの後家さんが、

この夏中の温泉の座持ちでありました。

そうしていま帰らなければ、御同様ここで冬籠ふゆごもりをするつもりかも知れない。

久助も、お雪も、その話を聞いて呆あきれてしまいました。しかし、呆あきれてしまった久助も、お雪も、この後家さんに面めんと向えば、そのお世辞に魅なめせられて滑らかに話が合つて、いい氣持になるのが不思議なくらいです。

ただ、なんだか氣の毒で痛々しいのは、後家さんの連れて来た男妾だといわれる男で、ロクロク座敷から顔を出さないで、たまたま顔を出した時も、氣の抜けたような色をしているものですから、

「あの分じや、今年中には精^{せい}も根^{こん}も吸い取られてしまうだろう」
勝手口でよけいな心配をすると、

「とぼしきつたら、また新しいのを差代^{さしか}えらあな、金に不足はないし、あの色氣じやかなわねえ、この夏中、あの後家さんに吸いつかれたのが、少なくとも五人はあつたが、それでも吸い取られずに逃げたのが命拾いで、つかまつたのが運の尽きさ」
と憎まれ口をきく者もある。

そんなのを聞きながらも、日一日とお雪は、この色氣たつぷりの後家さんと懇意になつて、お雪はおばさんおばさんといい、後家さんはお雪さんお雪さんといつて、絶えず往来してしました、ある日、

「お雪さん、きようはひとつ鬼^{おに}ヶ城^{しろ}を見物に行こうじゃありませんか」

「参りましょう」

「二人、水入らずで行きましょうね」

「そうしましょう」

お雪はこの後家さんの誘いを素直に受入れて、この地の名所、ついで、から鬼ヶ城の方へ、フラフラと出かけました。

十五

そのあとで、机竜之助は、丹前たんぜんを肩から引つけて、両手えりをその襟から出し、小机の前に向つて、静かに罨法あんぼうを施しておりますと、

「御免下さいまし……」

怖る怖る隔ての襖を開いたものがあります。

「誰です」

竜之助は別に振向きもしません。振向いたとて見えもしませんから――

「御免下さいまし、お邪魔をしても、さしつかえございませんまいか」

「お入りなさい」

と罨法あんぼうを施しながら、竜之助が答えました。

「それでは御免下さいまし」

御免下さいましを三重まで重ねて、おずおずと入って来たのは、二十二三の色の白い、羽織じかけの氣きの利いた商人風のやさ男であります。

「実は、私は困ってしまいましたものですから、お見かけ申して、あつかましくもお願いに上ったわけなのですが……早く申

しますと、私はここを逃げ出したいのでございますが、どう逃げ出したらよろしうございましょう、お察し下さいまし」

その語尾が、おろおろ声になるほどの嘆願でありましたから、ははあ、これは例の男妾だなと竜之助が思いました。

その話は、もうお雪から聞いていたのです——

「あの後家さんは男妾を連れて来ているんですって。かわいそうに、その男妾というのは、逃げ出したがつて、逃げだしたがつて、弱りきつていゝるんですって」

とお雪が、前の晩に竜之助に向つて、笑いながら話したことでした。

それが、この隙すきを見て相談に來たのだな、笑止千万なことだと思つてゐると、その男はにじり寄つて、

「恥をお話し申さないとわかりませんが、実はあの婦人につか

まりましたのも、私の方にも落度おちどがないとは申されませぬ……私の方にもあの後家さんをため、にしようと思う慾があつたから、こうなつてしまつたんでございますが、これで私には、国に妻子が残してあるんでございます、どうかして逃げるくふうはなものでございましょうか、ただいまにも、私を逃がしていただけないものでございましょうか、お願いでございます」

馬鹿な奴だ！ 意気地のない骨頂こつちようの奴だ。つまり富裕な後家さんからたらされたのを機会に、甘い汁を吸おうと思つて、御意ごいに従つたのが仇あだとなり、さんざん、おもちゃにされて精根せいこんを吸い取られ、逃げ出しては取つかまり、取つかまり、どうにもこうにも所在が尽き果てて、人の顔を見れば助けを求めているのだ。そこで竜之助は、

「せつかくですが、拙者にも智恵がありません」

男は泣かぬばかりに、

「弱りました、全く弱りました、この分では、私は殺されてしまします……いっそ、女を殺してと思いましたが、私にはそれだけの力がございません、ああ、もうやがて帰って参りましょう、私は、怖ろしいございます、私はあの女の息をかぐのが、大蛇おろちの息をかぐような氣持がします、あの女にそばへよられると、道成寺どうじょうじの鐘のように、私の身が熱くなつて、ドロドロにとけてしまいそうなんです、ございます、眼がまわります、苦しうございます」

五十を過ぎてあぶらぎった好色婆のために、取つて押えられて、人目も恥じず、悶もだえ苦しむ有様は、むしろ悲惨の極であります。

久しぶりで竜之助の顔に、微笑が浮きました。

「何がそれほど苦しいのです、そんなに人を苦しめる奴は、懲こらしておやりなさい」

「全く……」

男は苦しい声で叫びました。

「殺してしまいたいんですけれども、私は意気地なしでございます」

意気地なしは今はじまったことか――

その時、思わず竜之助の血が熱くなりました。一番その淫乱の後家をきつてやろうかな。五十過ぎたとはいえ、脂あぶらぎつて飽くことを知らぬ女の肉体。きつてまんざらきりばえのないこともあるまい。

そうなると、いよいよ冷然たるもので、竜之助は冷れいあんぼう罽法をつづけながら、

「これ、若い衆……」

「えッ」

男妾が、そのつめたい呼び声にヒヤリとします。

「お前は、本心からその女がいやなのか」

「いやでございますとも——死ぬほどいやでございます」

「その女が死ねばお前は助かるのだな、お前の力で殺せれば、殺したいのだが、その力がないとこういつたな」

「ええ、その通りでございますとも、自分が殺されるか、あの婦人を殺して助かるかの境でございますが、私は意気地なしで、とても人を殺すことなんぞはできませんから、みすみすあの婦人にいいびり、殺されてしまうんです」

「よろしい、それでは、わしがお前の代りに、その女を斬つてみよう」

「えッ」

その時、男妾はゾツとして、

「えッ、ただいま、何とおつしやいましたか」

竜之助の、たつたいま言つた一言を思い返そうとして、まずふるえが先に立ちました。

冷罨法を施している竜之助は、二度とはそれに答えようとせず、男妾のみが、無暗にふるえ出してせきこみ、

「私に代つて、あなた様が、あの婦人を斬つておしまいになる、殺して下さい、それは本当ですか。それは怖ろしいことです、その怖ろしいことを、あなた様が、私に代つて、そうして……」男妾は自分でせきこんで、自分で咽喉のどをつめてしまいました。「本当でございますか。人を殺せば自分も助かりませんね、これを御承知でございますか。色事は冗談でございましょうとも、

人を殺すのは真剣でございます……私はいつたい、何を、あなた様に申し上げましたろう、何をおたのみ申したんでしよう」

一旦、息のつまった男妾はこういつて、眼をき、よろき、よろきながら、極度におちつかない心で四方^{あたり}を見廻すと、竜之助のかたわらに大小の刀があることが、著^{いちじる}しく脅迫的に眼にうつつたと見えて、また青くなりました。ほとんど取返しのがつかないことをやり出したもののよう——

一切、その狼狽^{ろうばい}に取合わない竜之助の冷やかさが、ようやくこの男妾を仰天させました。

「ねえ、あなた様、ただいま、何を申し上げましたか、それは一時の愚痴でございますから、どうかお取消しを願います、お気にさわりましたら、御勘弁下さいまし。なあにほんの取るに足らない色恋の沙汰でございますから、私さえ逃げ出せばそれ

でいいんでございます。生かすの殺すの、あなた、水の出端でばなや主ぬしある間の出来事とは違ひまして、生かすの殺すの、そんな野暮なものじゃございません……」

しかし竜之助は冷罨れいあんぼう法を施しつつ答えず。男妾はいても立つてもいられないように、座敷の中を飛び廻つて、

「さきほど、あなたのおっしゃったことを、もう一度お聞かせ下さいまし、私に代つてあれを斬つてみようとおっしゃったのは、御冗談ごじやうだんでございましたね。もし、御冗談ごじやうだんでございませんでしたら、お取消し下さいまし。あやまります、あやまります、このように……」

それでも竜之助は返事をしませんでした。返事をする必要がないからでしょう。そこで男妾はまた立ち上つて、

「本当のことを申しますと、私もあれが好きなんでございます、

年こそ違っておりますけれど、たまらない親切なところがある
んでございますから……生かすの殺すの、それはあなた、一時
の比喩、夫婦喧嘩同様な愚痴をお聞かせ申したただけなんでござ
いますから、どうぞ……」

竜之助のつめたい面に、抉るように微笑ののぼつて来たのは
その時です。

十六

山地は寒の至ることも早く、白骨の温泉では、炬燵を要する
の時となりました。

この頃、男妾の浅吉は、別な心持で落着かなくなりました。
というのは、後家さんの圧迫をのがれよう、のがれようと苦

しんでいた男妾が、かえつて嫉妬に似た気持で、後家さんを引
きつけようとあせる気色けしきが、ありありと見え出したことです。

この二組のほかに、お客というもののない今日の白骨いまの全温
泉で、おたがいが一家族のように親しくなるのはあたりまえで、
おたがいに入りの密になるのもあたりまえですが、後家さん
が、お雪と竜之助のところへ話しに行くと、そのあとで、男妾の
浅吉が、額に苦しい汗を出して、やきもき悶もだえはじめます。そ
うして、ある時は一生懸命の思いで、後家さんに向つてこうい
うことを言いました、

「おかみさん、うつかりあの座敷へ行つてはいけませんよ……
あの久助さんや、お雪ちゃんたちと、懇意にするのはようござ
んすが、あの浪人者みたような人に、近寄らないようになさい
まし」

そうすると、色気たつぷりの後家婆さんが、

「何ですね、お前、そんなわけにゆくもんですか、この一つ家にいながら……」

と取合いません。

「それでもね、おかみさん、あの人は、どうも気味の悪い人ですから、御用心なさらなくちやあ……」

「気味の悪い人……そりや御病人ですもの。お目が悪いのに、身体が少し疲れていらつしやるんですよ。つきあつてごらん、なかなかよいところのある方ですよ」

「いいえ、おかみさん……」

といつて男妾の浅吉は、唾つばを呑み込んで、何かいおうとして、いのを憚はばりましたが、思い切つて、

「おかみさん、あの方は人殺しをした方ですよ、そうに違いあ

りません、私はそばへ寄つてゾツとしました。いいえ、証拠を見たわけじゃありませんが、たしかに人を斬つて身を隠すために、こちらへ来ているんですよ、どうしても私にはそうとしか思われません。ですから、あの人のそばへ寄ると、いつも斬られてしまうようにばかり思われてなりません。ですから、おかみさん、あなたも斬られないようになさいまし」

「何をいつてるんですよ、この人は……人様をつかまえて、そんなことをいつてごろうじろ、それこそ本当に斬られる種をまくようなものじゃないか。わたしあ、どんな人だつてこわいと思わないよ、こっちの出様ひとつじゃないか、出様ひとつでどうにでもなるものだよ」

「ですけど、おかみさん、あの方は殺すといつたら、キツと人を殺しますよ、あの人情につめたい顔の色をごろんなさい」

「ほんとうにどうかしているよ、この人は……誰か、わたしたちを殺すといいましたか」

「いえ、いえ、そういうわけじゃありませんけれど、盲目めくらでいながら、ああして刀をそばへ引きつけておく人には、油断がありません」

「お前、何かあの方に失礼なことをいって、脅おどかされたんじゃないの……」

「いえ、いえ、決してそういうわけじゃございません、おかみさんのお身を心配するあまり、ついよけいなことを申し上げました」

「付合ってごらん、あれで、なかなか苦労人で、世間を見ておいでなさるから。ポツリポツリ話してゆくうちに、だんだん味が出て来るようなお方ですよ、こわいこともなにもありやしま

せん」

「ですけども、おかみさん……私が可愛いと思うなら、私に心配をさせないで下さい。ね、私は、いつおかみさんが、あの人に斬られるか……それを思うとヒヤヒヤしつづけですから」

「ほんとうにお前は意気地のない人だ……さあ一つお上りよ」

後家さんは、炬燵こたつの上の杯を取って男妾に与えました。

そこへお雪が廊下の外からやって来て、

「おばさん」

「はい、お雪さん、お入りなさい」

と言つて、炬燵の上の酒の器うつわだけを下へおろしてしまひますと、お雪は、

「さきほどは有難うございました、お邪魔をしてもようござい
ますか」

「よいどころじゃございません、さあ、お入りなさいまし」

「御免下さい」

お雪が入つて来ると、後家さんは炬燵の一方へ座蒲団ざぶたんを出して、ついでに茶棚の上の蕎麦饅頭そばまんじゅうのお盆を炬燵の上へ置きました。つまり、お雪が入つて来たために、酒と蕎麦饅頭とが炬燵の上で交送こうそうした結果になりました。

「一つおつまみなさいな」

「どうも御馳走さま」

三人が炬燵を囲んで世間話がはじまると、やがて先日の本曾踊りのことになり、

「おばさん、まだ、わたしあの歌がよく覚えきれませんから、教えて頂戴な」

後家さんは喜んでお雪に向つて、例の「心細いよ、木曾路の

旅は、笠に木の葉が舞いかかる」という歌の文句からはじめて、
合あいの手までも教え、はては自分が得意になって、かなりの美音
でうたい出しましたから、一座もなんとなく陽気になってきま
した。

歌を教えてしまうと、後家さんは、

「踊りはこの人が上手だから、教えておもらいなさい」

おとこめかけ
と男妾の浅吉を指さしました。

「どうぞ、教えて下さい」

とお雪も、それに合わせて浅吉にたのむと、

「どう致しまして、私なんぞ……」

浅吉がハニかむのを、後家さんは叱るように、

「教えてお上げなさいよ」

「どうぞ、おたのみ致します」

お雪も面白半分に、浅吉にたのむものですから、浅吉がいよいよ迷惑がり、

「いいえ、ダメですよ」

「そんなことをいわずに踊って見せてお上げなさい……ねえ、お雪さん、あなたも、ただ教わっちゃ駄目よ、一緒に立って、手を取って教えてもらわなくちゃ」

「いいえ、わたしは見せて教えていただけば覚えますから」

「そんなズルいことをいつて駄目よ、教わるのに横着をしちゃいけません」

「だって、できもしないのに、きまりが悪いんですもの……」

「ナニ、きまりが悪いことがあるもんですか、若い同志で充分に踊りなさい、わたしが、ここで歌いますから……」

後家さんがこう言つて、二人を立たせようとしたけれども、浅

吉はいよいよハ二かんで立とうとはせず、お雪も無論手を取つてまで、教えてもらおうとは思いません。

そこで、木曾踊りの実演は中止の形となりましたが、

「若い人は、遠慮があるからいやよ」

と言つて後家さんが急に立ち上つて、廊下へ出ました。浅吉と二人ばかりあとに残されてみると、急に座敷がテレてしまつて、なるほど、あの陽気な人が一人いるといないでは、こうも違うものかと思わせられるくらいです。

それでも、お雪は急に暇乞いいとまごをして立ち出でるわけにもゆか

ずに、後家さんの戻るのを待つていたが、その戻るのが意外にてまど手間取れるので、もどかしく思いました。多分お手水ちようずにでも行つ

たのだろうが、それにしては長過ぎるとお雪が待ちあぐむ頃には、浅吉が落着かなくなつて、しきりに氣を揉んでいる様子が、

ありありと見えますから、お雪は、

「おばさん、どうしたんでしよう、帰りが遅い」

いらいらしていた男妾の浅吉は、やがて声を低くして、

「お嬢さん——」

と、お雪のことを呼びました。

「はい」

お雪は、この男にも同情を持っているのです。同情というものは、広い意味の同情で、同情の中に異性の思いやりを含むという次第では無論ありません。いわばお雪は誰に対しても親切な娘であります。

「あなたのお連れのお方は、あれはお兄さんですか……」

「いいえ、兄ではありません、親類の……」

とお雪が煮えきらない返事をしました。

「お目が悪いんですね」

と言いますと、

「ええ、煙硝えんしょうの煙で、お目を悪くしてしまつたのだそうですよ」

「それはいけません」

「どういうわけですか、わたしもよくは聞きませんでした」

二人がボツリボツリとこんな問答をしている間も、席を外はずした後家さんは戻つて来ません。いつたい、どこへ何しに行つたのだ。お雪もようやくよくもどかしくなりました。

「どうしたんでしょう、おばさん帰りが遅いですね、わたし、お暇致しましょう」

お雪も、若い男と二人さしむかいでは氣が置けると見えて、帰ろうとすると、

「まあ、いいじゃございませんか、お話しなさいまし、もうす

ぐ帰りますよ」

「それでも……では出直して参りましょう」

「いいえ、よろしうございますよ。それからお嬢さん、まだ本がいくらもございますから、お持ち下さいまし」

「そうですか、それではあとでお借り申しに上りましょう、御免下さいまし」

と、そこそこにお暇乞いをしてお雪は帰りますと、まもなく、自分の廊下のところに立ち止まりました。

その中でヒソヒソと話し声が聞えたからです。はて、久助さんは下で煙草切りをしているはず。あとは先生一人でいたはず。そこでヒソヒソと話し声がしたものですから、お雪が足をとどめたのも無理はありません。

「じつかわえんじやく実川延若の石川五右衛門、ようござんしたねえ」

と、詠嘆的にいったのは、例の後家さんの声でありました。

帰つて来ないはず。ここで話し込んでいたのだもの――

それにしても、座興半ばで席を外して、人の座敷へ来て、ゆるると話し込んで、しかも役者の噂うわさ、おばさんも暢気のんき過ぎると、お雪も少し呆あきれていると、

「そうすると、隣の棧敷さじきにいた若い人のいうことがいいじやありませんか、あれでは五右衛門がいい男過ぎる、五右衛門という奴は悪人だから、あんないい男にこしらえてはいけない……ですとさ。悪人をいい男にこしらえては、なぜいけないんでしょう。ですから、わたしがいつてやりました、悪人はみんないい男ですよ、いい男だから悪人にされてしまうんですつて。醜男ぶおとこだけが誰もかまい手がないから、それでやむを得ず善人でいられるんですつて。ですから大抵の女は、善人よりも悪人に惚れ

ますよ、といつてやりました」

後家さんは、水つぽい調子で得意になって、こんなことを言つていましたから、お雪がいつそう呆れてしまいました。

立聞きをすれば三尺下の地の虫が死ぬというたとえがありま
すから、お雪はそれを聞きたくないと思ひましたけれども、こ
うなつてみると、後家婆さんが得意になつて浮うわついた話の最中
へ入るのは厭いやな気がしますし、そうかといつて、再び浅吉のと
ころへ引返す気にもなりません。

そこで、お雪は氣をかえて、ひとり湯殿へ下りて行きました。

十七

お雪が湯から上つて来た時分には、後家さんも帰つてしまつ

ていました。けれど、それから後、この後家さんは、いよいよお雪になつくくして、お雪も悪い心持はなく往来しているうちに、どうも後家さんがお雪を、浅吉に近づけよう、近づけようとしてゐることがわかりました。

前の時のように、お雪が来ると、自分は座を外して、浅吉と二人だけを残して置くのが、心あつてするように、お雪にも気取られるほどになりました。

そうかといつて、お雪は怖氣おぞけをふるつて浅吉を毛嫌いするわけでもありません。また別段に不憫ふびんがるというのでもなく、万事を心得て、あたりまえに附合ふあひつていられるほど、お雪は素直な氣質を持ち合わせていました。

それに反して、浅吉の方の躍起やつきとなる有様は、日一日と目立つてゆくのです。

ある時、お雪は湯から上つて帰ると、廊下でただならぬ物争いを聞きました。

それは珍しくも、あの柔順な浅吉が、主人の後家さんを相手に、一生懸命で何事をか言い罵つて^{ののし}いるところです。

今日も、たくんでした立聞きではありませんが、行きがかり上、耳に入れないわけにはゆかないので、困つていると、

「おかみさん、あなたという人はほんとうに罪な人ですよ……
今だから申しますが、先の旦^{せん}那樣のお亡くなりになつた時だつて、ずいぶん噂がありましたよ。穀^{こく}屋^やの家には今でも青い火が出る、いわない人はありませんからね」

「ナニ、何ですつて。人聞きの悪いことをお言いでないよ」

「申しますとも。あなたぐらい、性^{しょう}悪^{わる}の、男つたらしの、罪つくりな女はありませんよ。この夏中だつてそうでしょう、わた

しが見て見ないふり、をしていれば……」

「おや、わたしはお前に監督されなけりやならないのかい、お前が見ているところで、何かしちや悪いのかい」

「だって、少しは遠慮というものがございましょう、私を前に置いて……」

「だからいつてるじゃないか、何を私がお前に遠慮しなけりやならないの……よく考えてごらん、身分を考えてごらん、わたしは主人、お前は雇人じゃないか」

「……………」

「口幅つたいことをおいでないよ」

柔順な若い男は、肥え太った浮気婆さんのために、頭から押しつぶされています。

聞くとはなし、それを聞いたお雪は、なんというかわいそう

な人だろう、またこのおばさんも、なかなかのしたたか者だと思わないわけにはゆきません。

その日の午後、お雪は花を集めて部屋を飾ろうと思つて、近いところの尾根から林の中へ入りました。

無心で花をたずねて、林の中へ進んで行くと、ふと行手でガサリと音がしましたので、ハッと驚きました。もしや、あんまり深入りして、熊にでもでつくわしたのではないか。

とおそれて、その音のした林の奥を見ますと、幸いに熊ではありません。たしかに人間の姿であります。先方では気がつかないが、こちらではよくわかります。林の中を、あちら向きになつて、うろうろたどつて行くのは、まぎれもない、男妾の浅吉の姿でしたから、お雪は、不安な思いでじつとそれを見送りました。

暫く様子を見ているうちに、お雪がじつとしていられなくなつて、顔色を変えて、一散いっさんに浅吉のいた方向に向つて馳はせ出したのは、魂を失うたように、うろうろしていた浅吉が、今しも一本の木の枝を選んで、そこへ紐をかけたのはまさしく縊くびれて死のうとの覚悟に相違ありません。

あなやと、お雪はかけよつて、今しも紐へ両手をかけた浅吉の身体からだに抱きつきました。

お雪に抱き留められた浅吉は、それを振り解とくほどの気力もなく、ぐったりと草の上へ倒れて、さめざめと泣きました。

それを慰めるお雪。追々力をつけられて、死ぬまで思いつめた心の苦しみをお雪に訴える浅吉。つきつめてみると、それは嫉妬からです。あの浮気婆さんとの今までの関係を、浅吉はお雪に向つてことごとく打明け、あの後家さんの容易ならぬ乱行

を、こと細かく語つて聞かせました。旅役者か何かとくつついて、先せんの夫を毒殺したという専もつぱらの評判。そのほか浮名を立てられた相手は今日まで幾人だか知れないが、いいかげんおもちゃにした後は、突き放したり、上手に切り抜けたりして——世間並みの金持後家さんは、若い男につき込むのだが、あの婆さんは若い者の生血いきちを絞る——若い者だけではない、あの調子だから、目をつけた男は大抵ものにしてしまう。この夏中もどのくらい、聞苦しい噂を聞いたか知れない。そうして現在も……と浅吉は口のあたりをひきつらして、現在にも何か容易ならぬ恨みを持つているのがこらえきれないらしい。お雪はなお一生懸命にそれを慰めて力をつけ、いたわりいたわりして、とにかくも宿の方へと連れて帰りました。

その帰り道、茶堂橋まで来た時分、お雪は何心なく小梨平の

方を仰ぐと、その坂道を、こちらへ人の下りて来るのを認めました。同じような笠が揃つて四五名、まだ士農工商のいずれともわからないが、こちらへ向いて四五名が隊をなしてやつて来る姿が、豆のように見えることは確かです。

もう、人が入つて来ないはずの白骨の温泉。集まつた人は、この間、綺麗きれに解散をしてしまつたはずの温泉。これから春、雪の解ける時までには、人跡の絶ゆるということを用意していたこの温泉へ、今となつて入り込んで来るのは穏かではないようにお雪が感じました。何か特別の目的があり……そうでなければ——お雪がふと思ひ当つたのは、もしや、あの塩尻峠の時の侍たちがあとを慕つて仕返しに来たのではあるまいか。

そう思つて見ると、今し、山道を下つて入り込んでくる四五名の人数が、お雪にとっては容易ならぬ脅威のように思われて

なりません。そこでなんとなく胸が落着かないで、振返り振返り、茶堂橋を渡ると、右の人たちの姿も、木の間に隠れてしまいました。

ほどなく、その山かげから歌をうたう声がありました。遠く響いて来る歌の声は聞えるが、それが何の歌であるかわかりません。ちよつと耳を傾けていたお雪は、ややあつて、ああ詩を吟じているのだときとりました。

してみれば、これは侍だ。農工商、或いは山方やまかたへ出入りの木樵きこり炭焼すみやきで、詩を吟じて歩くようなものはないはず。

侍ならば、まさしく塩尻峠の連中があとを慕うて来たのだ。どうしよう、あの人たちの立退くまで、わたしたちは隠れていなければならぬ。一日や二日ならば隠れおおせるが、もしあれがわたしたち同様に、冬籠りふゆごもをするつもりで来たとすればど

うしよう、ほとんど逃れる道はない――

お雪は、一緒につれた浅吉の身の上よりは、自分たちの近い将来が心配になって、急いで宿へ帰り、浅吉をその部屋へ送り届けて、自分たちの部屋の障子をあげようとする、中からあわただしくそれを押しあけて、

「お雪さん、お帰りなさい」

と飛んで出た後家さん。その上氣した顔と、息のはずんだあわてぶりが、この人らしくもないと思いながら、

「ただいま帰りました」

そうして一歩なかへ入って、枕を横にしている竜之助の顔を見ると、それが人を斬ったあとのように冴さえておりました。

幸いにして、山を下って来た笠の一隊は、お雪が心配したほどのものではありませんでした。木曾路を取って京都へ帰ろう

とした神樂師かぐらしの一行が、ふと道を間違えて、こちらへ入り込んだからやむを得ず、安房峠あぼうとうげを越えて、飛驒ひだへ抜けようとのこと
です。

お雪は、その由を聞いて安心しましたが、疑えば疑えないこと
とはない。第一木曾路を通るものが、ここへ道を間違えたとは
間違え過ぎる。しかしそれとても昔の歴史をたどつてみれば、
全く無理な間違え方ともいえないので、この一行が宿へ到着し
て、一浴を試みてから炉辺ろへんへかたまつての話を、

「上方かみがたから東国への道は、この辺が祖道になるのだ。大同年中
に伝教大師が衆生化導しゅじょうけどうのためとて東国へ下る時に、上神坂越え
とあつて、つまり飛驒の高山あたり、笠ヶ岳の下、焼ヶ岳の裏を
今の上高地を経て、あの島々谷を松本平方面に出られたに違
ない。伝教大師もこの道ではよほど難渋されたと見えて、広済こうさい、

こうきよく

広極こうきよくという二院を山中に立てて、後の旅人を憩いこわしむるようになされたとのことだが、その時代、路らしいものはあつたにはあつたと思われる。しかし、なにしろ今にしてもこの有様だから、大同年間のことは思われるばかりだ。高僧智識が捨身無一物の信念を以て通るか、しからざれば、天下に旅する豪氣の武士もののふでなければ覺束おぼつかない。上神坂越えの難たることは、まさに天に上るの難よりも難かつたに相違ない」と説明するところを見れば、地の理にも、歴史にも、そう暗い人たちとは思えません。

それほどの知識がありながら、わざわざここへ迷い込む由もなからうではないか。

その説明者を見ると、ついこの間、芝の三田の四国町の薩摩屋敷で、南条力を相手に地図を示して、飛騨の国の国勢を説い

ていた、たぶん、池田といった神楽師の一行では長老株——武州の高尾山では、七兵衛と泊り合わせた中の一人によく似ている。

しかし、かの白面にして豪胆なる貴公子はここにはいません。時ならぬ時に、神楽師の一行が、つれづれな温泉宿に舞い込んだという噂うわさを聞いて、浮気者の後家婆さんはいたく喜んで、早速、明朝になったら、ひとつやらせて楽しみましょう……とお湯の中でお雪に話しました。この婆さんの考えでは、多分、越後の国の角兵衛獅子が、国への戻りに舞い込んだものとも思ったのでしょうか。翌日は早速、人を以てかけ合ってみますと、例の一座の長老が、それを聞いて、ニツコリ笑いながらこう言いました、

「われわれどもは角兵衛獅子ではございません、神楽師であり

ます。^{いにし}古えの神樂は神を楽しませ、同時に人を楽しましめんがために行いました。近代の芸術は、神を離れて人間が楽しまうがために作られます。これは悪いことではありません、人が樂しみを求めるのは自然です、自然にその慾求が起れば、これを与えるものの起るのも自然であります。よき慰安を与えらるる時に、人間の氣象が快闊になり、高尚になるのも道理であります。そこにわれわれ神樂師の、神に対し、人間に対する御奉公も起つて来るのでございます。ひとり悪いのは、人間が要求せざるものをほしいままにこしらえて、無理押付けに人間に売ろうとすることにあります。それをやるには誘惑を試みなければなりません、^{ひょうせつ}剽窃をも試みなければなりません。近代の芸術はそこで墮落が始まりました。かれらは作物^{さくぶつ}を模倣し、盗用することは平気です。そうして無用な宣伝と、誘惑と、買収とを以

て、人間にその芸術を売りつけようとするのです——われわれは、その芸術商売人ではないつもりですが、御所望なら何か一曲ごらんに入れてもよろしい」

という返事で、後家さんもちよつと二の句がつけません。

この神楽師の一行は、早々辞し去るかと思うと、案外にも御輿みこしを据すえて、逗留けしきの気色けしきを示しているのも気が知れない一つ。

十八

月見寺を出て、甲府の城下についた宇津木兵馬とお銀様。

甲府は兵馬にとって最も思い出の多いところ。お銀様にとつては故郷も同様のところ。

城下に宿を取って、その晩、兵馬は、ひとり町を歩いてみま

した。

駒井能登守もいなければ、神尾主膳もない。南条力も、五十嵐甲子雄も昔のこと。お君も、米友も、ムク犬も、暫くはこの天地に生を寄せていたことがあり、女おんな軽業かるわざのお角の一行も、ここで笛、太鼓を鳴らしたことがありました。

しかし、それはみな夢のように流れ去って、残るところの山河と、町並だけは相も変らず。兵馬の眼で人間がその昔の時よりも暢のんき気に見えるのは、自分にさしさわりない他人ばかり残っているというせいでもあるまい。たしかに甲府の市民にとつても、その昔のような辻斬の脅威がなくなってしまったことだけでも、生命いのちのゆとりがのびているのかも知れないと思われるほどです。

柳町の一蓮寺。その昔、お角の一行が女軽業を打ったところ

へ来て見ると、そこは相変らず賑やかで、甲府人の行樂のところ。

以前、お角一行の軽業のあつたところには、けばけばしい芝居の興行がかかつているらしい。兵馬はその方へ進んで見ると、何かは知らないが人だかりのする絵看板。

近づいて見ると、思いきつて大きな看板に、黒頭巾くろずきんをかぶつた黒い、で、たちの侍の絵姿。

兵馬は、それを見てゾツとするほど嫌な氣持がしました。

このごろは、世間が殺伐さつぱつだから、芝居にも、切ったり張つたりがはやるのか知ら。

一流の芝居はそうでもないが、年中、活動しているお茶ッ葉芝居は、へらへら役者をかり集めては、無茶に人殺しをやらせる。

ことに沢村宗十郎が、宗十郎頭巾をかぶりはじめてから、へらへら役者共が争つてこの頭巾をかぶりがり、切れもしない刀を抜いては嘔吐へどの出るような見得みえを切つて得意になつてゐるのが、田舎廻りいなかまわならとにかく、江戸のまんなかではやつてゐる。兵馬は至るところで、この黒頭巾をかぶつた、駈け出しのへらへら役者が刀を抜いて、へんな見得を切つてゐる絵看板にでつくわして、自分は通人でもなんでもないが、江戸人の趣味も墮落したものだと思う。そうでなければ清元きよもとや常磐津とぎわづで腐爛うじやじやけてゐる御家人芝居。ここへ来ても、こんなものを見せられるのか。こんなものをこしらえて持ち歩く興行師の俗悪もさることながら、こんなものを見て興がる見物が情けない。

兵馬は正直だから、こんな下等な芝居の横行が、剣法の神聖まがいものを冒瀆ぼうとくするかのようによてゐる。できるならばこういう贗物

の黒頭巾を片っぱしからたたきつて、少なくとも本物の剣法の見せしめにしてやりたいと腹を立つこともあるのです。

そうして、一蓮寺のさかり場を離れて、また市中へ取って返すと、宿からはいくらかもないところの町並に、

「むげんりゅう無眼流剣法指南」

の看板を認めました。

それを認めたのは天佑てんゆうのようなもので、日中なら、かえって通り過ぎしたかも知れません。

無眼流の名は今でこそあまり聞かないが、武術流祖録中に立派に存在する意義ある一流。

町並になっている狭い間口の一方を、少しばかり道場構えにして、一方の畳の上ではしらが頭の一人の爺さんが、絵馬えまの中にうずまつて、しきりに絵馬をかいている。その絵馬をかくた

めの燈ともしの光が、取入れた看板に反射していたものですから、それで兵馬が「無眼流剣法指南」の看板を辛からうじて認めることができたのです。

無眼流の名を珍しとする兵馬は、ここを素通りすることができないうで、

「無眼流の道場というのは、御当家でございませうか」
腰をかがめて丁寧にものを訊ねました。

その時に絵馬をかいていたおやじが、大きな眼鏡越しにジロリと兵馬を見て、

「はいはい」

と答えました。

「先生は御在宅でございませうか」

「はい」

「御在宅ならばお目通りを致したいものでござります」

「はい、お前さんは何しにおいでになりましたか」

「無眼流指南の表札を拝見致しましたゆえに、先生にお目通りを願つて、できることなら、一手の御指南にあずかりたいものと存じまして……」

「なるほど、それは結構なお心がけじゃ……しかし先生と申すのは、恥かしながらこのおやじめのことでござりまする」

「ははあ、あなた様が無眼流の指南をなされますか。それは何より」

兵馬も少し案外に思いましたけれども、事実、こんなのがあるいは隠れたる本当の名人であるかも知れない。名人でないまでも、こういうところに意外な流儀の血統が伝わっているのかも知れない。何か相当の自信がなければ、かりにも一流指南の

看板は出せないはずと、少しも輕蔑の色なく慇懃いんぎんに挨拶をしますと、おやじ、

「さあ、どうぞお通りなさい」

と言ったが、自分は少しも絵馬描きの手を休めるのではありません。

お通りなさい、といわれ、兵馬は、ちよつとドコへ通つて、ドコへ腰を下ろしてよいのだか、それに迷いましたが、やむなく道場の板の間に足を置いて、畳の方へ腰をかけて、

「御免下さい、無眼流とあるのを珍しいことに存じました」

「はい、当今は一刀流だの、心蔭流だのというのがはやりまして、無眼流などは一向はやりませぬゆえ、こうして、道場の看板だけはかけておりますが、弟子というものが一人もありませんでな……」

おやじはあまり自慢にもならないことを、平気でこういいました。

「勤番の諸士方で、御指南をこいにまいるものはありませんか」「ありませんね……ばかにしてね、このおやじをばかにして寄りつきませんよ」

「市中の若い者は……」

「年寄をなぐつても仕方がないといって笑っています」

「失礼ながら、ドチラで無眼流をお学びになりましたか」

「飛驒ひだの高山で習いました……武者修行の途中、あの山中で峨々がが

たる絶壁の丸木橋を渡りわづらうていると、そこへ目の見えな
い按摩あんまが来て、スルスルと渡ってしまったのを見て、両眼があつて、多年武芸をみがきながら、両眼見えずして無心の按摩の得
ている極意ごくいに及ばないことを知って、ついに無眼流の一流を発

明したのは私ではございません、流祖の反町無格そりまちむかくのことですよ。その流れをくみまして、こうして無眼流の看板を掲げましたが、いつこう弟子がつきません。今日はお前さんがたいそう神妙に話をなさるから、お相手になつて上げましょう」

と言うところは、いかにも勿体もったいがついていますから、

「なにぶん、お願い申します」

このおやじ、むかし取った覚えの竹刀しなで立合つてくれるのだらうと期待していますと、おやじは絵馬をかく手をいつこう休めず、道具をつけて立合おうとする気色けしきがなかなか見えません。あるいは、こうして悪く落付いたり、勿体をつけたりするだけに自信があるのかも知れないと、兵馬は多少心中たのもしがつているところへ、おやじは、

「で、お前さん、わしはこうして仕事をしているから、遠慮な

く打ち込んでおいでなさい、竹刀でも、木刀でも、真剣でもかまいませんから……」

けれども兵馬は、この老人に打ってかかろうとも、斬ってかかろうともしませんでした。この老人を打ち取っても功名こうみょうにはならない。絵馬代用の鍋蓋なべぶたじあい試合をはじめたところで芝居にもならない。しかし、それから老人と話し込んでいるうちに、老人の語るところのものには、なかなか聞くべきものがありました。

竹刀しなひの稽古と真剣とは全く別物であること。剣術の巧者こうしゃは必

ずしも真剣の勇者ではないこと。誰もいいそうなことだが、この老人は相応に実験を積んで来たと見えて、耳新しく聞えまして。そのうち、初心の人が、真剣の立合をやむなくせられた場合、すなわち、どうしても刀を抜いて立合わねばならぬ場合には、眼をつぶって立合うに限る——ということから、いつたい、

人間の眼というものは見るべからざるものを見る時は、害あつて益がないものだということ。

それと同じで、有能者が無能者に負けることの逆理を説き出したのが、なるほどと聞きなされました。

「また、おいでなさい。無眼流の極意は、この見える目をいったんつぶしてしまわなければわかりません」

と老人が最後にいった言葉を意味深く聞いて暇いとまを告げ、若干の金を紙に包んで奉納し、なお老人のかいていた絵馬を一枚無心して、それをかついで帰路につきました。

兵馬はその絵馬をかついで、舞鶴城ぶかくじょうの濠ほりの近辺を通ると、どうしたのか、一頭の犬が、兵馬の前路をふさいでさかんに吠ほえ立てます。

「しッ」

兵馬が叱つたけれども、犬は容易に尾をまかないで、かえつて目を怒らして兵馬に飛びかかろうとする、すさまじい勢い。

そこで兵馬は小癪こしゃくにさわれました。かつて、慢心和尚がいう

ことには、「人間は、犬に吠えられるようでは、修行が足りない」

兵馬は、この一言を思い出しました。なるほど、あの和尚は、

随分奇抜な風采ふうさいで人の門かどに立つこともあるが、犬に吠えられた

という例ためしを見なかった。人を見れば吠えつく悪犬でも、和尚が

そばへ寄ると、鳴りをしずめてなついて来るのを、兵馬は実見

して不思議なりとしたことがあります。

和尚にいわせると不思議でもなんでもなく、害心のないところ、敵意の生じようはずはないのだと説明する。

しかし、すべての人が犬に向つて害心を持たずに近寄つても、犬のすべてが敵意を示さないという限りはない。そこに何かの

修行があるのだと思いました。

今しも、こうがむしやらに吠え立てられてみると、それが頭にあるだけ、兵馬は癩にさわつてならない。つまり、この犬は、自分の修行を、頭から無視してかかっているのだ。小癩な犬だと思わないわけにはゆきません。

「やまいぬ狂犬が、あっちへ行つた、ひとくら人食い犬が、あの若い侍に食いついてらあ」

ははあ、これは狂犬だ。だれかれの見さかいなく食いつくようになつてゐる。あえて兵馬の修行を輕蔑してゐるのではない。兵馬は、それでやや安んじましたが、犬はいつそう烈しく、尾を振り、牙を鳴らして、兵馬に飛びかかつて来るのです。

そこで、兵馬は、今かついで来た絵馬を肩からおろして、これを左手で縦に構えると、狂犬はさしつたり、というようなわけ

で、猛然としてその絵馬の上へ乗りかかつて来たのを、右の手を遊ばしておいた兵馬が、絵馬の下から犬の左の前足をムズとつかむと、ハズミをつけて一振り振って投げました。

それは実に見事なもので、狂犬はクルクルと中空高く舞い上り、堤上ていじようの松の枝をかすめて、濠ほりの真中へドブンと落ち込み、しばしは浮うかみも上りません。

「強いなあ、あの侍は」

歩みをとめた人々が驚嘆して集まるので、兵馬はきまりが悪く、絵馬をかかえて一散に逃げました。

十九

ちようどその日の薄暮はくぼ、葦崎方面いんさきからこの甲府城下へ入り込

んだ武者修行体ていの二人の者。前に進んでいた遅おくしいのが、何を
思い出したか、刀の柄袋つかぶくろを丁ちようと打って、

「あ、今になつて思い当つた」

突然に叫び出したものですから、同行の丈せいの少し低いのがビツ
クリして、

「何だい、何を思い出したのだい」

「あの、例の塩尻峠の……」

と前の遅しいのが、ちよつと後ろを振り返りました。これはい、の
じヶ原の斬合いの一人、仏頂寺弥助であつて、それに答えて、
「塩尻峠のしくじりを、まだ持越しているのかい」

それは書生で、医術を心得ているあの時の立会人、丸山勇仙
であります。

斬られて介抱を受けた、二人がいなところを見れば、あの

傷がもとで死んでしまったか、そうでなければ、まだ治療最中であろう。

「あれはな、あの男は、武蔵の沢井の机竜之助だ——」

「え、武蔵の沢井の……机？」

「そうだ、そうだ、それに違いない。それと知つたらば出ようもあるのだつた」

仏頂寺弥助が何か思い出して、しきりに残念がるのを、丸山勇仙が解げせない顔をして、

「覚えがあるのか」

「あるとも、あるとも……うわさ噂だけで大いに覚えがあるのだ、武

州沢井に机竜之助の道場があつて、一種不思議な剣術をつかい、人がそれを音無おとなしと名づけるという評判を聞いていたから、一度、その門を驚かしてみたいと思つていたのだ」

「武蔵の沢井とは、どちらの方面だ」

「多摩川の奥の高地で、江戸から甲州裏街道、つまり大菩薩越えをするその途中、御岳山の麓あたり。あの辺は、むかし関東の野を追われた平将門たいらのまさかどの一族と、甲州武田を落ちて土着した子孫が住んでいる。それで剣術は、甲源一刀流が流行はやっている。それだ、その男だ、あれは……」

と言つて、仏頂寺弥助が先達せんだつで、塩尻峠の不思議なる盲剣客のことを頻しきりに思い返し、

「それと知つたら、また出ようもあつたものを……」

と重ね重ね残念がる様子。

そこで、まだ吞込めないらしい丸山勇仙のために、仏頂寺弥助は、沢井道場、音無の剣術ぶりの物語をし、今その主人公は、行方不明になつて、その道のものの問題とされていることを話

して聞かせると、丸山勇仙が、

「ははあ、そういうわけで、そういう人物であつたのか……なるほど」

と幾度もうなずきましたが、つづいて、

「それで、机竜之助という男はいつたい、いい男なのか、わるい男なのか」

「何だ、それは——」

「つまり、机竜之助は美男子であつたか、それとも、醜男ぶおとこであつたか、それを聞いているのだ」

「妙なことを聞くじゃないか」

「そこが問題だ」

「誰がそんなことを問題にしている」

「いや、それが、なかなかの大問題になつたことがあるのだ」

「どうして、それをお前が……第一、机竜之助なるものの存在を、ただいま、拙者の口から初めて聞いたお前が、あの男の容貌の美醜を論ずることさえが奇妙なのに、それが問題になっていたというのはどこで……いつのことだ。してみればお前は、その以前から竜之助なるものを知っていたのか」

「知っていたのだ……知っていたのをお前からいわれて、今になつて気のついた一人だ」

「いつ、どこで」

「大和の国、十津川のあの騒ぎの時よ。実は拙者もあの時、あの乱軍の中へまぎれ込んでいたものだ……その節、たのまれて竜之助なるものの人相書を書いてやったことがある」

意外にも丸山勇仙が十津川話を持ち出して、その時、よそながら机竜之助にひつかかりのあつたようなことをいう。

仏頂寺弥助が、足を踏みとどめました。

丸山勇仙が語りつづけていうことには、

「十津川の乱が平い^{たいら}で後、藤堂方にたのまれて、拙者は医者
の役目をしたり、書記のような真似をしていたが、その時、たの
まれて人相書を幾枚も作った……そのなかに、ある少年が親と
か兄弟とかの敵だ^{かたき}といつて、人相書を注文して来たから、それ
を作つてやったのだが……その人の名が、たしか机竜之助、そ
れで甲源一刀流の遣い^{つか}手と覚えていた。実は、乱徒のめぼしい
ものの人相書を幾枚も作らせられた後だから、大抵は忘れてし
まつているはずだが、それだけを忘れないでいるのは、つまり、
その時に問題が起つたからだ——」

「その問題は？」

「その問題が、それ、机竜之助は美しい男か、醜^{わる}い男かという問

題なのよ」

「ばかばかしい問題じゃないか」

「ばかばかしくないのだ、解釈のしようが人によつて全然ちがうのだから……まず拙者がいわれるままに一枚をかいて見せると、それを見た一人が、机童之助を、こんな美男子にかいてはいけないというのだ。けれども、いわれた通りにかけばこうなる——と主張したところが、そんな美男子ではいけないとおそろしい権幕、拙者のかいた下書をいじくり散らして、勝手な訂正を試みたものだから、それによつて新たにかき直してみると、他の方面からまた苦情が出たのに、童之助は、こんな尖^{とんが}つた貧^{ひん}相^{そう}な男ではないと。こいつには拙者も弱つたのだ、現在その人を見ただけではないのだからな。人の言葉によつて、想像を助けられて描くのだから、どつちに附いていいかわからない。拙者が

わからないばかりでなく、その席でまた問題が持上つてしまつた。それでね、いつたい、美男子の標準というものは、どういうのだと根本問題にまで立入つて来たが、結局美醜は問題でないが、あの男が非常な魅力を持っていることは争われない、この絵にはその魅力が少しも現われていないということ、また新たに問題が湧き出した。それから拙者がいつてやつた、拙者は画家ではないから、その魅力なんというものは描き出せないから宜しくたのむといつてやつたら、問題はまあそれだけになつたが、不服は両方に残つてゐる。人情というものは妙なもののさ、竜之助非美男論者は、ほとんど絵に向つて嫉妬のような気分で、どうかしてその尖つた貧相なものにしてしまいたがる……一方はまた、美と不美とは論外に置くも、ともかくもあの特有の力は表現させてもらわなければならぬ、しかるにこの絵には少し

もそれが現われていない、しかしそれが無理な注文ならば、誰にも合点がてんされそうな、あたりまえの人相にかいた方が無事だろうと、こういうのだ」

「論より証拠じゃないか、お前は塩尻峠で何を見ていた」

「お前こそ何を見ていた」

その時、通りかかった濠端ほりばたで、人が集まって大騒ぎ。二人は話をやめて、

「何だ」

「ええ、狂犬やまいぬでございます」

「狂犬が、どうしたのだ」

「今、若いお侍が、狂犬を取って投げました、上の方へ遙かに飛んで、松の枝をかすめて、犬がお濠の真中へ落っこちたところであります」

「なあんだ」

何事かと思えば犬一匹のこと。仏頂寺弥助が冷笑して過ぎて行くところへ、いったん、沈んだ狂犬やまいぬが浮き上つて、岸の方へ泳いで来るから、

「それ、狂犬がまた出て来たぞ、浮み上つたぞ」

人だかりは八方へ散ると、血迷いきつた狂犬は、仏頂寺と丸山をめがけて飛びかかったのを、仏頂寺が、

「ええ、畜生」

一旦、蹴飛ばしておいて、次に踏み殺してしまいました。

二十

この二人が甲府の市中を進んで行くうちに、例のヘラヘラ役

者の、覆面辻斬の絵看板の辻々に掲げられたのを見ると、仏頂寺が、

「この奴等、いいかげんにしないと、目に物見せてくれるぞ」と、ちよつと凄^{すご}いことを言いました。目に物見せてくれるといったところで、何といつても仏頂寺ほどの者が、ヘラヘラ役者を相手に、本式の立廻りを見せようというわけでもあるまい。何かの機会を見て、懲^こらしめのために、かたわ者にしてやるくらいが落ちでしょう。

やがて、この二人が、柳町の佐野屋という宿へ着いたので、幸か不幸か、そこでバツタリと落合ったのが宇津木兵馬です。兵馬も、この宿に泊っていて、もう少し先に立帰ったところでありました。

勢い、バツタリと出^で会^あわな^いわけにはゆきません。出^で逢^あつて

見れば、一方、仏頂寺は、兵馬が修行時代に道場へ往来して、幾度も竹刀しなを合わせたことがあり、丸山勇仙は、十津川の時に藤堂勢に従つて、書記みたような役目をつとめ、兵馬のために人相書をかいてやったこともある見知合いのなかです。

「やあ、珍しい、宇津木兵馬君、君はここに泊つていたのか」
兵馬も、逢いたくもない相手だと思いましたが、のがれるわけにはゆきません。

「これは仏頂寺、丸山の両君」

「君の座敷はどこだ」

仏頂寺、丸山の両人は、ほどなく兵馬の座敷へ押しかけて来ました。

兵馬はお銀様を憚はばつて、次の座敷へうつしておいて、やむを得ず火鉢をすすめ、この二人に応対すると、

「宇津木君、拙者は机竜之助に出逢つたぞ、しかも最近に——」
「え」

その言葉は、両様の意味で兵馬を驚かせました。その一つは、多年の敵の^{かたき}消息。他の一つは、それを無遠慮に別室のお銀様に聞かせたくないとの心配。仏頂寺と丸山とは、そんなことに頓着なく、兵馬のために吉報をもたらしつつもりで得意になつて、
「ついこの間、計らずもあの男に信州の塩尻峠の上で会つたのだが、その時は、それと気づかず、たつた今、あれだなと思ひ出したようなわけだから、無論、おたがいに名乗りもせず、あの男の行先とても聞いてはおかなかつたのを残念に心得ている。ところ^{もつけ}がここで、君に出逢つたのが勿怪の幸いとなつた、われわれとても別段急ぐという旅ではないから、これから君と共に引返そう、引返してあの男のあとを慕つてみようではないか。君

にとつては不倶戴天ふぐたいてんの敵、われわれも、もう一応、会つておかなければならないのだ、共に願つたりかなつたりの好都合ではないか。かれはいま眼が見えぬ、眼は見えないが、その太刀先たちさきは少しも衰えない、次第によつては、われわれが君のため、後見の役目をつとめてもよろしい、ずいぶん、油断すべき相手ではない」

案の如く、お銀様に聞かせたくないことを、この男はズバリとしゃべつてしまったのみならず、ひとり呑込みで同行をとりきめ、まかりまちがえば、助太刀の役まで引受ける氣取りでいる。これは兵馬にとつて容易ならぬ有難迷惑だけれども、相手が相手、ことにこう乗り氣になつてゐる際には、いやといつても付いて来るに相違ない。そこでいやでもおうでも明日からは当分、この連中と道づれにならなければならぬ運命となる。

自分は、いいとしても、お銀様が、それは忌^{いや}がるにきまつて
いる。そこで兵馬は咄^{とつさ}嗟^{かん}の間にこう言いました。

「御両君の好意を有難く存じます、おかげで敵^{かたき}の手がかりがつ
いて、こんな喜ばしいことはござらぬ。ついては仰^{おほ}せの通り明
日早々、御両君の同行を願^{ねが}つてここを出立したのでござるが、
ちようど、自分はたのまれて、さるところまで人を送り届けね
ばならぬ責任があるゆえに、一日おくれて……」

途中しかるべきところで落合おうということを申し出しまし
た。

やがて二人が帰つてしまうと、静かにお銀様が次の座敷から
出て来て、

「宇津木さん、わたしの尋ねて行く人は、あなたの仇^{かたき}でしたね」
「そうです」

聞かれてしまつては仕方がない、兵馬は苦しげに白状しました。

「なんという因縁いんねんの戯れたわむでしょうね」

「そうですね、全くなんともいえない忌いやな因縁になりました」

「わたしは好きな人を探しに行く、あなたは、どうしても、その人を殺さなければならぬのですね」

「その通りです、彼を討たんがために、わたくしはこの年月を苦心致しました」

「けれども、わたしは、またあの人が必要ならば、生きていられないのですよ」

「私はまた、彼をそのまま置いては、男子の面目が立たぬのです」

「そうして、明日からの旅はどうなさるつもり？」

これは兵馬が、お銀様に先を越せんされました。

「お聞きの通りです、拙者は、あの人たちと行を共にしなければなりません、辞退しても聞く人たちでありませぬ。そこであなたの御迷惑を考えて、その御相談を致そうと思つていたところなのです」

「どうしても、わたしが邪魔になりましたようね」

「いいえ……私は、あなたのお心任せにするつもりでいます、場合によつては、あの者共の同行をもことわるつもりです」

「どちらにしても結果は同じことです、わたしはあの人を取りに行く、兵馬さんはあの人を殺しに行く……全く別な目的の二人が、今まで連れ合つて歩いていたので。つまり、あなたとわたくしとは、敵同士の間でありました」

「いや、拙者は、ほかの人を怨むうらむというべき理由を持ちませぬ……」

あの嫂あによめでさえも……」

と、兵馬はおとなしく言いました。

「それでも、わたしは、あの人を愛します、自然、あの人立場を危なくする者があれば、力を極めてそれを妨げるのが、わたしの仕事ではありませんか。どうしても、あなたとわたくしとは敵同士です。宇津木さん、あなたがわたくしを邪魔にしなければ、わたくしの方で、あなたを邪魔にしますよ」

「それは御随意に任せるよりほかはありません」

「わかりましたか。それでは、もうあなたとの一緒の旅は今日限り、わたくしの方からお断わりを致しましょう。そうして、これから後はおたがいに敵同士です」

「いいえ……敵かたきという言葉は、そう軽々しく用いるものではありませんまい」

「でも、わたくしは、生ぬるいことが嫌い、この世の人は敵でなければ味方、味方でない者はみんな敵です」

「ああ、あなたの考えは偏^{へん}し過ぎていて、片意地過ぎていますよ。拙者は机竜之助を敵^{てき}とはするが、あなたを敵とする気にはなれないのです」

「わたくしは、そうではありません、味方でないものはみんな敵です……兵馬さん、お前が机竜之助を討とうとすれば、わたしはあの人の味方ですから、あなたを殺してしまいます」

「よろしい、そのお覚悟なら、それでよろしいございます、拙者もこれから、あなたを敵^{かたき}の片われと見ましょう」

「それがよろしいございます。わたしはここで、人をよんで座敷を改めてもらいます、あなたにもお世話になりましたが、どうぞ、お大切^{だいじ}に……」

と言つて、お銀様は手を鳴らして女中を呼び、更に番頭を呼んでもらつて、自分だけ座敷を改めることをたのむと、さつさと、自分のものだけを運ばせて引移つてしまいました。

兵馬はお銀様の片意地に驚きました。けれどもお銀様を片意地の気質にさせた原因を知っているものですから、いい出した以上は、その意に任せるよりほかは仕方がないとあきらめました。

さて、こうなつてみると、有力な後援者を失つた自分は、また貧寒なる一人旅のさすらいだ。しかし、もう今度こそは、相手が塩尻峠を越したことを、歴然とつかんでいる。あの峠を越した以上は、その行先こそしかとわからないとはいいい条、袋の鼠のようなものである。今度こそ——という目あてがついたよなものですから、旅囊りよのうの欠乏も、さのみ気にはかかりません。

むしろ、ここでお銀様の方から去ってしまったことが、身軽でよいくらいのもんです。

そこで思い出して、預かっていた胴巻の金のすべてを取り出し、女中を呼んで、これをお銀様のもとへ届けさせますと、お銀様から突き戻して来て、

「そんなものは知らない」

と言ったとの返事。それではいけないと兵馬は自身携たずさえて行つて渡すと、お銀様は、

「そうですか、確かにお受取り致しました」

素直すなおにそれを受入れたから、兵馬はそのまま帰つて来ました。そのあとで、今度はお銀様が改めて女中を呼んで、こういうことをたのみました、

「あの、さいぜんお泊りになつた二人づれのお客様で、お一人

はたしか仏頂寺様、も一人のお方は丸山様とかおつしやいました、その方に、わたくしが内緒で、ちよつとお目にかかりたいのですが、伺つてよろしうござんすかどうか、お聞き申してみて下さい」

女中は、そのたのみを心得て立去ろうとするのを、お銀様がまた呼びとめて、

「それから、お伺いしてよろしければ、まことに失礼でございですが、怪我を致しておるものですから、これをかぶつたまま失礼を致したいが、このことをお聞き入れ下さるように申し上げておいて下さい」

と念を入れてたのみました。

仏頂寺と丸山は、見知らない婦人の人が面会をしたいとの申入れを聞いて、不思議に思いました。けれども、辞退するガウで

もないから、直ただちに承知の旨を答えると、そこへお銀様がやつて来て、

「御免下さいませ、さきほど、使を以てお願いに上らせましたのを、お聞届け下されて有難う存じます、その節、併せてお願いを致しました通り、少々怪我を致しておるものでございますゆえ、このままで失礼を、おゆるし下さいますように」

見れば品のよい令嬢姿の女が、顔にはお高祖頭巾こそずきんをかぶったままでの、しとやかな挨拶です。二人は一議にも及ばず、

「いかなる御用か存ぜねども、まずこれへお通り下さるよう」
火鉢の間を分けて、お銀様を招きました。そこでお銀様が二人に向つての頼みというのは、こうです。

自分は宇津木兵馬の連れの者であるが、兵馬は机竜之助かたきを敵と狙ねらっていること御存じの通り。自分としては、そのいずれを

も傷つけない心持であること。

ついては、あなた方のお計らいで、どうか二人を近づけないようにしていただきたい。自分としては、どちらが傷ついてもいやである。しかし、二人は近づかねばならぬ運命が迫っている。近づけばいずれかが傷つくか、両方が倒れる。それをさせないのは、一いつにあなた方の方寸である。どうか、あなた方の計らいで、宇津木兵馬を机竜之助のそばへ寄せないようにして下さるわけにはゆくまいか。結局これが私の願いでもあり、おたがいのためでもある……ということを、お銀様は言葉をつくして二人に説きました。

二人は、お銀様のハッキリした語調と、情理ある頼み方に感心しているところへ、お銀様はさいぜん兵馬から受取った路用の全部を、二人の前に提出して、

「これはあの宇津木のために、あなた方がお預かりの上、御自由に処分をなすって下さい」

仏頂寺と丸山は、眼を見合わせました。

二十一

あれから二十日あまりたって、田山白雲は洲崎すのきの駒井甚三郎を訪れました。

「どうです、よい収穫がありましたか」

駒井から問われて、

「ありました」

「それは結構です。まあ、こちらへ来て、ゆっくりと旅行談をお聞かせ下さい」

そうして、白雲は、駒井の応接室へ来て、卓^{たく}を隔てて椅子に身を載せて相對すると、そこへ金椎^{キンツイ}が紅茶と麦のお菓子を持つて来て、出て行つてしまいました。

「あなたと別れてから、保田^{ほた}へ参りましたな、岡本兵部というもの^{もの}の家へ、取敢えず草鞋^{わらじ}をぬぎましたが、そこでまず二つの収穫を得ました」

「そうでしたか、その二つの収穫とは何と何です」

「一つはあの家に秘藏^{きゆうじつしゆう}の仇十洲の回錦図巻と、もう一つはあの家の娘です」

「ははあ」

「仇十洲は御存じの通り、仇英^{きゆうえい}のことで、明代^{みんだい}四大家の一人です……」

田山白雲は行李^{こうり}を開いて、画帳一冊を駒井の前に置くと、駒

井はそれを開いて、まず眼に触れた開頭の文章を読んでみました。

「仇英、字ハ実父、十洲ト号ス、太倉ノ人、呉郡ニ移リ住ム、呉派ノ第一流トイハレシ周東村ニ学ビ、人物鳥獸、山水樓觀、旗輦車容ノ類、皆、秀雅鮮麗ト挙ゲラレ、世ニ趙伯駒ノ後身ナリト称セラル、特ニ流麗細巧ヲ極メシ歴史風俗画ニ於テハ艷逸比スベキモノナク、明代工筆ノ第一人者トイフベシ。伝フル所、士女雅宴、樓閣清集等ヲ画ケルモノ多シ……」

駒井がそれを読んでいると、白雲は改めていうよう、
「それと、もう一つは岡本兵部の娘です、あれが、なかなかの傑作でした」

「それは、どういう意味です」

駒井は画帳を見ながら、岡本兵部の娘の、傑作という文句の

意味を問い返すところへ、

「風呂がわきました」

扉を押して金椎が顔を見せたものですから、駒井は、その方へ向いてうなずいて見せ、次に白雲の方に向き直り、

「風呂がわいたそうですが、おはいりなさつてはどうです」

「イヤ、それは有難い、なにぶんこの通りですから……」

白雲は喜んで立ち上りました。久しく湯の中をくぐらなかつたので、身体がウザついで来た見え、お辞儀を忘れて立ち上り、

「遠慮なしに頂戴致しましょう」

「風呂場はあちらです……それから今のあの少年が世話をしてくれますが、あれは耳が聞えない聾つんぼですから、用事があつたらば、手まねで差図をして下さい」

「承知致しました、それではお先に御免をこうむります」

白雲が風呂場へ立つてしまつたあとで、駒井は田山白雲の画帳を、物珍しくいちいち見て行きました。

「これは見たような女だ」

駒井が、じつと見入つたのも道理、そのうちに一枚の美人の首だけがありました。

これは模写でもなければ、想像でもありません。まさしく、モデルがあつて描いておいたスケッチの類である。しかもその美人の面影に、おもかげどうも見覚えがある——と思つたが、駒井は、とっさ咄嗟には思い出せませんでした。しかし、それも、もう一枚めくつて見れば、難なく解決されたことで、そこには前に首だけ写生しておいた美人の全身が、妙な旋律を起しながら、胸に物を抱いて、舞を舞うているところが描かれてありました。

暗澹^{あんたん}たる燈火の下で、栄^{えい}之の絵にあるような、淋しい氣品のある美人が踊っている。その両袖にしかと抱いているのは人形の首——ではない、乾坤^{けんこん}山日本寺の羅漢様の首。ははあ、白雲はあの狂女をつかまえたのだなと駒井が合点^{がてん}しました。

風呂から上つて、駒井甚三郎の衣裳を着せられた田山白雲の形は、珍妙なものとなりました。それは白雲が大兵^{だいひょう}の男であるのに、駒井の普通の文^{たけ}は合わず、ことに着慣れない筒袖が、見た眼よりも着た当人を勝手の悪いものにして、ちよいちよい肩をすばめてみる形が駒井を笑わせる。

「あれから小湊^{こみなと}へ参りました」

白雲は、風呂へ入る以前の岡本兵部の娘の解釈はもう忘れてしまつて、早くも話が小湊の浜まで飛んで行きました。

「小湊は、どうでした」

「あそこには長くおりましたよ、十日も逗留^{とうりゆう}して、毎日、波ばかり描いていました。これがその波です」

といって白雲は行李^{こうり}の中から、また別の画帳一冊を取って、駒井の前に置くと、

「なるほど」

駒井はそれを受取ってひもといて見ると、一枚一枚にみな海の波です。

「小湊の浜辺は不思議なところで、あそこへ立つてながめていると、あらゆる水の変化を見ることが出来ますな。水が生きている、ということを実に見て取ることが出来ます。水が生きている、という言葉は面白い言葉です、私が発明したではありません、ある片田舎^{かたいなか}の子供が発明したのです。沼と、池と、水たまりのほかに知らなかった子供が一朝、海のそばへ連れて来

られて、最初に絶叫したのがこれです、ああ水が生きてる！ この破天荒はてんこうの驚異、生きてると言う一語は、われわれには容易に吐くことができません。しかし、小湊こみなとの浜へ立つて見ると、はじめ水が生きている、生きて七情をほしのままに動かしているというのを、確実に感受せずにはおられません。まず脈々として遠く寄せて来る大洋の波ですな、あれが生けるものの本体で、突出する岬と、乱立する岩に当って波がくだけると怒ります……波濤はとうの怒りは、この世に見る最も壯観なるものの一つですね。堂々として、前路における何物をも眼中に置かずに押しかけて来るところが壯観です。来って物に当たると怒って吼えほます、そうして、たとい乱離骨灰に崩れても、崩れるその事が壯観たることを失いませぬ。忿怒ふんどじ上部しょうぶの諸天は、怒りのうちに威相と慈愛とを失わないものですが、波濤の怒りはそれに似て

いますな、われわれに壯觀を与えて威嚇いかくを弄ろうさない、戦鬪を教
えても執念を残さない。巨人の心胸は、さながら怒濤そのもの
のようです」

田山白雲はこういつて、幾枚も幾枚ものうち、波の怒れる部
分だけを取つて、駒井の前に積みました。とても筆では間に合
わない……といった心持に迫られながら……

駒井は与えられた絵をいちいち取つて、仔細にながめている
と、白雲は言葉をついで、

「しかし、海を怒るものとばかり思つてはいけません、歌うもの
です、泣くものです、笑うものです、また戯たわむるものですよ……
これを御覧下さい」

と言つて白雲は、別に一枚を取つて駒井の前にのべながら、
「そうです、海は戯るるものです。戯るるものということを、私

は小湊の浜辺でほどよく見たことはありません。御覧下さい、これがその心持をうつしたつもりなのですが、どうして拙者共の筆では……海の怒りはともかくその髻ほうふつをうつすことができても、その戯ればかりは、とても、とても……」

白雲は一枚一枚と、いわゆる海の戯れを駒井の眼前に並べました。

それは今までと違って、奇岩怪礁に当って水の怒るところとは打って変り、岸辺の砂浜に似たところや、板のような岩の上や、岩と岩との狭間はざまに打ち寄する波のあまりが、追いつ追われつしているところを描いたものです。

「ここには海の低徊ていかいがあります、ここには海の静養があります、ここには海の逃避……」

田山白雲は、着物のゆきたけの合わないこともすっかり忘れ

てしまいました。

「そういうふうには、小湊の海の浜辺に立つと、あらゆる水の躍動が見られるものですから、つい十日あまりを水の写生で暮らしてしまいました」

駒井甚三郎は始終受身で、白雲の語るだけのことを語りつくすまで聞いてしまおうとの態度です。客を好まない人も、客の性質によつては、その貴重な研究の時間をいつまでも、それがためになげうつて悔いしないだけの余裕はあるようです。

白雲は興に乗じて語りつづけました。

「われわれの写すところは、形と色とだけの世界ですが……そこで小湊の浜辺には、あらゆる波の形が存在しているとすれば、おのずから、あらゆる波の色も存在している道理でしょう。西洋の画家は色を研究します、東洋とて色を蔑ろにはしませんないがし

が、形を写せば、色はおのずから出て来る道理です」

「そうはゆきますまい」

駒井はこの時、軽い抗議を挟みました。

「どうしてです」

白雲は熱心な眼をかがやかせて、駒井の抗議を食いとめながら、

「どうして形を写して、色が現わせないのですか」

改めて見直すまでもなく、白雲の描いた海は、一枚として着色のものはありません、みんな墨で描いたものばかりです。その点を駒井はいいました、

「桜の花だけを描いて、たんこう淡紅の色が出ますか、海の動きだけを

写して、青く見えますか」

「そこです——」

白雲は膝を進ませて、

「そこです、私の描いたものにそれが現われなければ、私の恥辱です。森羅万象をいちいちそれに類似した色で現わさねばならぬという仕事は、私にいわせると細工師さいくしの仕事で、美術の範圍ではありません。私は墨で描いたこの海の波に、いちいちの色の変化を現わしたつもり——でなければ現わすつもりでかきました、色ばかりではない、音までも……」

「音までも……といたいたいのですが、不幸にして、私には辛みうじなじぎと

いって白雲は、何か急に悲しい色をその熱した満面に漲らせ、

「音までも……といたいたいのですが、不幸にして、私には辛みうじなじぎと

て高低の音階の程度だけしか出すことはできません。音律はあ

る程度まで現わし得るかも知れませんが、音相に至つては、今

のところ呆然自失するばかりです。悲しいことです。この悲し

さを今回の旅が、つくづくと私に教えてくれました」

こういった時の白雲の面は、言おうようなき悲壯なものにうつりましたから、その論旨はわからないながら、その悲壯な色に駒井が動かされました。

田山白雲は眼の中に涙をさえたたえて、言葉をつづけ、
「私が、浜辺に立つて熱心に写生を試みていますと、一人の居士が来ていいますことには、田山さん、あなたこの波の音を聞いてどう思いますか……と、こう問われたのです。そこで、ちよつと挨拶に困つていますと、この小湊の浜の波の音は、ところによつて違います、あちらの沖で打つ波は、諸法実相と響きます、ここで聞いていると、他生流転の響きに変わりますね、汐入の浜では、歴劫不思議が聞え、妙の浦では南無妙法蓮華經が響きます、そのつもりで波の音を聞きわけてごらんさい……こういうわれましたから、私はナー二とその時は思いましたね、波の音

にまで、そんな線香くさい響きがするものかと、その時は頭からばかにしてかかると、その居士こじがいいましたよ、田山さん、あなたは水が生きている、波が七情をほしいままにしているといったではありませんか、生きているものの音おんに七情の現われはありませんか？……と、こういわれて私はハッと気がつきました。それお聞きなさい、大海の波の音が、今、諸法実相を教えていますといわれたとき、ゾツとしたのです」

田山白雲は、大だいの身体からだをゆすぶって、その目から涙をこぼして、拳をわななかせました。

田山白雲は暫くして、昂奮から醒さめたように冷静になって、「日蓮の遺文集を読み出したのは、小湊滞在中の記念です。私

はその十日の間に、日蓮の遺文全部を読みました。片田舎の子供が初めて海を見て、水が生きてる！ といったように、人間が生きている！ と腹のドン底から動かされたのは、その時です」

と言つて白雲は、また行李の中をさぐつて、別に一小冊子を取りだしつつ、

「駒井さん、あなたは日蓮をお読みになりましたか。日蓮をお読みになるならば、直接にその遺文集を読まなければなりません、後人の書いた伝記、注釈、すべて無用です。また騒々しいお会式えしきの太鼓の雑音の中で、凡僧の説教や、演劇の舞台や、土佐まがいのまずい絵巻物の中から、日蓮上人を見てはいけません。私が泊っていたところの居士が、私に日蓮上人の遺文集全部を貸してくれたものですから、幸いにそこで私は、生ける日

蓮にお目にかかるの機縁を得たことを、感謝せずにはおられません」

「それは非常によいことです」

駒井がそこへ言葉を挟んでいうことには、

「おそらく、あなたの今度の収穫中、それが第一のものでしょう。私もまだ日蓮の概念を知って、内容を知らないものです、あなたの日蓮観をお聞かせ下さい」

「よろしうございます。私は、ほとんど幾晩も徹夜して、この通り、遺文集全部の中から、書き抜いて持つております、日蓮を説明するには、やはり日蓮自身をして説明せしむるより、よきはなからうと思います」

白雲の取り出した小さな本は、今度のは絵ではありません。よき根気を以て書いた細字の、数百枚をとじた小本でありまし

た。

「幸いに、拙者を泊めてくれた居士は、まだ世間に流布るぶされていない秘本をずいぶん持つていましたからね……『日蓮ハ日本国東夷東条安房ノ国海辺ノ旃陀羅せんだらガ子ナリ!』これは佐渡御勘気鈔さどごかんきしょうという本のうちにあるのです。『イカニ況いはんや、日蓮こんじやう今生ニハ貧窮ひんぐう下賤げせんノ者ト生レ旃陀羅ガ家ヨリ出タリ。心コソ少シ法華経ヲ信ジタル様ナレドモ、身ハ人身ニ似テ畜身ナリ……』と、これが日蓮自身の名乗りなのです。この名乗りを真向まっこうにかざして、一世を敵にして戦いをいどみました。日本という国は、幸か不幸か系図を貴ぶ国柄で、たとえば征夷大將軍になるには、どうしても源氏の系統をこしらえなければならず、たまたま土民の中、乞丐きつがいの間から木下藤吉郎のような大物が生れ出でても、その系図の粉飾には苦心慘憺したものです。人間をかざるものが主となつて、

人間そのものが従になるのです。ですから後光と肩書ごしょうがあつて初めて人間が光るので、人間そのものの本質を、泥土の中から光らせるといふ本当の人間がありません……そこへ行くと日蓮は巨人です、日蓮にもつ、たいらしい系図書をくつつけたのは、みな後人の仕事で、日蓮自身の遺文のどこを読んでみても、おれの先祖は誰々だと誇張したところは一カ所もないのです。私は、小湊こみなと、荒海あらみ、天津あまつ、妙たえの浦うらあたりの浜辺に遊んでいる真黒なはなたらしの漁師の子供を見るたびに、聖日蓮ここにありと、いくたび感激の涙をこぼしたか知れません。万代不朽の精神界の仕事をする人にとっては、徹底的の卑賤の出身が、どのくらい幸福であるか知れないということ、特に日蓮において、私は衷心ちゅうしんにきざまれました……徹底的のところには、すべての人間相が、少しも姿を隠さずに、眼前に現われて来ます、誰も荒

海の漁師の子に、阿媚あびと諂佞てんねいを捧げるものはありません、真実は真実として、虚偽は虚偽として、人間相そのままが、人間を教育してくれるのです」

そこへ金椎キンツイが日本のお茶を持って来ました。

お茶を置いて金椎が、丁寧なお辞儀をして出て行ってしまうと、駒井甚三郎は、そのお茶を白雲きりしたんにすすめ、自分もすすつて、「今の少年が、あれで熱心な切支丹きりしたんの信者なのです、イエス・キリストの……」

と言いますと、

「ははあ」

熱している面かおをさましながら白雲は、気のあるような、ないような返事。

「あれの語るところによると、イエス・キリストも、また、微

賤なる大工の子の出身だといっています、そうしてキリストが、世界の歴史を両分し、人間の心を支配しているのだというようなことをいっています」

「ははあ」

白雲は再び、氣のあるような、ないような返事でしたが、急に思い立ったように、

「そうです、そうです。私はキリストのことをよく知りませんが、けれど、なんにしても西洋の数千年来の文明を指導して来たのですから、そのくらいの抱負はありましょう。日蓮も言っています、『我レ日本ノ柱トナラム。我レ日本ノ眼目トナラム。我レ日本ノ大船トナラム——』これは開目鈔かいもくしょうのうちにあります。

『日蓮ハ日本国ノ棟梁ナリ、予われヲ失フハ日本国ノ柱幢はしらヲ倒スナリ

——』これは撰時鈔せんじしょう——」

白雲は再び小冊子をくりひろげて、いちいち書抜きを指点しながら、

「ともかく、こういう真実性を持った巨人が現われて来ますと、凡俗は驚きますよ。人間が生きている！　というわれわれの無邪気なる驚異で済まされないのは、その立場をおびやかされやしないかという小人ばらの恐怖です。多年、糊で固めておいた自分たちの立場が、この巨人のために一息で吹き飛ばされては大変だ。そこで狼狽ろうばいがはじまります、そこで小人が巨人を殺しにかかります」

「どうも困りものですね、巨人も小人も、共に生きてゆくわけにはゆきませんか」

駒井が浩嘆こうたんすると白雲が、

「それをするには巨人が韜晦とうかいして隠れるよりほかはありません

ん……ところが日蓮においては、それが反対で、巨人自身があくまで戦闘的に出でたのですからね、たまりません……しかし、この巨人は、秀吉のように、家康のように、武力を持っているわけでもなんでもなく、前に申す通り旃陀羅せんだらの子ですからな、ほんとうに素裸すっぱだかです。しかるに敵はあらゆる武器を利用することができません」

といって白雲はお茶を飲みました。そうして嘔うそぎくように気を吐いて、外をながめると、ちょうど窓の開いてあつたところから、かぎりもない外洋の一部が眼に入つて、そこから心地よい海の風の吹いて来るのを感じました。

「これは日蓮自身もいつています——世には王に悪にくまれるれば民に悪にくまれない、僧に悪にくまれる時は俗に味方がある、男に悪にくまれても女には好まれ、愚痴の人が悪にくめば智人が愛するといったふ

うに、どちらかに味方があるものだが、日蓮のように、すべて悪にくまれる者は、前代未聞にして後代にあるべしともおぼえず……生年三十二より今年五十四に至るまで、二十余年の間、或いは寺を追ひ出され、或いは所を追われ、或いは親類わづらを煩わづらわされ、或いは夜打ちにあい、或いは合戦にあい、或いは悪口あっこうかずを知らず、或いは打たれ、或いは手を負う、或いは弟子を殺され、或いは首を切られんとし、或いは流罪るざい両度に及べり、二十余年が間、一時片時も心安き事なし——『日本国ハ皆日蓮ガ敵トナルベシ——恐レテ是ヲ云ハズンバ、地獄ニ落チテ閻魔えんまノ責いかんヲバ如何セシ——』これですから堪りません、悪にくまれます——しかし、駒井さん、薄っぺらの、雷同の、人気取りの、おたいこ持ちの、日ひ和より見みの、風吹き次第の、小股すくい、あやつりの、小人雑輩ふんぶんじようじようの、紛々擾々たる中へ、これだけの悪まれ者を産み出した安

房の国の海は光榮です。今でも小湊の浜辺に立つてごらん下さい、われは日本の柱なりという声を聞かすにおられませんよ」

二十二

田山白雲は、ここに当分足をとどめることになって、駒井の造船所を見たり、附近の名所をさぐったり、或いは一室にこもつて、駒井のために何か一筆をかき残して置くといっていました。白雲の給仕役は例の金椎キンツイです。まもなく白雲と金椎とは心安くなりました。

今日は白雲が一室にこもつて、長い筆をふるいながら絵をかいている。絵をかきながら鼻唄をうたっている。

ねんねんねんねん

ねんねんよ

ねんねのお守は

どこへいた

南条長田^{おさだ}へ魚買^{とと}いに……

そこへ不意に駒井甚三郎が入って来て、

「田山氏、鉄砲の試験をするから、見に行かないか」

駒井はこの頃、小銃の製造に苦心していたが、それが出来上つたと見えて、白雲に同行をうながすと、

「お伴^{とも}しましょう」

白雲は直ちに絵筆をなげうちました。

駒井は軽装かいがいしく、一挺の鉄砲と弾薬を用意して出かけると、白雲は例の駒井から借着の筒袖のつんつるで、そのあとについて行きます。

「駒井さん、僕はこういう岩畳な身体をして美人を描いているのに、あんたは虫も殺さないような顔をしていながら、殺生な武器を作るのですね」

と白雲が言いますと、駒井が、

「なるほど、そういわれればそうですね」

ほどなく馬場のようなところへ来て見ると、射撃の練習は今にはじまったことではないと見えて、場の一方に的まとが幾つもかけてありました。

ここで駒井が三十間、五十間、百間と位置をかえて鉄砲を打つのを、田山白雲が見て感心しました。

「なるほど、商売商売だ」

小さな厚紙の的をかけて置いては、それを、パチリパチリとうちおとしてゆく駒井の手腕は鮮かなもので、全く風采ふうさいに似合

わないはなれ業であると感じしないわけにゆきません。ことにこの鉄砲そのものが自分の手で作られ、英国製のスナイドルというのを分解して、それに自分の意匠を加えたものだと言いは、舌をまかすにはいられません。

すべて人は、自分の持つていない知識経験には、ことに驚嘆し易いもので、その驚嘆から、嫉妬も起れば、尊敬も湧くものであります。田山白雲が、駒井甚三郎に大なる敬意を持ったのは、この鉄砲の手腕から起りました。

「着弾距離はどのくらいですか」

「左様、これは六百間までは有効のつもりですが……」

「従来のものとの比較はどうですか」

「それは着弾距離において、三分の一以上はすぐれているでしょう、しかし、特長はこの元込めにあるのです、これがもう少し

思うようになる、日本の戦争が一変します」

「なるほど」

白雲は銃を駒井の手から借受けて、つくづくとながめて感心をつづけていると、駒井は、ただいま船に据え^すつける大砲を工夫中であるから、出来上ったら海上へ向けて試射をするから、見て下さいといいました。うちみたところ、瀟洒^{しょうしや}たる貴公子であるこの人が、なかなか恐ろしい武器の製造者であることを、白雲はいよいよ驚いていると、

「短銃を一つ試験してみましようか。西洋のピストルです、日本^{ふところ}の懷鉄砲^{でつぽう}というやつですね」

といって駒井は懷中へ手を入れて、革袋の中から取り出したのが、コルト式の五連発であります。この人は常にこれを懷中にたくわえているらしい。そうしてズンズン^{まとば}的場の板のところへ

進んで行つて、白墨で粗末な人形を一つかいて置いて、十歩の距離に立戻り、

「あの眼をうつてみましょうか」

無雑作むぞうさに切つて放つた一発が、まさに人形の眼に当りました。

駒井甚三郎は五連発のピストルを三発打つて、あとの二発を白雲に打たせました。そうしていうことには、

「これは今、日本へ渡っている短銃のうちでは最新式のもですが、西洋ではその後、どんな進歩したものが発明されているかわかりません。私の考えでも、いちいちこうして使用したあとで、ケースを抜き取つて弾薬を詰めかえる手数が、もう少しなんとかならないかと思っています。それと、もう少し形を小さくし、量を軽くしたいものだと思います。その方針で研究していきますから、そのうち相当の改良を加えてみるつもりです。今の

ところは、この小銃と大砲の方へ力を注いでいるものですから、これで満足しているほかはありませんが、これはゆくゆく、てのひらの中へ握り切れるほどの小さなものにして、そうして、威力が減じない程度に改良され得るだろうと思っています。ですからピストル——日本ではそういつていますが、やはりピストルですね、もとはイタリーの地名から出たので、短銃という意味はないのですが、将来はむしろ拳銃とでもいった方が適切になるでしょう——要するにピストルは、進歩するほど小さくなるのが原則であり、大砲は、いよいよ大きくなるのが進歩であります……大砲の工場をひとつ見て下さい」

駒井はまといた的板の下に立てかけた小銃を取って先に立つと、白雲はピストルを持ちながら、的板の弾痕を調べて見ると、いずれも一寸の厚みある板を、無雑作にうちぬいていました。

こうして二人はブラブラと小さい丘を上り、海岸の造船所に近いところに設けてある駒井甚三郎の鉄砲工場の方へ歩いて行きます。

駒井甚三郎は、江川、高島の諸流を究め^{きわ}、更に西洋の最新の知識を加えて、その道では権威者の随一でしたが、以前は幕府というものが後ろにあつて、研究にも、実際にも、非常に便宜を与えられていましたが、今はそうはゆきません。

工場といつても、ささやかなものではありませんが、その道の鍛冶をつれて来たり、自身が素人^{しろうと}を教育したりして、ともかく、十七間の船に備えるほどの大砲を修理する設備が整っているのであります。

「これはカノーネルの一種で、関口の大砲製造所で作らせたいちの一つを持って来て、修理を加えているのですが、海軍砲と

しては最小のもので、万一の際、これが一つ有ったからとて、大した力にはなるまいが、それでもないにはまさると思つて工夫を加えています。近々出来上り次第、試射をやつてみるつもりですから、田山さん、あなたもぜひ、それまで逗留とまりゆうして見て行つて下さい……それから、あの船を動かす機関ですが、これは、やっぱり石川島造船所へ伝手つてがあつて払下げてもらつた品に、自分相当の工夫を加えているのです。そうですね、大砲の方は近々……船の一切が整うは多分来年の四月頃になりました。う。その時はひとつ進水式をやりますから、また見に来て下さい」

「承知致しました、ぜひそれは見せていただきます。ただ見せていただくだけでは気が済みません……私も、その船の乗組の一人に加えていただけれますまいか、どこへでもお伴ともを致します

よ」

「そうですか、あなたのような乗組員を得ることは、船のため仕合せですから、私の方から希望を致したいのですが、いかがです、あなたはよくても家族の方が……」

「左様……」

そこで白雲が、家族のことを考えさせられました。この男とでも、大空にただよう白雲の如く、行くも、とどまるも、自由には似ているが、自由ではないのが人間の原則です。

浅草の露店の時に伴うていた妻子ある以上は、この人の帰りを待っているに相違ない。この人を柱とも杖ともたよっているに相違ない。

「それはなんとか始末をしておきますよ」

こういう話をしながら、二人は海岸へ出ました。

二十三

武州大宮へ参拝した道庵先生は、それを初縁として、今後沿道の神社という神社には、少々は廻り道をして参拝して行くとの案を立てて、有^う無^むをいわず、米友にも同意をさせました。

道庵が、こういう敬神思想を発揮するようになったのは、いつもの茶気とばかり見るわけにはゆかない。道庵も実はこのごろ、つくづくと考えさせられているのです。

考えた結果は、どうしても日本国には、敬神思想を普及せしめなければならぬとの確信を得たものらしい。

というのは、道庵も十八文で売り出したり、貧窮組のリーダー

気取りになつてみたり、またデモ倉や、プロ亀あたりとも交際をして見たが、どうもあんまりたのもしない気がしない。

デモ倉や、プロ亀ときては、新しい方へ頭をつつこんで、かなり鼻つぱしが強いかと思うと、風向き次第で、からつきし腰が据つていない。そのくせに人をおだてたり、あやつつてみようとするケチな了簡がある。そこで道庵が気がつきました。

あいつらは平民の味方でも何でもないのだ。飯の種に新しいことを饒舌^{しゃべ}り廻るだけで、たとえば大塩平八郎みたように、イザといえ、身を投げ出してかかる代物^{しろもの}ではなく、佐藤信淵^{しんえん}のように、経済論から割り出そうという代物でもない。デモの調子のいい時はデモ、プロの風向きのよかりそうな時はプロ、つまり時の運氣につれて飛び廻る蠅だ。あんな奴等の存在することは、本当の平民社会の信用を害し、その實際精神をさまたげ、

かえつて、人間に貴重な忍耐とか、奉公心とかいう方面の徳を
すり減らすだけが能だ。

本来、人間というものは、まだそう完全には出来ていないの
だから、畏れるところを、知ったり、知らしめたりして、つつ
ましかかな徳を、持たせたり、持ったりしなければ、この社会
が成り立つものでないということを、道庵先生がこのごろ思い
つきました。

といって、畏れというのは、サーベルや、鉄砲で脅すこと
ではない。権柄けんぺいづくで人民を圧制することでもない。神ほとけを
信仰して、畏れる心がほんとうに起らなければならぬという
ことに、道庵先生が気がつきました。

「べらぼう様、神様ほとけ様が無えなんというやつがあるもの
か、お天道様や水は誰がめぐんでくれたんだ、人間が神様をま

つるのは、勿体ねえもつてえという心の現われなんだ、勿体ねえという心を持たねえ奴は物を粗末にする、物を粗末にする奴は人間を粗末にする、人間を粗末にする奴は国を粗末にする、国を粗末にする奴が、神様を粗末にするんだ」

道庵一流の論法でおしきつたはいいが、この案が通過すると共に、路傍の稲荷いなりや荒神様こうじんさまにまで、いちいち幣帛へいはくを奉つて行くから、その手数料のかかること。気の短い同行の米友がかなりの迷惑です。それでもいちいち道庵並みに、神という神にはみな拝礼を遂げて、武州熊谷くまがやの宿へ入りました。

ここでは規定の神社参拝のほかに、熊谷蓮生坊ゆうこくじの菩提寺ぼだいじなる熊谷寺ゆうこくじに参詣をしようと、二人が町並を歩いて行くと、一つの芝居小屋がありました。

おびただしく市川某なにがしのぼりの幟を立てた芝居小屋の前を通ると、小

屋の窓から首を出していた一人の氣障きざな男を道庵先生が見て、

「あれ……あれは水垂みずたりのげん公様じゃねえか」

といつて、ちよつと足を停めました。

水垂のげん公というのは、江戸ッ兒氣取りで、人を見ると二言目には百姓といいたがる氣障な奴で、そうかといつて、当人は芝居の台本を作るだけの頭はなく、劇評をするだけの腕もなく、演芸の風聞を聞きかじつては、与太を飛ばしたり、捏造ねつぞうをしたりして得意がつているが、それも旧式の下品な半疊で、とても今時の表へ出せる代物しろものではないが、ある大劇場に長くいた年功で、鼻ッぱしが強く、江戸ッ兒をその鼻の先にかけているのですが、もし、勝海舟や栗本鋤雲くりもとじようんあたりを江戸ッ兒の粹すいなるものとすれば、この水垂みずたりのげん公の如きは、下等な江戸ッ兒の見本でしょう。その意味で道庵先生が知っているのです。

大宮から上尾^{あげお}へ二里——上尾から桶川^{おけがわ}へ三十町——桶川から鴻^{こう}の巣^すへ一里三十町——鴻の巣から熊谷^{くまがや}へ四里六町四十間。

熊谷の宿^{しゆく}を通りかかつて、芝居小屋の前で、氣障^{きざ}な男の水垂のげん、公を見た道庵先生が、

「どうもいけねえ、昔はそれ、芝居に、なかなか見巧^{みじうしや}者というやつがいて、役者がドジをやると半畳をうちこんだものだが……そいつが隙^{すき}がなかったね、聞いていて胸の透くようなやつがあつたくらいだから、役者にもピンと来て、悪くいわれてもはげみにならあな、舞台に活氣も出て来れば、お客も喜ばあな、うちこむ当人も無論いい心持で、それを見得^{みえ}にやつて来るところが可愛^{あい}いものさ。ところが今時の半畳屋と来た日にや、下等でお話にならねえ、時代が變つているのに頭がなくて、鼻っぽしだけがイヤに強く、人のイヤがるようなことをいえば、それで抉^{えぐ}つ

たつもりでいる。あのげん公様などがいいお手本さ、あの男の口癖が、二言目には百姓呼ばわりで、あれで江戸ッ児専売のつもりなんだから恐れ入る。なにもげん公に恩も怨みもあるわけじゃねえが、あんな下等なのがおおどころにブラ下つていると、芝居道の進歩の邪魔になる、芝居の方も、もう少し向上させなくっちゃいけねえね」

といいました。つまり先生の心持では、あらゆる方面に気を配つて、それに親切を尽してやりたいところから、こういう半畳屋を憎む心になつたのでしょう。悪く取つてはいけません。

「しかし、そういう下等な奴は下等な奴として、本当の江戸ッ児にはいいところがあるよ、本当の江戸ッ児にはどうして……」
といつてゐるうちに、道庵先生が急に頤おとがいを解いて、米友を吃驚びっくりさせるほどの声で笑い出しました、

「アハハハハハハ」

「何だ、先生、何がおかしいんだい」

「米友様、あれ見ねえ、あの幟のぼりをよく見ねえな」

といって道庵先生が、芝居小屋の前に林立された役者の旗幟を指さしましたが、それをながめた米友には、別になんらの異状が認められません。どこの芝居小屋にもあるように、景気の良い色々の幟が、役者の名を大きく染め出して林立しているばかりです。

「う——ん」

といって、先生がおかしがるほどの理由を、その幟の中から見つけ出すことに、米友が苦しんでいると、

「アハハハハハハ」

と道庵がわざとらしく、また大声で笑い、

「米友様、よくあの幟のぼりの文字をごらん、市川海老蔵えびぞう——と誰が眼にも、ちよつとはそう読めるだろう。ちよつと見れば市川海老蔵だが、よくよく見ると、海老の老びという字が土どになつていらあ。だから改めて読み直すと市川海土蔵えどぞうだ、海土えどの土の字の下へ点を打つたりなんかしてごまかしていやがら。変だと思つたよ」

「そうかなあ」

道庵にいわれて米友が、改めてその文字を読み直してみると、なるほど、海土蔵と書いて、海老蔵と読ませるようにごまかしてある。しかし、米友はごまかしてあつたところで、ごまかしてなかつたところで、道庵先生ほどにそれをおかしいとも悲しいとも思いません。

というのはこの男は、まだ生れてから芝居というものを見た

ことのない男ですから、海老蔵が海土蔵であろうと、海土蔵が江戸ッ児であろうとも、大阪生れであろうとも、いっこう自分の頭には当り障りのないことですから、「そうかなあ」で済ましてしまいました。

これには道庵も張合いがなく、さっさと歩き出して、テレ隠しに、一谷嫩軍記の浄瑠璃を唸り出しました、
いちのたにふたばぐんき じようるり うな

「夫の帰りの遅さよと、待つ間ほどなく熊谷の次郎直実……」
くまがい なおざね
変な身ぶりまでして歩くほどに、やがて蓮生山熊谷寺の門前に着きました。
れんしょうざんゆうこうじ

道庵と米友は蓮生山熊谷寺に参詣して、熊谷次郎直実の木像だの、寺の宝物だのを見せてもらい、門前の茶店へ休んで、名物の熊谷団子を食べておりますと、そこへ若いのが四五人入り込んで来て、同じように熊谷団子を食べながら、威勢のいい話

を始めました。

それを道庵先生が聞くとともになしに聞いていると、いずれも熊谷次郎に関する話で、なんでもこの若い人たちは演劇の作者連で、旧来の一谷嫩軍記いちのたにふたばぐんぎでは満足ができないから、直実に新解釈を下したものを書こうとして、わざわざここまで調べに来たものらしいのです。そこで道庵先生もその心がけに感心し、なお頻りに団子を食べながら若いものの話を聞いているうち、先生が早くも釣り込まれてしまいました。

「時に、皆様や」

たまり兼ねた先生が、若いのへ口を出しかけると、先方で、
「何ですか」

「承れば、あなた方は熊谷次郎直実公の事蹟を調べ、演劇にお作りなさるそうですね」

「左様……少しばかり書いてみたいと思つて、遊びに来ました」
「それは結構なお心がけで……拙者も、こう見えても芝居の方が大好きでございましてね、ことに熊谷とくると夢中でございます」

「そうですか」

「しかし、あなた方のような血のめぐりのいいお若い方とちがつて、この通りの頭でございますから……」

道庵先生は、ちよつと自分の頭の上へ手をやつて、くわい、頭を摘つまんで見せました。

「どう致しまして」

若い劇作家連も、道庵の髪の毛をつまんだ手つきを見て、仕方なしに苦笑いを致しました。

「この通りの頭でございますから、新しいことはあんまり存じ

ませんが、一の谷の芝居はいろいろのを見ましたよ、おめえ方は知りなさるめえ、大柏薙だいはいくえんを見なすったか」

「いいえ」

「今時は、熊谷といえは、陣屋に限ったようなものだが、組討ちから引込みがいいものさ。わしや、洩団しふだんのやるのを見ましたがね、こう敦盛あつもりの首を左の脇にかいこんで、右の手で権太栗毛ごんだくりげの手綱たづなを引張ってからに、泣落し六法というやつで、泣いては勇み、勇んでは泣きながら、花道を引込むところが得もいわれなかつたものさ。今時、ああいうのを見たいたつて見られないねえ」

「洩団は好かつたそうですね」

「好かつたにもなんにも。総じて今の役者は熊谷をやつても、神経質に出来上つてしまつて、いけねえのさ」

「なるほど」

「それから、お前さん方、蓮生をレンシヨウとおよみなさるが、あれも詳しくはレンセイとよんでいただきたいね」

「蓮生坊をレンシヨウボウとよまずに、レンセイとよむのですか」

「左様、あの時代に蓮生が二人あつたんですよ、本家がこの熊谷、それからもう一軒の蓮生が、宇都宮の弥三郎よりつな頼綱」

「なるほど」

「まあ、お聴きなさい、熊谷の次郎が最初に出家をしてね、法然様ほうねんさま

から蓮生という名前をもらつて大得意で——この時は間違ひなくレンシヨウといったものですがね、ある時、武蔵野の真中で、

武勇肅々として郎党をひきつれた宇都宮弥三郎と出逢でつくわすと、熊

谷が、弥三郎、おれはこの通り綺麗きれいに出家を遂げて、法然上人

から蓮生という名前までも貰っているのに、お前はいつまでも、侍の足が洗えないのか、かわいそうなものだな、とあざ笑うと、そこがそれ、おたがい坂東武士ばんどうしの面白いところで、宇都宮がいうには、よしそんなら、おれも出家して見せるといつて、すぐさま、法然上人の許へかけつけて、出家を遂げてしまったのだが、その時の言い草がいい、熊谷に負けるのは嫌だから、拙者にも熊谷と同じ名前を下さい、ぜひ、熊谷と同じ法名ほうみょうでなければ嫌だ……」

その時、道庵は何と思つたか、あわてて自分の口へ手を当てて、子供があわわをするように、

「様、様、様、様」

と続けざまに呼びましたから、若い劇作家連が変な顔をしました。

実は、ここに長者町一味のならず者がいなかったから幸い。

いれば先生は忽ち尻尾をつかまえられてしまう。さいぜんから

たちま しっぱ

聞いていれば調子に乗って、渋団だの、熊谷の次郎だの、宇都宮の弥三郎だのと、名優や、坂東武士に向つて、しきりに呼捨てを試みていた。苟くも人格を表明する者に向つて、様づけを忘れた時は、百文ずつ罰金を納めることに自分から約束を出しておいたはず。そこで、先生が、あわてて口を押えたのですけれど、この人たちは気がつきません。そこで先生も、やや安心して、若い劇作家連に向つてひきつづき熊谷の物語をはじめました、

「法然様も、これには驚いてね、法名が欲しければいくらでもしかるべきものを上げよう、なにも熊谷が蓮生とつけたから、お前もそれと同じ名前でなければいけぬという理由はない、第一、

れんしょう

それではまぎれ易^{やす}くて、名前をつける意味をなさない……と法然様がねんごろに諭^{さと}されたけれども、宇都宮の弥三郎はいっかなきかない、ぜひ熊谷と同じ名前を貰^{もら}って行かなければ、あいつの前へ幅^きが利かないという理窟^{りくつ}で、法然様もあきれ返り、よしと同じ蓮生の名を授けてくれたものだから、宇都宮の弥三郎様が、鬼の首でも取ったつもりで、大喜びで東国へはせ返り、熊谷様の前で溜飲^{りゅういん}を下げたものだ……それからこつち、本家の方がレンセイ、新家^{しんや}がレンシヨウとこうなつたんだ。ここいらが昔の武人のいいところで、今時のヘラヘラ役者が、海老蔵を名乗^なりたがるとはわけがちがう」

「そういうわけでしたか」

「それからまた或る人が、この二人蓮生に向つてこういう告げ口をしたものさ、熊谷の入道や、宇都宮の入道は無学の者だか

ら、法然様は念仏だけを教えてだましておくんだが、もつと、
惻^{りこ}憐^うな人には、もつと高尚な教えを説いて聞かせてるんだ……

こういうことを二人の耳へ入れたものがあつたからたまらない、
二人がムキになつておこつて、法然様のところまで詰^{きつ}問^{もん}に出か
け、これも懇^{こん}々^{こん}ときとされて引下つたことがある」

「なるほど」

「そうかと思えば、物に触れて無常を感じてみたり、涙を流し
てみたりするところに美質があるのさ、その無邪気なところを
お前さん方、神経質にしてしまつてはいけませんよ」

「注意致しましょう」

「それからお前さん方、熊谷様はしの、党^{たん}だか、丹^{たん}の党^{たん}だか御存
じか」

若い人たちが煙^{けむ}にまかれて聞いているものですから、道庵先

生もいい心持になつて、やがて、また芝居の方に逆戻りをして、
「熊谷の芝居は嫩軍記ふたばぐんきに限つたものさ、あの物語の、さてもさんぬる……で故人柏蔭様はくえんさまはこういう型をやつたね、一二をあらそいぬけがけの……それ鉄扇をこう構えて、平山熊谷討取れと……」

興に乗じた道庵先生は、故名優の型をやり出して、あたり近所の煙草盆や煙管きせるを無性むしように掻き集めたり、突き飛ばしたりするものですから、近所迷惑ひとかたは一方ではありません。若い劇作家連は面白半分、迷惑半分に聞いてはいるものの、いっこう面白くないのは宇治山田の米友であります。

芝居そのものに予備知識のない米友には、こんな物語がばかばかしく、聞いていられるものではありません。

ぜひなく米友は、盛んに団子を食べました。

話より団子という洒落しやれでもありますまいが、団子を食べてま
ぎらかしていたが、ついにこらえきれず、

「先生、いいかげんにしたらどうだ」

「そうだそうだ、日が暮れらあ」

おおあわ

大慌てで団子と茶代を置いて、道庵が外へ飛び出したもので
すから、皆々ホツとしました。

団子屋を飛び出してから間もなく、道庵先生が、

「あ、敦盛あつもりを手にかけるのを忘れた」

これはこの土地に、梅本という蕎麦そばの名物があつたのを、つい
忘れて立寄らなかつた洒落やぎごめざかでしょう。蕨わらびの奈良茶、上尾博労新田あげおぼくろうしんでん
の酒屋、浦和焼米坂の焼米、といったような名物に挨拶しながら、熊谷で、梅本の蕎麦を食べないということが心残りになる
らしい。負けおしみの強い道庵は、これからまた引返して、そ

の蕎麦屋を尋ねようといひ出すかも知れない。

ところへ、かみて上手から聞えて来たのが、

「下に——下に——かぶり物を取りましょうぞ」

これはいわずと知れた大名のお通りの先触れです。

どうも大名のお通りというやつは、道庵と米友の性しやうに合わな
い。

その声を聞きつけた道庵は、顔をくもらせて、

「さあ、いけねえ、友様、面倒だから、そこらへ入へえつてしまお
う」

道庵は、蕎麦のことなんぞは打忘れて、米友を促すと共に、丸
くなって脇道へ走り込んでしまいました。

米友とても、大名の行列があんまり好きではない。

けれども、先生のように丸くなって逃げる必要はないと思う。

大名に借金があるわけではなし、こんなに丸くなつて逃げなくてもいいと思うが、道庵がやみくもに逃げ出したものですから、米友もまた、そのあとを追わないわけにはゆきません。

やみくもに逃げた道庵は、ついに畑の中へ飛び込んで、桑の木へ衝突して、ひっくり返り、そこであぶなくとりとめました。桑の木がなければどこまで飛んで行つたかわかりません。そこへ駆け寄つた米友が、

「先生、怪我はなかつたかい」

「おかげさまで……」

畑の中へひっくり返つて、羽織をほころばした上に、土をかぶつた有様は、見られたものではありません。米友がそれを介抱して、それから廻り道をしてまた本街道に出ると、ちょうど通りかかりの駄賃馬を、道庵が呼び留めました。

値段をきめて、深谷^{ふかや}まで二里二十七町の丁場^{ちようば}を、ともかく馬に乗ることにきめました。

いよいよ、馬に乗る段になると馬方が、

「旦那、それじゃあ向きが違いますぜ」

と笑ったのも道理。道庵は、馬の頭の方へ自分の尻を向け、馬の尻の方へ自分が向いて乗込んだものだから大笑いです。

「ナアーニ、これが本格だ」

道庵はすましたもので、向きをかえようともしません。

「は、は、は、旦那は御冗談者^{ごじようだんもの}だ」

馬方どもが笑いますが、道庵は笑いません。

「坂東武士が、敵にうしろを見せるといふ法はねえ」

さては、先生、大名の行列を見て戦わざるに逃げた余憤がこんなところへ来て、負惜しみをやり出したな。

しかし、先生が頑^{がん}としてこの乗り方を改めないものですから、馬方もぜひなく、そのまま馬をひき出しました。

ですから、通行の人が指さしては笑います。

それをいつこう取合わない道庵は、

「なあに、これが本格の乗り方だよ、笑うやつは古式を知らねえのだ」

というが、大坪流にも、佐々木流にも、こんな乗り方はなかったはず。

ははあ、読めた。熊谷の蓮生坊が上方^{かみがた}から帰る時は、西方浄土^{さいほうじょうど}

を後にするのを本意にあらざとして、いつでも逆に馬に乗って『極楽に剛の者とや沙汰すらん、西に向ひて後ろ見せねば』と歌をよんだ。先生、その伝を行っているのだな。しかし、東に向いたのでは意味をなさない……やはり、いまおびやかされた、

大名の行列に対する意地張りでしょう。

この逆乗りで納まり返った道庵。

二十四

武州沢井の机竜之助の剣術の道場の中で、雨が降る日には、与八が彫刻をしています。

海蔵寺の東妙和尚が彫刻に妙を得ていたものですから、それを見様見真似に与八が像を刻むことを覚えてしまいました。

与八のきざむ仏像——実は菩薩ぼさつは大抵お地藏様に限られていくようです。お地藏様以外のものを刻んだのを見たこともないし、また刻めすまいと思われる。そのお地藏様も、木よりは石が多いのです。

ともかく、ひまに任せてはこうしてお地藏様を刻んでいるから、その作り上げた数も少ないことではあるまい。これは皆、しかるべき需要者があつてする仕事で、これだけでもけっこう商売になりそうですが、与八はこれで金儲けかねもうをしている様子もありません。

与八さんの刻んだお地藏は相好そうごうがいい……と人が賞美して、注文がしきりに来る。

また、与八さんのこしらえたお地藏様は功德くどくがある……といった依頼者がつづいて来る。そういうわけで、それからそれと、与八にお地藏様を刻ませることになったのですが、それを与八が引受けて、山の仕事と、畑と、水車と、子守と、学校との余暇、雨の降る日などを選んでとりかかる。

百年の後、木食上人もくじきしようにんの稚拙なる彫刻がもてはやさるるところ

を以て見れば、与八の彫刻にも取るべきところがあるかも知れないが、今のところではそう感心したものではありません。けれども、与八がこしらえたということが、人の心を縁喜えんぎにする^{と見えて、}出来の如何いかんは問わないで、みな喜んで頂礼ちやうらいして捧げて持ち帰る。

「与八さん、皆さんが、あれほど有難がつて頼むんですから、かりつきりに彫刻をなさいましよ、ほかの仕事は誰でもやれませんが、その彫刻は与八さんでなければ出来ない仕事でしょう」とお松が、かたわらからすすめるくらいです。与八にとつてはドレが本職で、ドレが余技ということもないが、一を専らせんらにするために、他を粗略にするということはないようです。ですから、彫刻のみにかかりきりということとはできません。今日は雨が降るから、それで道場の中で彫刻をはじめたものです。

今とりかかっているのは石の高さ一尺——極めて小さなものです。これはある子供の母が、死んだおさな児へ供養の手向けくよう たむです。そうごう相好そうごうがいいというのは、単純なる鑑賞の心。功德があるというのは、多少功利の念が入っているかも知れない。供養のためというのは本当の親心。死んだ子を行くところへ行かしめたい親の慈悲。与八さんの刻んだお地藏様が、賽さいの河原でわが子を救うという。

与八もこのごろ一つ助かることは、お松が来てくれたので、まず児を育てるの心配がなくなったこと。お松は、郁太郎と登を両手に抱えて、かたわら与八の仕事のすべてに後援を与えている。幸いに、近所から子守も来てくれるし、たのめばいつでも人手が借りられる。剣術の道場は、いつか知らず寺小屋となり、学校となり、与八の製作場となる。

無心で与八が地藏を刻んでいる時、どうかすると、ふいと気がさして道場の武者窓を見上げることがある。そこから、誰か顔を出しているようではならぬ。

誰というまでもない、それは女で――

「与八さん、郁坊は無事ですか」

と恨めしい声。

その時に与八は、郁太郎の母お浜の面影おもかげを思い浮べるのです。どうも、こうして仕事をしている与八のでもとを、お浜が武者窓からのぞいているような気がしてならないのです。

そういう時に与八が悲しい思いをする。もろもろの罪業ざいごうが、みんな自分を中に置いてめぐるように思い出す。この罪業のためには、持てる何物をも放捨して、答えなければならぬという心に責められる。

与八が道場で彫刻をしている時、お松は母屋おもやの座敷で、机によりかかつてお手本を書いておりました。

お手本というのは、ここの道場の学校に来る子供たちのために、西の内の折本をこしらえて、お松がそれに「いろは」と「アイウエオ」から始めて、村名むらなづ尽しに至るまで、それぞれ筆を染めていくのです。

子供たちのためにお手本を書くのみならず、このごろでは、娘たちのために古今集こきんしゅうを書いてやつたり、行儀作法を教えたりすることもあるのです。好んでお松が、人の師となりたがるわけではないが、お松は日頃の心がけもあり、ことに相生町あいおいちようの御老女の家にある時、念を入れて字を習いましたものですから、なかなか見事な筆跡です。またその時に作法や礼式も心がけていましたから、今も、知っている限りのことは、人に伝えるよ

うになったのです。

人に物を教えるということもまた、自分を教育する一つの仕事になりますものですから、今、お手本を書くにしても、お松は一生懸命であります。

幸いなことに、登は乳母うばがついて来ていてくれるものですから、手数もかからず、郁太郎の方は、もう四つになろうというほどもあるから、これも、さほど世話が焼けない上に、子守おおげさがついていますから、お松はこうして、教育（というのも大袈裟ですが）の方に身を入れることができるのであります。もう一つ幸いなことは、ほとんど絶家ぜっけのようになっていて、荒れるに任せていた宏大な机の家屋敷が、これらの連中が移り住むことになつてから、急に光りかがやきはじめたような有様であります。

人間の家は、人間が住まなければ駄目なものです。

お松のここで書いているお手本は、単に道場へ集まる子供たちに分けてやるのみならず、これから三里も五里も山奥の炭焼小屋や、猟師の家庭にまで入ります。

どうかするとううしてゐるところへ、武者修行が尋ねて来る
ことがある。道場の名残なごりを惜しむためか、そうでなければ、化物退治にでも来た意気込みでおとのうて見ると、応対に出るのが妙齡なお屋敷風のお松ですから、さすがの武者修行がタジタジで、

「ははあ、では、あなたは机竜なぎなた之助殿のお妹御でもござるか……」
といつてお松の顔をながめ、薙刀の一手もつかうものかという
思い入れをする。

「いいえ、わたくしどもは、ただお留守居をしているだけなん
でございます」

そうしているところへ間もなく、ゾロゾロと草紙をかかえた近辺の子供が集まって来るものですから、武者修行は到底、薙刀をつかう娘ではないとあきらめて退却する。

海蔵寺の東妙和尚なども、お松の字をことごとく称美して、

「これは見事なものだ、どうしてわしらは遠く及ばない」

と言いました。それも謙遜だろうが、お松の字はいへりゆうお家流から

せそんじよう世尊寺様を本式に稽古しているのですから、どこへ出しても笑

われるような字ではありません。

そこで今までは、東妙和尚からお手本を書いてもらっていた人が、改めてお松をお師匠番にたのむ。こうなるとお松がこの寺小屋の実際上の校長で、その職分を、いよいよ興味あることに思っています。

しかしながら、現在かたき仇の家に来て、自分たちが知らず識らず

その事実上のあるじのようなところに置かれているのに、当の主人は行方ゆくえが知れぬその因縁くすの奇しきことを思うと、お松は泣きたくなります。

早く、郁太郎を成人させて、立派にこの家を嗣つがせて上げたものだという心持に迫られる時、お松は、郁太郎を父竜之助に似ないで、祖父の弾正の優れたところにあやからせたいと思います。

ほどなく傘をさして二人、三人、五人と上つて来る石段。

手習草紙を帯からブラ下げて、風呂敷を首根ツ子へ結えたのが、

「誰だい、ここんちへ、お化けが出るなんていったのは、三ちゃんかエ」

「おいらは、聞いたんだよ、よそで」

「悪いや、悪いや、お化けが出るなんて悪いやい」

「だって聞いたんだもの。おいらが、こしらえ事をいったんじやねえのよ」

「悪いや、お化けが出るなんて」

こういいながら石段を上る子供連。村里から机の屋敷へのぼるには、かなりの石段を踏まなければならぬ。

「だって、この間も、旅のお侍がいつてたよ」

「何だって」

「あの道場へお化けが出るつて」

「嘘だあい」

「聞いてみな、今度、旅のお侍が通つたら聞いてみな」

「どんなお化け？」

「知らねえや、おいらは見たことがねえから」

「嘘だい」

たしなめ役の丈の丈のたけ高いのが、お化け説をどこまでも否定する。

「お化けが出たって、夜だけだろう」

「そうさ」

「夜だけなら怖くねえや」

いちばん背の低いのが怖くないという。

「与八さんがいらあ、与八さんがいるから怖くねえや、与八さんは力があるんだぜ、とても力があるからなあ」

「駄目だよ」

おでこが差出口さしでぐちをする。

「何で駄目だい」

「与八さんは、力があつたって、お人好しだから駄目だよ」

「お人好し？」

「ああ」

どちらもお人好しの意味がよくわからないで、

「お人好しなんていうのはおよしよ、与八さんは、ありやお地藏様の生れかわりだって、うちのおつ母^{かあ}がいつてたよ」

「うちの父は、与八さん^{ちゃん}という人は、ありやお人好しだっていつてたよ。だから、力があつたつて、喧嘩をすることなんかできやしねえ」

「力は喧嘩のためにばかり使うもんじやあるめえ」

「だって喧嘩の時に使わなけりや、力があつたつて詰らねえや」

「そうでもあるめえ」

その時、子供の一人が急に下の方をながめて、

「ああ、それムクが来たよ」

「ムクが来た」

子供たちのすべてが傘をあみだにして下段の方を見ると、ムク犬が首に小箆こざるを下げて、悠々ゆうゆうとのぼつて来る。

今ではこの犬も、同じところの屋敷に、同じように客となっている。

そうして、小箆を首に下げては、里へ買物に行くのを仕事の一つとしている。最初は怖れていた村の子供も、今はこの犬を畏愛いあいするようになっている。

子供たちはムクを中にとりまいて上りはじめる。お化けのことも、お人好しのことも、もう問題にはなっていない。

「犬ハヨク夜ヲ守ル、人ニシテ犬ニ如しカザルベケンヤ」
背の高いのが、大きな声で叫び出す。

「太郎ドンノ犬ハ白キ犬ナリ、次郎ドンノ犬ハ黒キ犬ナリ」
負けない気で、あとをつづけた鼻垂はなたれこぞう小僧。

「油屋ノ縁デスベツテコロンデ……」

と歌い出したよだれ涎くり。

こうして犬を擁ようした子供らは、石段をのぼりつめて冠木門かぶきもんをくぐると、

「先生」

「与八さあ——ん」

「こんにちは」

「雨が降ります」

道場の庭は、にわかに騒々しく、賑わしくなりました。

その時分、与八はもう地藏の彫刻をやめて、道場の内部には机が並んで、三十人ばかりの子供がズラリと並ぶ。

「先生、こんにちは」

「お師匠様、こんにちは」

先生といわれ、お師匠様と呼ばれているのはお松です。

「みなさん、雨の降るのに、よく休まないで来ましたね」

お松はここで三十人の子供を相手に、単級教授をはじめ、かいぞえやく介添役は与八。

ソの字と、リの字の区別のつかないもの、七の字を左へ曲げたがるもの、カの字の肩の丸いのを直したり、やや進んだところむらなづくで、村名尽しの読み方、商売往来、古状揃こじようぞろえの読違えを直してやったり、いま与えてやったお手本へ、もう墨をこぼしたのを軽く叱ったりしていると、そのうしろでは何か物争いをはじめ、取組み合いがはじまるのを与八が取押える。

「お師匠様」

だしぬけに呼ばれて、お松は振り返り、

「何ですか」

「与八さんはお人好しだつていいですが、本当ですか」

「そんなことをいうものではありません」

お松がたしなめると、当の与八は笑っている。

「お師匠様」

「何ですか、もうすこし小さい声をなさい」

「金太の野郎が、おいらの墨をなめました」

「なめやしないやい、香いをかいでみたんだい、こんな物をなめるかい」

「いけません、人の墨や筆を、だまつていじるものじゃありません」

「あ、先生、宇八が、あとから、おれの頭の毛をひっぱりました」

「いけません」

「お師匠様」

「何ですか」

「三ちゃんが、ここの道場へはお化けが出るって言いました」

「旅のお侍に聞いたんです」

「そんなことをいうもんじゃありませんよ」

「お師匠様、川つていう字は真中から先に書くんですね、端から書きちゃいけないですね」

「そうです、真中から先にお書きなさい」

「先生、おたあは字を書くふりをして、人形の頭を書いています」

「うそだい、うそだい」

「うそなもんか、これ見ろ、墨がこの通り坊主頭になつてらあ。先生、おたあは字を書くふりをして、こんな坊主頭を書きまし

た」

「いけません……それから周造さん、お前さんも、人のいいつけ口をするものじゃありませんよ」

「先生、おたあがおいらを睨にらみました、帰りに覚えてろって、拳固げんこをこしらえて見せました」

「静かになさい。多造さん、人をおどかしてはいけませんよ。それから周造さんも、おたあといわずに、ちゃんと多造さんとおいいなさい」

「先生、硯すずりの水がなくなりました」

「それではみなさん、お手習はこれでおしまいにします、硯と草紙を、ちゃんと正しく、筆を前に置いて、こちらをお向きなさい」

程経てお松がこういうと、子供たちが静まり返る。お松は自

分も座について、

「手をよごしませんでしたか、さあこうして上げてみてもらいなさい」

三十名の子供が、残らず両手を差し上げると、

「あ、先生、おたあはつばきで、手にくつつけた墨をふいています」

「うそだい」

ともかくもこれで習字の時間が終つて一礼すると、子供らは、切りほどこかれたように、与八と、お松の周囲に寄つてたかつてかじりつく。

与八も、お松も、それを叱ろうとはしません。

沢井道場の今日このごろの有様は、こんなあんばいです。

今日はお松が、ムク犬をつれて、万年橋を渡ります。

これはかねて、心がけていた、対岸和田の村に、宇津木文之丞のお墓参りをしようと思つていたのを果すつもりと見える。実は、このお墓参りには、与八も、郁太郎も、乳母^{うば}も、登もうちつれて、一緒に出かけようと思つたのですが、それはどうも憚^{はばか}るところが多いと思ひ返して、お松はムク犬だけをつれて出かけたのです。

天氣がよいのに、秋がすでに^{たけな}闌わという時ですから、多摩川をさしはさんだ兩岸の山々谷々が錦のようになっていきます。

大菩薩へ通ずるこの街道。お松には思ひ出の多いところ。

万年橋の上ではたちどまつて、川の流れを見下ろしました。

橋の袂^{たもと}で逢つた夫婦連れの巡礼。お松はその姿をなつかしくながめて、

「どちらからおいでになりました」

「上方から大菩薩越えをして参りました」
かみがた

「大菩薩峠の上は、もう雪でしようね」

「いいえ、まだ雪はございませんでしたが、ずいぶん寒うございました」

「紅葉はどうでした」
もみじ

「麓がこんなにあかいくらいですから、峠の上はもう冬でございました」
ふもと

「そうですか、お大切に」
だいじ

それだけの問答で別れる。

海拔六千尺の峠の頂に、吹雪よりも怖いものはいなかったか、それまではきかず。
いただき

向うの村へ渡って、改めて沢井を見渡すと、山巒の中腹に堀
さんらん

をめぐらした机の家は、さながら城廓のように見える。

お松は秋の情景をほしいままにして、山と畑との勾配こうばいゆるやかな道を歩みました。

と見れば、道ばたの芝の上に置かれた剣術の道具一組。袋に入れた竹刀しなひにつらぬかれたまま置捨てられて、人は見えない。あちらの畑の中の柿の木の上で声がする。

「新ちゃん、沢井の道場がこのごろ開けたってなあ」

「そうかい」

「それでね、女の先生が来たんだとき。女の先生だから薙刀なぎなたでも教えるんだらう」

「そうか知ら、薙刀はこわいや」

お松が通りかかるとも知らず、沢井の道場のこのごろの噂うわさ。
「薙刀は一段違いだからな」

「そうさ、薙刀は一段違いだから、油断してかかるとやられるとさ」

「明日あたり見に行こうか」

「見に行こう。だが、先生にしかられると悪いからな」

「見に行くだけならよかろう。それに、薙刀の武甲流というのは、もとは甲源一刀流から出ているのだと先生がいったよ」

「そうか知ら」

「女でも先生になるくらいだから、強いだろうな」

「そりゃ強いさ」

お松は立ちどまって、柿の木の上の子供の話を聞きながら、おかしさに堪えられませんでした。沢井の道場を開いて、剣を教えずして、文字を学ばしめているのに、それが誤り伝えられて、自分のことが薙刀の師範として子供らの噂にのぼっている。

それにしてもこのあたりの子供、柿の木によじながらも武芸の話。路傍に置捨てられた剣術の道具も、この子供のそれに違いない。

話によれば、近いところの先生の許へ、剣術の稽古に行くその道草らしい。

ほどなく、枝つきの柿の実をおびただしく手折つて畑道を駈けて来る二人の少年、年はいずれも十五六。

「あ——」

といつてお松と顔を見合わせ、恥かしそうに以前置捨てた剣術の道具の傍へよつて、その柿の枝を結えつけて肩にかける。二人の少年の勇ましい後ろ姿を見るにつけ、思い起すは宇津木兵馬のこと。

武術は人に敢為かんいの氣象を教えるが、抗争の念を助長させたく

ないものだ、との優しい心づくし。

二十五

根岸に引移った神尾主膳と、お絹とは、このごろ痛切に金がほしいと思つています。

誰でも大抵の人は金がほしいと思つてゐるが、この二人にとつて、それがいつそう切実なのです。

神尾主膳はある時、つくづくと思いました、

「金というやつは女とおなじことで、出来る時は逃げて追つかけてくるが、出来ないとなると、追いかけても逃げてしまう」

お絹もまた口に出して言う、

「どうかして、お金がはいる工夫はないものかしら」

實際、金というものがない以上は、都会生活の興味の大部分は失われる。こうして不景氣に隠れん坊をしているくらいなら、みやま深山の中も、根岸の里も、変ったことはない。

ことに金の有難味を知っている神尾主膳——金を儲けることもうの有難味ではない。使う方の有難味を知っている神尾主膳にとつては、金の光と一緒にでなければ、どこへも行つてみようという氣にならない。

眼と鼻の先に吉原があろうとも、好きな書画骨董こつとうの売立ての引札を見ようとも、かわり狂言の番付がくばられようとも、しよげるばかりで浮き立たない。

お絹にあつては、それがいつそう輪をかけた渴望で、この女の持つてゐるすべての虚栄心と不満足は、みな金というところへ落ちて行く。その金が廻らない。廻るべきはずもない。果し

てこんなところへ思うように廻つて来れば、この世に苦勞はない。そこで、どうしても廻らないものを、無理に廻そうとする。あの当座こそ、二人は外へも出ないで、浮うわずつて暮らしていたが、このごろ、お絹は、小女こおんなをつれてちよいちよいと出歩く。どうかすると、朝出て夜おそく帰つて来ることさえある。

それは廻らないものを、無理に廻そうとする算段だと知つてゐるから、神尾もとがめ立てをするわけにはゆかない。けれども、その出て行つたあとでは、神尾もいい心持はしない。ことに夜おそく帰られたりする時には、むらむらと氣が変になることもあるが、今の身ではそれもかれこれということではできない。そういう時には、お絹が必ず多少のみやげを持つて来るのだから。そのみやげというのは、つまり、差当つて二人の生活になくてはならぬ「金」をどこからか借り出して来るからです。

こうして神尾は、今のところ、お絹の働きによつて養われている有様だが、これは神尾にとつて不満であるように、お絹にとつても食い足りない。もつと派手に儲けて、もつと派手に遣^{つか}いたい。その時にお絹は、お角のことを思い出して、ひとり腹立たしくなる。何か一やま当てて、あの女の鼻を明かすような働きがしてみたいが、どうも足搔^{あが}きがつかない。

こんな謀叛^{むほんぎ}気は、神尾も相当に持つていないではないから、二人は顔を見合わせると、あれかこれかと語り合つてみるが、落着くところは資本^{もとで}。まとまった金が土台になれば動きが取れないということになる。

お絹が駒井甚三郎に当りをつけたのは、最初からのことでした。が、手を廻してみると、駒井は房州の方へ行つてしまったとのこと。房州まで逐^おいかけて行く気にもなれない。

そこで、方針をかえて、江戸府内の心あたりを訪ねている。

今日も、小女を連れのお絹は、湯島の方から上野広小路へ出て、根岸の宅へ帰ろうとしました。広小路の賑やかなところを通って行くうちに、五条天神へはいる角のところで、一人の坊さんが立って頻りに説教しきをしている様子を見かけました。聞くともなしに聞くと、

「成田山御本尊のお姿、滅多にはおがめない不動尊御本体のおうつしを、このたび御本山のおゆるしを得て皆様に売り出して上げる、一卷が百と二十文、十巻以上お買求めの方には、一割引として差上げる、滅多にはおがめない成田山御本尊の御影像、一枚が百と二十文、十枚以上お買求めの方には一割引……」

お絹がそれを聞いて、これはお説教ではないと思いました。これはお説教ではない、成田山御本尊の絵姿を売っているの

だと思いましたが、その坊さんたちの仰々しい錦欄きんらんの装いや、不動明王御本尊と記した旗幟はたのぼりが、いかにも景気がよいものですから、お絹も足をとどめて、人の肩からちよつとのぞいて見ますと、中央に僧頭巾をかぶった坊さんが、物々しくいいつつけました、

「勿体なくも、成田山御本尊不動明王のお姿、滅多には拝めない品を、このたび、衆生済度しゅじょうさいどのために、あまねく世間に売り出して差上げる、一枚が百と二十文、十枚以上お買求めの方には一割引——なお、この際お申込みの方には特に景品と致しまして——」

前に、やはり錦欄の帳台を置いて、その上におびただしい絵像の巻物を積み重ねながら、要するに衆生済度のために、不動尊の絵姿を、一般に公開して売下げるといふ宣伝であります。

大江戸は広いものですから、これを聞いて有難涙に暮れながら、お姿をいただいて帰るものもあり、なかにはばかばかしがつて、山師坊主の墮落ぶりの徹底さかげんを、あざ笑つて過ぐるものもあります。お絹も、その光景を見て、なんだか異様に感じました。

信仰心などは微塵みじんもありそうもないこの女。それでも、不動尊の公開売出しには、少しばかり驚かされたものと見える。

その場は、それだけで、まもなく根岸の里へ帰つて来ました。

神尾主膳はその時、一室に屈託して、今日もしきりに金のこ

とを考えています。ぜひなく両国の女軽業おんなかるわざの親方お角のところ

へ無心してやろうかとも思いました。あの女ならば話がわかる。

頼みようによつては一肌も二肌も脱ぐ女だが……どうも現在では考え物だ。あの女を呼び寄せれば、こちらの女が黙つてはいな

い。お角とお絹とは前生ぜんしやうが犬と猿であつたかも知れない。一から十まで合わないで、逢えば噛み合いたがつている。お角へ沙汰をすれば、あの女は一議に及ばずここへやつて来る。お絹とかお面を合わせるようなことにでもなれば、この根岸の天地が晦冥かいめいの巷ちまたになる。それはずいぶん恐ろしい……どうかして、うまくお角を誘おびき寄せる工夫はないか。ともかく、手紙をひとつ書いてみようではないか。神尾主膳はその心持で手紙を書きかけたところへ、お絹が帰つて来たものですから、その手紙をもみくちやにしてしまいました。

「ただいま帰りました」

「お帰り」

と言つたが、神尾はやはり苦にが々しい心持です。

「ああ、今日はずいぶん歩きました」

「どこへ……」

「どこという当てはございませんけれど……」

神尾はひとりで留守居をさせられている時は気が焦々し、帰つて来た瞬間は、人の気も知らないでといういまましい気分になりますけれど、やがてあまえるような口を利き出されると、つい、とろりとして可愛がつてやりたい気になります。そこで、結局、あれもこれも、有耶無耶です。

やがて、二人睦まじい世間話、

「今の坊さんたちの商売上手には、驚いてしまいました」

「どうして」

「今日、上野の広小路を通りかかりましたところ、坊さんのお説教とばかり思つて見ましたら、不動様の御本尊の巻物を売り出しておりましたよ」

「なるほど」

「それもあなた、不動様の功德くどくを述べる口の下から、一卷についていくら、十巻以上は割引……まるで糶売せりうりのような景気。でもなかなか売れるようでしたから、ずいぶんお金儲けにもなりましょう。ほんとうに今時の坊さんは商売上手です」

「ははあ」

この時神尾主膳の耳へは、金儲けという言葉が強く響いて、その金儲けから逆に、お絹の言葉を二度三度思い返しているうちに、ハタと自分の膝をたたきました。

神尾主膳がハタと膝をたたいたのは、お絹の世間話が暗示となつて、こういうことを考えついたのです。

坊主を利用してやろう——という、ただそれだけのボーツとした謀叛むほんの輪廓が浮き上つて来ました。というのは、僧は俗よ

り出で、俗よりも俗なり、ということをかねて知っていたからです。出家は人間の最上なるもの、王位を捨ててもそれを求むるものさえあるが、坊主の腐ったのときた日には、俗人の腐ったのより更に悪い、図々しくつて、慾が深くつて、理窟が達者で、弁口がうまくて、女が好きで……それを神尾主膳はよく心得ていたから、この際、墮落坊主をひとつ利用して、何か山を張ってみようと考えついたのです。

そこで輪廓のうちへ、お絹の顔が、またブーツと浮んで来ました。

女だわい——谷中やなかの延命院の坊主は、寺の内へ密会所を作つて、身分ある婦人を多く引入れた。これは終しまいがまずかったが、もっと高尚な、巧妙な方法で大奥を動かして、権勢を握った坊主がいくらかもある。

坊主は、比較的に身分ある婦女子にちかより易い地位にもいるし、お寺参りをするのは、芝居茶屋へ通うよりは人目がよい。感応寺の「おみを」は十一代將軍の寵愛を蒙つて多くの子を生んだ。そのおかげで感応寺は七堂伽藍しちどうがらんを建て、大勢の奥女中を犯していた。花園殿もその坊主にだまされて、身代りに女中が自害したこともある。

神尾主膳は、そういうことの幾つもの例を手取るように知っていたから、お絹の今の世間話が、その記憶を残らず蘇よみがえらせて来たもので、それがこの際の謀叛氣をそそのかしたものです。腹があつて、融通がきいて、商売氣のある坊主を見つけたいものだ。

それは、さして難事ではあるまい。清僧を求めるにこそ骨も折れようが、左様な坊主は今時ザラにある——と神尾は、ひと

りうなずいてみました。

どういうつもりか、編笠をかぶつて、忍びの体^{てい}で、久しぶりで屋敷の中から市中へ向けて神尾が出かけたのは、その翌日のことです。

^{きのう}

昨日話に聞いた上野広小路。そこへ立つて人の肩から、そつとのぞくと、お絹の話した通り、旗幟^{はたのぼり}を立てた坊さんが、物々しく、御本体不動尊の絵像を売っている。その口上も昨日聞いた通り……ただ、昨日の通りでないのが、一通り不動尊の絵像を売り出してから後、改めて、右の頭巾^{ずきん}かぶりの坊さんが、その不動尊の絵像を買求めた者に、景品の意味で授ける安産のお守りの効能を、細かく説明していることです。

右の坊さんは、怪しげな妊娠の原理から説き起して、この安産のお守りの功德の莫大なることと、これによつて、子無き婦

人が、玉のような子供を挙げた実例を、雄弁で説いた上に、なお、希望の方は根岸の千隆寺というのへおいでになれば、われわれの師僧が秘法によつて、子を求めんとする婦人のために、容易く子を得る方法と、安産の加持かじをして下さるということを行いました。

ははあ根岸の千隆寺。これが近ごろ評判のそれか。自分の侘わびびずまい侘住居と程遠いところではないはず。そこに近頃、安産のお守り、子無き婦人に子を授ける御祈祷が行われて、ずいぶん流行はやつているということが、侘住居の神尾主膳の耳へまでよく聞えていた。いろいろの副業を持つているお寺だな。その住職なるものは何者か知らないが、なかなかの遣手やりてと見える、ひとつあたつてみようかな、というこころざしを起しました。

しかし、今のところへその住職を招くのも嫌だし、自分が行つ

て会見を求めるのも嫌だ、何か機会はないものかと考えているうちに、そうだそうだ、お絹をやることだ、あの女を子を求める子無き婦人に仕立てて……これは打ってつけの役者だわい、と神尾が思いつきました。

二十六

それから二三日すると、どういふ相談がまとまったものか、お絹が装いを凝^こらして、程遠からぬ同じ根岸の千隆寺へ通いはじめました。

みずのわかさのかみ

水野若狭守内、神林某の妻という名義で、幸い、この寺の檀家^{だんか}のうちにしかるべき紹介者があつたものですから、寺でも待遇が違いました。その当座は多くの婦人の中に交わつて、お絹も

殊勝に護摩ごまの席に連なる。

住職の僧が存外若いのに驚かされました。年配は神尾主膳と同格でしょう。美僧というほどではないが、色は少々浅黒いが、どこかに愛嬌があつて、また食えないところもありそうです。

で、左右の侍僧がたしか十余人。

席はいつでもいっぱい。しかもそれが六分通りは婦人。あとの四分も、やはり婦人ではあるが、もう婦人の役を終った老婆連と、そのおとらしい男だけ。

この若い住職は、印の結びぶりも鮮かだし、お経を読むものもなかなかの美声です。

ともかく、何の信仰心もなしにやつて来たお絹でさえも、その席へ連なっていると、悪い心持はしません。

それはある日のこと、

「神林の奥様、お急ぎでなくば、今日は書院でお茶を一つ差上げたいと、御前ごぜんの言いつけでございます」

「それは有難うございます」

護摩の席が終ったあとで、帰ろうとするお絹を、こういつて番僧がひきとめたものですから、お絹が喜びました。

書院に待たせられていると、ほどなく例の千隆寺の若い住職が、まばゆいほど紅くれないの法衣をそのまま、極めてくつろいだ面かおいろ色をして現われ、

「お待たせ致しました」

「先日は失礼致しました」

「いや、拙僧こそ。あの時は多忙にとりまぎれて、余儀なく失礼つかまつを仕りました、今日はごゆるりと、お話を承りたいと存じます」

「はい……」

お絹はどこまでも殊勝な面色と、武家の奥様という品格を崩さないつもりで、身の上話をはじめました。

この身の上話は、ここに通いはじめた最初から用意をして来たのですが、今日まで直接に住職に打明ける機会を与えられなかったものです。

「おはずかしい次第でございますが、わたくしが不束なぶつつかりに、主人の心を慰めることができません、連添つて十年にもなりますが、子というものが出来ませんので、夫婦の中の愛情に変わりがございますが、家名のことを考えますと……」

「ごもつと御尤もなこと」

「家名大事と思ひまする夫は、しやう妾を置くことに心をきめまして、このことをわたくしに相談致しましたが、聞くところでは、夫はもう以前から、そうした女を他に置いてあるのだそうでございます

ます。わたくしと致しましては、それに不服を申そうようはございませぬ、快く夫の申出でに同意を致しまして、妾を内へ入れるようにと申しましたが、それは夫が気兼ねを致しまして……」

お絹はそこで、自分の苦しい立場を、言葉巧みに住職に訴えました。嫉妬ではないが、女のつとめが果せないために、夫の愛を他の女に分けてやらなければならない恨み。どんな方法によつてでも、一人の子供を挙げることさえできたなら、死んでも恨みはないという繰言くりごと。それを細々と物語りました。

聞き終った住職は、

「いや、いちいち御尤もなこと、左様な恨みを抱く婦人が世に多いことでござる。御信心浅からずとお見受け申すにより、八葉の秘法を修しゆしてお上げ申しましょう、丑うしの日の夜、これへお越し下さるように……」

案外無雜作むぞうさに允許いんきよを与えられたものですから、お絹がまた喜びました。この秘法は、授けるまでに人を吟味し、信心を試験することがかなり厳しいと聞いていたのに――

丑の日の深更を選んで、子無き女のために、子を授くるの秘法が行われる、滅多な者には許さないが、信心浅からずと見極めのついた者にのみ、その修法しゅほうが許される。

という住職の申渡しが、お絹をして、してやつたりと心の中で舌を吐いて、うわべに拝むばかりに有難がらせ、あまたたび、住職に拝礼して、いそいそとして千隆寺から帰って来ました。

一切を神尾主膳に報告して三日目、丑の日という日の夕方、お絹が念入りにお化粧をはじめると、神尾がその傍でニタニタと笑い、

「これからが土壇場どたんばだ」

と言いました。

「戦場へ乗込むようなものですわ」

お絹は度胸を据えながらも、ワクワクしている。

「一人でやるのは心配だ」

と神尾がいますと、

「お連れがあつては許されませぬ」

とお絹がいう。

どうもこの女の心持では、秘密の修法を受けに行くおそれよりは、好奇心に駆^かられている方が多いらしい。だから、取りよ
うによつては、「いいえ、御心配には及びませぬ、わたしは願つ
ても、そういうところへ一人で行つてみたいのですよ」といつ
ているようです。

今にはじまつたことではないが、それが神尾には不満です。

神尾でなくつたつて誰だつて、こういう危険を好む女に安心を
してはいられない。今は計るところがあるのだからいいような
ものの、もしこれが本当の女房であつたらどうだろう。深夜の
秘密の修法には、秘密の道場があるに相違ない。その秘密室に
隠されたる秘密の罪惡。子をほしがるほどの女に、娘というの
はないはずだから、みんな人の妻妾——その秘密が洩れないの
は、受ける者が秘密を守るからだろう。

神尾主膳はこの時、千隆寺の坊主が憎いと思いました。まし
て美僧でもあろうものなら、殺してやりたいときえ思いました。
千隆寺の坊主ども覚えていろ！ 思わず血走つて一方を睨にらん
だ目は、酒乱のきざした時の眼と同じことです。

それと知るや知らずや、お絹は悠々閑々とお化粧をこらしな
ゆうゆうかんかん
がら、

「色は浅黒いが、ちよつと乙な坊さんですから、ことによると女の方が迷うかも知れません。しかし御安心なさいまし、こちらには役者がちがいますからね」

とお愛嬌のつもりでいったのが、はげしく神尾の神経に触れたようです。

飲まない時は酒乱が起らない。酒乱のない限り、神尾は扱い易い男やすになっているが、この時はそうでない。飲まないで、そうして、酒乱の時と同じような眼のかがやきを現わして、ブルブルとふるえ、

「お絹！」

「え……」

「お前、今晚、千隆寺へ行くのを止よせ」

「え、何ですか、千隆寺へ行くのは止せとおっしゃるのですか。」

止せとおつしやるなら止しもしましょうが、わたしが好んで行きたがるわけじゃないはずです、どなたか、おたのみになつたから、柄になくわたしがお芝居を打とうというんじゃないやせんか」

お絹も少しばかり気色ばみました。そのくせ、お化粧の手は少しも休めない。

「いや、止してもらいたい、止めにしてもらいたい」

神尾はいよいよあせり気味で口早にいいますと、お絹は落着いたもので、

「駄々つ児のようなことをおつしやつたつて仕方ありません、止すなら止すように初めから……」

この時、神尾主膳は物につかれたように立ち上つて、
「止せ！」

お絹の向つていた鏡台に手をかけると、無惨むざんにそれをひっくり返してしまつたから、

「あらあら」

これにはお絹も怫むっとしました。

けれどもこの時のは、酒に性根しょうねを奪われておりませんでしたから、いわば一時の癪癢かんしゃくです。神尾主膳はむらむらとした気分を鏡台に投げつけて、それをひっくり返しただけで、ずっと自分の居間へ引上げてしまいました。

「なんて、乱暴でしょう」

お絹も、さすがに、むらむらとしましたが、酒が手伝つていない以上は、結局、これだけで納まるものだと思つてびりながら、倒れた鏡台を起し、

「いやになつちまう」

と言いながら、鏡台を引起して、ふたたび鏡台に向つたが、「じゃ、止^よそう、お寺へなんか行くのは止しちまおう、こちらから頼んだわけじゃあるまいし」とは言いません。鏡に向つて以前よりは念入りに化粧をやり直したのは、かえつて、「行きますとも……行きますとも。ここまで乗りかけた舟に乗らないでいられるものですか。落ッこちる心配なんかありませんから御安心下さいよ」といつているようです。そうでしょう、落ちる心配はあるまい。落ちたところで、この女は溺^{おぼ}れる氣づかいのない女です。

そうして丹念にお化粧を済ましたお絹は、根岸の里の夕闇を、さんざめかして程遠からぬ千隆寺へ乗込んだのは間もない時。

神尾主膳が酒を飲み出したのはそのあとのことで、お絹とひきちがいに、下男が近所の酒屋へ飛びました。

お絹は日頃、主膳の酒癖を知っているから、この点は厳しくして酒を禁じていたものです。主膳もまた、その悪癖を自覚しているから、お絹の禁制をかえつて力にもしていたようですが、今は、矢も楯もたまらず酒が飲みたくなつて、下男を追立てたものです。

で、居間に入つて、ひとりでチビリチビリとやり出した時に、ようやく鬱憤うつぶんが、酒杯の中へ燦爛さんらんと散り、あらゆる貪著どんじやくがこの酒杯にかぶりつきました。

やがて癪癢とうぜんが納まつて陶然とうぜん——陶然からようやく爛醉らんすいの境に入つて、そこを一步踏み出した時がそろそろあぶない。

「誰だ、そこへ来たのは」

酔眼にようやく不穩の色を浮ばせ、主膳が一喝したのは、まさしく酒乱のきざしと見えました。幸いにそれを真向まっこうから受け

る相手がない。

「誰だ、案内もなくそこへ通つたのは？」

誰もいないはずの人をとがめていると、いないはずのところ
で、

「はい、これは神尾主膳様」

と返事がありました。

「誰だ、聞覚えのない声じゃ、襖ふすまをあけて面かおを見せろ」

「神尾の殿様」

「拙者の名を聞くのではない、そちの名をたずねているのじゃ、
何者だ」

「御酒宴中のところを、お邪魔にあがりまして相済みません
が……」

「かごとをいわずと、名を名乗れ、案内もなしに、尋ねて来た

のは誰じゃ」

といつて神尾主膳が、荒々しく向き直りました。

「へえ、どうも相済みませぬ」

顔を見せないで、声ばかりしている男が、たしかにこの襖の外に來ている。それを聞いて神尾はじれ出しました。

「ただ、濟まないでは濟むまい、夜陰、人のおらぬはずのところへ忍び込んで來た奴、盜賊に相違あるまい……盜賊でなければ名を名乗れ」

「へえ、恐れ入ります、七兵衛でございます」

「ナニ、七兵衛？」

「左様でございます」

「七兵衛とはどの何者だ」

「お忘れになりましたか？」

「知らん、左様な者は覚えはない、誰にことわつて、何の用で入つて来たのだ、不届きな奴」

神尾主膳は、荒々しく立つて長押ながしの槍を下ろして、それを突つけて襖を押開きましたが、誰もおりません。

ほどなく御行おぎようの松の下に立つたのは裏宿の七兵衛。額の汗をふきながら、

「あぶねえ、あぶねえ」

と言いました。

この時、生垣いけがきの蔭から、不意に槍を持つて姿を現わしたのが神尾主膳です。執拗しつこいこと。怪しい者を追いかけて、ここまで槍をつっかけて来たのです。

神尾主膳には多少槍の心得があつて、九尺柄の槍を座に近い

ところへ置き、いざといえはそれを取ることにしている。いざといわない時も運動の意味で、それをしごいてみることもある。今は、そのいざ、というほどの場合でもなく、運動のためでもないのに、まさしく酒乱の手ずさみにこの槍がえらばれているもので、こういう際には、平生の技倆以上に思う存分にその槍を使うことが例になっている。かつて染井の化物屋敷では、この槍のためにお銀様が、危うく一命を取られるところでした。

今はこうして、追わなくてもよい敵を、本城を留守にしておいて追いかけて来たものですから、七兵衛も驚きました。

また厄介なことにはこういう際には、いやに眼が利き^き出してくて、暗いところへ逃げ込んだ敵の影も、平生の視力以上に認められるだけの感能が働いてくるようです。神尾主膳の酒乱は、特に凶暴^{たぐま}を逞^{たくま}しうするために、鋭敏な附加能力といったような

ものが現われるのですから始末が悪い。

「あぶねえ」

驚いた七兵衛は、身をかわして飛び退きましたが、神尾の槍先は、透かさずそれを追いかけて来る。ために七兵衛は、御行おぎようの松を楯に三たびばかりめぐりましたが、無二無三に突きかけて来る神尾の槍先、とてもあなどり難く、ほとんど進退に窮するほどの立場まで突きつめられたので、

「ちえっ」

といって身を躍らすと、松の幹へ足をかけて、早くも三間ばかり走りのぼつてしまいました。突きはぐった神尾主膳、天井裏の鼠をねらうように、槍を空くうにつき立ててみたけれど、もう駄目です。そこで、あせつて、しきりに空をのぞんで突き立てたが、手ごたえがないので、いよいよじれ出しました。

木の上でホッと息をついた裏宿の七兵衛、

「神尾の殿様……私はあなた様に追われようと思つて上ったんじゃないありません、あなた様のおためになつて上げようと思つて上りました、それを、いきなり槍玉にかけようとなさるのは驚きました」

「憎い奴」

「神尾の殿様、落ちついてお聞き下さいまし」

「憎い奴」

「私は、あなた様にお目にかかった上で、ご相談を願ひまして、それからひとつ、あの千隆寺へ行つてみようかと思うんですが……、穏かに上ったつもりなのですが……」

「千隆寺？」

その時、神尾主膳は忘れていた記憶が蘇^{よみがえ}つて来たものと見え、

「うむ、千隆寺」

と叫んで齒嚙みをしました。

「その千隆寺へ、実は七兵衛が、お絹様のおともをして行つてみたかったんです、ところが、どうも、そうはいきそうもございませんものですから、あなた様と御相談をした上で、ひとつからめて搦手から乗込んでみよう、こう思いついて上つたのに、いきなり槍玉の御馳走は驚きました」

木の上で七兵衛は、なるべく低い声で、ものやわからかに言いますと、主膳の逆上がいくら引下つたと見えて、

「うむ、では、貴様は盗賊ではなかったのか」

「ええ、まあ、そういうわけでございます」

「では、下りて来い」

「いや、お待ち下さい、もう少し上つてみましょう、千隆寺の

庭がここで眼の下に見えますから……」

なるほど、この御行おぎようの松の上へのぼると、呉竹くれたけの根岸の里の寺々がよく見えます。

円光寺も見える。正燈寺も見える。金杉の安樂寺までが、それぞれ相当に高い麓いらかを見せているが、めざす千隆寺の庭だけが、特に明るい。

七兵衛が、夜分、遠めの利きく眼とはいえ、こうして、上から眺めたんでは、どこにどういう秘密が行われているか、わかるべきはずはない。多分、あの境内けいだいに忍び入るには、どの口から向ったのが有利か、それを研究しているのでしょうか。

一方、神尾主膳は、槍を片手に、一時は酔眼をみはって、松の上をながめていたが、やがて、酒乱の峠を越したのか、疲れてしまったのか、しきりに眠くなつたと見えて、くずおれるよ

うに、松の幹によりかかつてみたが、ついに支えきれず、根元へ倒れようとして起き直り、きつと足を踏みしめて、何か呟きながら、歩き出しました。

どこへ行くのだろう。多分、屋敷へ引返すのだろうと、松の上から七兵衛は、足もとあぶなく、槍を力に、ふらふらと歩いて行く主膳の姿を、こころもとなく見返っていました。それも、まもなく、呉竹の蔭なる小路に隠れて、見えずなりました。

あとで、ゆつくりと、高見の見物で、千隆寺の境内を隈なく見おろしていた七兵衛。いいかげんの時刻に、ひとり合点をして、その松を下りようとする、例の呉竹の小路の間から、足音が聞えました。

また思い出して、神尾主膳が戻って来たな、見つかつては面倒だと、いったん下りて来た七兵衛が、そのまま、松の茂みの

間に身をひそめています。

歩いて来たのは二人連れ。神尾主膳が戻つて来たのでないことは確かだが、因果なことに、その二人が、御行おぎようの松の根元へ来て、どつかと腰をおろしてしまったことです。

「時に時刻はどうだ」

「まだ少し早かろう」

そのまだ少し早かろうという時間を、ここでつぶそうとするものらしい。

七兵衛が苦にがい面かおをしました。どのみち、長い時間ではあるま

いが、少なくとも、この連中が立退かない限り、この松の上からは下りられない。下なる二人は、かなり落着いて、しかし人

はばか

を憚つての話し声でありましたが、頭の上の七兵衛には、それが手取るように聞き取れる。

「いつたい、その立川流というのは、いつの頃、どこで起り出したものだろう」

「それは、今より八百年ほど昔、武蔵の国、立川というところ
で起つたのだが、その流行の勢いが烈しきにより、まもなく禁
制となつたにもかかわらず、ひそかに、その法を行ふものが絶
えなかつたとのこと」

「ははあ、武蔵の立川が発祥地で、それから立川流という名が
出たのか」

「それを、今時分、千隆寺の山師坊主がかつぎ出して、大分う
まいことをしていたのが、今宵はその納め時」

「というのが、七兵衛の耳に入りました。そうでなくても、その
以前から七兵衛が氣取けどつたのは、この二人の者は隠密おんみつだ。与力
か、同心か、その下の役か、よくわからないが、とにかく、物を

いましめるために忍んで来た役向の者に相違ないと、早くも感づいてはいましたが、さてこそ、めざすところは、自分と同じことに千隆寺。そうして、どうやら、この寺へ、以前から目星をつけておいて、今夜は踏込んで、手入れをする手筈がきまっているらしい。

それはわかったが、わからないのは立川流ということ。

武蔵の国、立川というところは、七兵衛が江戸への往還の道だからよく知ってはいるが、そこから立川流というものが出たことは知らない。

千隆寺の坊さんが、立川流という剣術をつかうわけでもあるまい。八百年前に起って、流行の猛烈にして弊害の甚だしきにより、禁制になったという流儀を、ここの坊主が行っているという。

二十七

立川流——の流れは、もう少し源が遠く、流れが深いはず。

しかし、たぶん今ごろは、千隆寺の境内けいだいの八葉堂の地下の秘密室では、子を求むる婦人のために、問題の祈祷がはじまつたものと覚しい。

とにもかくにも、ここで、禁制の立川流を秘密に行つて、男女を集めているという風聞は、もう、その筋の検挙の手を下すまでに拡がつているというのは、本当らしい。

お絹つらという女の好奇心をそそつて、今宵その秘密の修法しゅほうの席に連つらなることを許したはずの、この千隆寺の若い住職くせものというのが、なかなかの曲者だ。

さあ、いよいよその秘密の伏魔殿が発^{あば}かれた日になって見ると、どんな怪我人が、どこから現われて来るか、この若い住職^{すじよう}の素性もわかつてくれば、その秘法に心酔して、夜な夜なつどう婦人連の顔が明るいとこころへ出された時、世間をあつ！といわせるかも知れない。

七兵衛は、そんな事を考えている時、下では、呉竹の間や、稲垣の蔭や、藤棚の下や、不動堂の裏あたりから、黒い人影が幾つもの、このこと出て来ては、松の幹の下、以前に話し込んでいた二人の前に集まると、二人の者がいちいちそれに囁^{ささや}いて差図をするらしい。差図を受けると集まって来たのが心得て、また闇の中に没入する。その人数凡^{およ}そ十余人を数えることができた。ははあ、いよいよあの人数が千隆寺へ手を入れるのだな——そうなると自分はどういう態度を取ったものか。まあ、も

う少し高見の見物。いよいよ事がはじまつてから、また取るべき手段方法もあろう、まず危うきに近寄らぬが勝ち。幸い、よき物見の松、と七兵衛は再びこの松に落ちつく心持。

その時、さいぜんから控えていた二人の者が、やおら立ち上つて、しめし合わせながら、闇に消えてしまいました。

そこで七兵衛も思案して、松の樹を下りましたが、さてどこへどう飛び込んだか、闇の礫つがひてのようなもので影がわかりません。

しかし、松の上で見定めておいた見当によつて、千隆寺の境内へまぎれ込んだのは疑いもなく、八葉堂の燈籠とうろうの下で、ちらりと見せたのは、たしかに七兵衛の姿でした。

いや、その前方まえかた、燈籠の蔭には、七兵衛でない他の者の姿も、ちらりと影を見せたことがあります。多分、例の隠密おんみつでしょう。

それから一時いっときほどして、千隆寺の境内八葉堂のあたりを中心

として、沸くが如き喧騒が、根岸の里の平和を、すっかり破つてしまいました。

火事か、火事ではない、強盗か、いいえ、盗賊でもないそうです。千隆寺へお手が入りました。

ナニ、どうして？ お寺で賭博ばくちがあつたのだそうです。そうですか、それはどうも。いいえ、そうではありません、人殺しの凶状きようじょう持ちが、あのお寺へ逃げ込んだのだそうです。それはこわい——やや遠方まで、人の胆きもを冷させたが、この際、自分の家の戸締りをかたくすればとて、出て見ようとする者はありません。

八葉堂を中にした千隆寺の庭では、数多あまたの坊主どもが、法衣を剥はがれて、例の捕吏とりての手に縛り上げられて、ころがされていゝる。婦人たちが泣き叫んで逃げ迷うのを、これは、さほど手荒

なことをしないが、一人も逃さず、本堂へ追い込んで見張りをつけて置く。

なかには、闇にまぎれて裏手から、或いは垣根を越えて、やつと逃げ出したところを、待ち構えていた捕方につかまえられて、うむ有無をいわさず、境内へ投げ返された僧侶も、女もある。實際、蟻のはい出る隙間すきまもないほどに、手筈はととのつていたものらしい。

さて、本尊の住職はどうした。その夜、はじめて入室を許されたお絹という女はどうした。これは、縛めいましのうちに見えない。とりて捕吏たちは、血眼ちまなこになつて、住職をとたずね廻るけれども、ついにその姿を見出すことができないで、堂の壇上から裏の藪を越えて、いなり稲荷の祠の前まで、地下に抜け穴が出来ていたのを発見した時は、もう遅かつたようです。

これより先、七兵衛は早くも本堂の天井裏に身をひそませて、じつと下の様子を見おろしておりました。

本堂の中では、お手前物の蠟燭を盛んにともしつらねさせて、さながら白昼のような中に、引据えられた婦人たちを前に置いて、仮りに訊問の席を開いているのが、天井の七兵衛には、手に取るように見えます。

しかし、恥と怖れとで、その婦人たちは、いずれも面を上げている者がありませんから、どのような身分の、どのような縹緞きりようの婦人だか、それはわかりません。

有合わせの床几しょうぎに腰をかけて、その婦人たちを訊問している二人の侍。その声で覚えがあるが、これはさいぜん御行の松の下で話し合っていたそれに違いない。今は、白昼のような蠟燭の光で、ありありと二人の姿を見て取ることができます。

その時、七兵衛が疑い出したのは、この役人は町奉行の手か、お寺のことだから寺社奉行の手か。それにしても二人の役人ぶりが少し訝おかしいと思いました。仮りにも一カ寺に手を入れるのに、もとより確たる証拠は握っているだろうが、夜陰こうして踏み込むのはあまりに荒っぽい。そう思つて、二人の役人を見下ろすと、どうも役人らしくなくて、浪人臭い——ははあ、これは例の四国町あたりの出動かも知れないぞ、と七兵衛が胸を打ちました。

なるほど、芝の三田の四国町の薩摩屋敷の浪人あたりのやりそうなことだ。てつきり、それに違いないわい。それなら、それで、こつちにも了簡りようけんがあると、七兵衛が天井裏でニツと笑いました。

下では、そんなことは知らず、いちいち婦人たちに訊問をつ

づけているが、いずれも恥かしがつて返事がはかばかしくない。
「その方たち、夫ある身でありながら、こうして夜陰、お籠りこもをするを許されて来たか」

「夫も承知のことでごございます、ただ子供がほしいばかりに……」

と泣き伏してむせぶ者もあります。

「どうだ、祈祷の利きき目めはあるか」

「はい……」

「聞くところによれば、住職及び徒弟どもの身持ちがよくないとのことだ、何ぞ覚えがあるか」

「……………」

「これは何に用うる品だ」

問題の役人が手に取って示したのは、
畸形きけいな裸形らぎようの男女を描

いた、立川流の敷曼陀羅しきまんだらというのに似ている。

「お祈りの時の敷物でございます」

「ナニ、これを下へ敷いて、その上でお祈りをするのか」

「はい」

怖る怖る返事をするたびに、七兵衛がその婦人たちの横顔をうかがうと、町家のお内儀かみさんらしいのもあれば、武家出の女房もあるようだし、お妾めかけさんらしいものもあるし、ことに意外なのは、妙齡の娘たちが幾人もいることです。これらの娘たち、何の意味で子供が欲しいのか、問題の役人にもわからないが、七兵衛にもわからない。

ところで、当の本尊の住職の行方ゆくえはどうなった、問題の役人にはそれが気がかり。来ていたはずのお絹がここには見えない、それが七兵衛の気がかり。そこへ駈けつけた捕吏があわただし

く、

「秘密堂の壇の下に、抜け穴がありました」

「ははあ、その抜け穴が……」

さてこそこの連中が意気込んで、その抜け穴というのを検分に出かけたあとで、七兵衛はソロソロと天井裏を這い出して破風を抜け、いつか廊下の下へおり立つて見ると、そこへあつらえたように置き据えられた朱塗の賽銭箱。しかも背負い出せといわぬばかりに紐までかけてある。

それを一揺りしてみた七兵衛は、行きがけの駄賃としてはくつきょうのもの、抜からぬ面で背中に載せると、燈籠の闇にまぎれてしまう。

ちょうど、それと前後して、御行の松の下を走る二人の者。前に手を引いているのはお絹で、あとののは千隆寺の住職。二人

とも跣足。はだし

ほどなく、神尾主膳の屋敷の中へ再び姿を現わした七兵衛。

その時分、主膳は前後も知らず眠っておりまして。

その一間へ悠々とお賽銭箱を卸した七兵衛は、早くも用意の
はだかろうそく
裸蠟燭を燭台に立て、その下で一ぶく。やがて、賽銭箱の蓋を
おろ

取ってかき交ぜ、燭台を斜めにしてのぞいて見ると、これはあり

きたりのバラ銭とちがい、パツと眼を射る光は、たしかに二分判、
なんりよう ちようぎん

南鐐、丁銀、豆板のたぐい。まめいたこれは望外の儲け物。もうしかしあり

そうなことでもあると徐ろにその獲物の勘定にとりかかろうと
おもむ

するところへ、裏手で篠竹のさわぐ音。
しのだけ

ははあ、帰って来たな、と思いました。

さいぜん、七兵衛が天井裏で眺めていた婦人の中には、お絹
の姿が見えなかったのが不思議だが、あの女のことだから、う

まく擦^すり抜けたのだろう。これはたしかにあの女が帰つて来たのだな、と思つたから、急にいたずら心が起りました。

一番おどかしてやろうかなという心持で、フツとその燭台の火を消してしまいました。

果して、立戻つて来て、裏の篠藪からソツと枝折^{しおりど}戸をあけて、入り込んで来たのは、千隆寺の住職の手を引いて、跣^{はだし}足で逃げて来たお絹。ホツと息をついて、

「お前様、これが、わたくしどもの控えでございます、もう御安心あそばせ」

「いや、おかげさまで助かりました」

やがて二人は廊下を通りかかると、その一室で音がする。その音は異様な音で、まさしく錢勘定の音であります。金、銀、青銅の類を取交せて若干の金を積み、それをザラリザラリと数え

ては積み、数えては積んでいる物の音ですから、お絹が怪しみました。

誰かこの座敷で金勘定をしているな——しかしこれは解げせない。解せないのみならず、あるべからざることで、日頃、金がほしい、金がほしいと口に出しているのを、憎い狐狸こりどもが知つて調から戯いに來たのか。

そう思うと、ゾツと気味が悪くなりました。

「お前様」

「はい」

「ちよつと様子を見て参りますから、これにお待ち下さいませ」
お絹は住職をとどめておいて、こわごわとその室に近寄つて見ますと、暗い中で、まさしくザラリザラリと錢勘定の音。

「誰？」

お絹がとがめてみますと、

「私ですよ」

「え？」

「私でございます」

「何をしているのです」

「お錢あしの勘定をさせていただいているんでございますよ」

「お錢の勘定……人の家へ来て何だつて、そんな無駄ぶしつけなことをなさるんです、いったいお前は誰です」

「私だというのに、わかりませんか」

「わからないよ、声を立てて人を呼びますよ」

「いけません、いけません」

「では、早く出ておいで」

「お絹様、わたくしでございます、七兵衛ですよ」

「七兵衛さん……」

お絹はあいた口がふさがりませんでした。

「いつ来たの、お前」

「三日ほど前に参りました」

「なんとか挨拶したらよかりそうなものじゃありませんか、だしぬけに人の家へ入って来て、銭勘定なんぞをはじめて」

「でも、これが商売だから仕方がありませんね。いま明りをつけますから、お待ち下さいまし」

と言つて、七兵衛が先刻の裸蠟燭へ火をつけた途端に、障子を開いたお絹が見ると、あたりはパツと金銭の小山。

「まあ——」

お絹はまずその光に打たれてしまいました。

その翌日になって、お絹から千隆寺の住職を、改めて神尾主膳に引合わせた時、おたがいあきに呆れ返って、

「やあ、君か」

という有様でありました。

千隆寺の住職——その名を敏外びんがい——というこの男は、姓を足立といつて、本所の林町で相当の旗本の家に生れ、不良少年時代には、主膳と肩を並べて、押歩いた仲間の一人でありました。

そこで、ガラリと碎けて、お互いの打明け話になってみると、この敏外は、叔父が護国寺の僧で、それを縁故に仏道に入り、無理に坊主にさせられて今日に及んだということであります。

「君などは、坊主になつてうまい商売をはじめたものだが、拙者の如きはこの通りの有様でウダツが上らない、何かしかるべき商売があらば世話をしてもらいたいものだ」

と神尾がいますと、足立敏外和尚はまるい頭をなで、

「ふふん」

と笑いましたが、またつくづくと神尾主膳かおの面を見て、

「君のその眉間みけんはどうしたのだ」

「これか——」

主膳は今更のように眉間の傷に手を当てて、

「ちつとばかり怪我をしたのだ、これあるがゆえに、この面かおが

世間へ出せぬ」

「うむ、ちようど、眼が三ツあるようだ」

「生れもつかぬ不具者かたわもの——」

といって主膳の面かおには憤怒ふんぬの色が現われました。それは、いつもこの傷を恨むと共に、骨にきざむほど憎らしくなる思い出は、あのこま、ちやくれた、口の達者な怖ろしいほど勘かんのいい弁信と

いう小法師のこととあります。あいつのためにこうまで、生涯拭えぬ傷を負^二わされたと思ひ出すと、堪らない憎悪の念がいつぱいになるのであります。

「いや、その傷が物怪^{もつけ}の幸いというものだ。我々の眼で見ると
あいぜんみようおうすがた
愛染明王の相だ」

「ふふん」

と今度は主膳が冷笑しました。主膳の冷笑は、敏外のよりもすさまじさがある。しかし、敏外住職は存外まじめで、

「その豎^{たて}の一眼は、愛染明王の淫眼といって、ことに意味深い
しるし
表徴になつてゐる」

「ナニ、いんがん」

「左様」

「どういう字を書くのだ」

「淫は富貴に淫するの淫の字——これは愛染明王が大貪著時代だいどんじやくじだいの拭うても拭いきれない遺品かたみだ。横の両眼あくしんごうぶくは悪心降伏の害毒削除の威力を示すが、豎の淫眼のみは、いつでも貪著と、染惡せんおと、醜劣おじよくと、汚辱とを覗いてやまぬものだ」

「ははあ……」

神尾主膳は苦笑いしながら、何か当てつけられたように感じました。

暫くしてこの二人は、久しぶりで一石圀いっせきむことになって、おたがい多忙の心を盤の上に忘れてしまいます。

当分は、この住職殿も、この屋敷の厄介になることだろう。

一方、廊下の隅の一間には、裏宿の七兵衛がドツカとみこしを据すえてしまいました。

いつも風のように来ては風のように去る男が、今度は動こうともしないで、その一室をわが物ときめこんで、割拠あえして敢てくだらず、という意気込みです。

そうして、夜になると、蠟燭をともしてザラリザラリとキザな音をさせる。

これは相変らず、金銀、小粒、豆板、南鐐なんりょう、取交ぜた錢勘定をしてゐるに違いないが、金に渴えているお絹にとつては、この音が氣障きざでたまらない。

そこで、この屋敷が、これだけでも、以前の染井の化物屋敷に劣らぬ怪物の巣となりつつあることがわかります。

今日は夕焼のことに赤い日。葉鶏頭はげいとうの多い月見寺の庭を、ゆきつ、もどりつしている清澄の茂太郎は、片手に般若はん若んにやの面めんを抱えながら、器量いっぱいの声で、

やれ行け

それ行け

早駕籠はやかごで……

早駕籠で……

赤いもんどの

暁あけの鐘かね

そりや、暁の鐘

と歌いながら、夕焼に赤い西の空に向って、歩調を練習する兵隊さんの足どりで、行きつ、戻りつしていましたが、またも繰返して、

やれ行け

それ行け

早駕籠で……

早駕籠で……

赤いもんどの

暁の鐘

そりや、暁の鐘

例の弁信法師が積み上げた石ころのところまで来ると、左に抱えていた般若はんやの面を、右に抱え直して、廻れ右をし、

お前とわたしと

駈落かけおちしよ

どこからどこまで

駈落しよ

鎌倉街道、駈落しよ

鎌倉街道、飛ぶ鳥は

鼻が十六、眼が一つ

いい心持で、声を張り上げている時、弁信が縁へ現われて、

「茂ちゃん」

「あい」

「あんまり出鱈目でたらめを歌ってはいけません、鼻が十六、眼が一つ

なんて鳥はありませんよ」

「そうか知ら」

「きまつているじゃないか、考えてごらん、十六の鼻を面かおのど

こへつけます」

「だって、あたいは考えて歌っているんじゃないのよ」

と答えた茂太郎は、弁信の注意には深い頓着を払わずに、再び

歩調を取つて歩きつづけ、

あの姉さん

よい姉さん

堺町のまん中で

うんげん絞りの振袖を

口にくわえて

通る時……

淀の若衆よど わかしゅが呼び留めて

お前の帯が解けている

「茂ちゃん」

弁信が再び呼びかけたものですから、歌いかけた茂太郎が、

「あい」

「お前、うたうなら子供らしい歌をおうたいよ」

「またも干渉を試みたものですから、茂太郎が首を振って、

「なぜ」

「なぜだってお前……鄭^{ていせい}声^がの雅^が楽^くを乱^にるを悪^{にく}む、と孔子様が仰せになりました」

「え……」

「歌うんなら、子供らしい歌をおうたいなさい、今のようなのはいけません」

「弁信さん、お前、むずかしいことばかりいうんだね、鼻が十六あつてはいけないの、孔子様が歌をうたつてはいけないのなんて……あたいが一人でうたつて、一人で喜んでるんだから、かまわないじゃないか」

「そういうものではありません……では、わたしがひとつ、白^{はく}樂^{らく}天^{てん}の歌をお前に教えて上げましょう」

「白樂天ツてなに——」

「支那の昔の歌よみさ」

「教えておくれ」

「道州の民たみツていうのを歌いましょう」

「道州の民ツていうのはなに」

「道州ノ民、侏儒しゅじゆ多シ」

「道州ノ民、侏儒多シ」

「長者モ三尺余ニ過ギズ」

「長者モ三尺余ニ過ギズ」

「市うラレテ矮奴わいどトナツテ年々としどしニ進奉セラル」

「弁信さん、これが歌なの、論語じゃないの」

茂太郎が、少しく不平の色を現わしました。

「だまつて覚えておいでなさい、あとでわけを話して上げます」

から」

そこで二人は、黄昏たそがれの縁に腰うちかけて、白楽天の譲り渡しを試みていますと、門をスタスタと入って来る人がありましたから、めざとくそれを見つけた茂太郎が、

「あ、いやな奴……」

というが早いか、身をおどらして、縁の下へ隠れてしまいました。

「誰が来たの」

弁信が徒らに見えない目を動かしているところへ入って来た旅の人が、

「御免下さいまし」

「どなたですか」

「はい、ええ、通りがかりの者でございますが……」

見ればキリ、リとして甲掛脚絆こうかけきやはんの旅の人。口の利き方きも道中慣れがしていると見えて、ハキハキしたものです。

「はい」

「つかぬことを承うけたまわるようでございますが……手前は大工が商売でございますして」

「あ、大工さんですか」

「はい、渡り大工といったようなものでございますが、承れば承ればを二度ほど重ねたことほど切口きりこうじょう上で、弁信の傍へソロソロとやって来て、

「こちら様の本堂は棟木むなぎから柱、床板に至るまでことごとく一本の樗けやきの木でお建てなすつたとやら、その評判をお聞き申しましたものですから、こうして通りがかりに伺いましたようなもので、口幅くちはばつたい申し分ですが、この道の後学のためにひとつ、

拝見をさしていただきたいとこう思いますんで……」

「あ、左様でございましたか」

弁信法師もまた、さることありと頷いて、うなず

「左様なお話を私もお聞き申しております、棟より柱、椽、たるぎ縁、床板に至るまで、一本の檼を以て建てたのがこの本堂だそうでございます、それはいろいろと因縁話もございますようですが、ともかく、ごゆつくり、ごらん下さいまし……」

その道の者が参考に見学したいというのだから、見ても見せても、さしつかえないと弁信がのみこみました。

「はい、有難うございます、それでは、とりあえず本堂の方から拝見をいたしまして、次に三重の塔を」

「どうぞ、御自由に。誰か御案内を致すとよろしうございますが、ただいま、人少なでございますものですから、どうか御自

由に」

「その方が勝手にございます」

こういつて、旅の男は、スタスタと本堂の方へ行つてしまいました。

その後で、弁信は何か一思案ありそうな面かおをして、

「もう暗いはず、灯あかりが無くて見えるか知ら」

本堂へ廻つて行つた旅の人は、この薄暗い空気の中で、建築の模様を眺めながら、ジリジリと堂をめぐつて、早くも背面へまわりました。

その時分になつて、縁の下から面かおを出した茂太郎が、

「弁信さん」

「なに」

「今の人は、もう行つてしまつたかい」

「まだ裏の方を見ているでしょう。お前隠れなくてもいいじゃないかね」

「だって……弁信さん、あれはいやな奴だよ、あれはね、がん、りきの百蔵といつて、両国橋にいる時に、よくやつて来た、いやな奴だ。あたいを捕ま^{つか}えに來たんじやないか知ら」

「そうかね、そんな人だったの。でも、旅の大工だといつているから」

「大工じゃない、遊び人なんだよ。何しに來たんだろう、氣をおつけ」

「そうね」

二人は、そのいやな奴が何しにここへ來たかを解^げしかねて、氣味悪く思いました。

がん、りきの百蔵とてもまた、すでに机竜之助在らず、お銀様

も、宇津木兵馬も、お雪ちゃんもいないところへ、なんだって今頃になつて尋ねて来たのだろう。

果して見るだけ見、たたくだけたたいてみたが、がんりきの百蔵は、なあんだ、つまらないという面つらをして、以前のところへ戻つて来ると、弁信法師は相変らず縁に腰をかけていたが、茂太郎は再び九太夫をきめ込む。

「いや、どうもおかげさまで、大へんによい学問を致しました、まことに結構な建前たてまえで……」

こんなお座なりを言ったが、がんりきの百蔵は、未練みれんげもなく、この寺を辞して出て行つてしまいました。

そのあとで、弁信は、再び縁の下から這はい出した茂太郎をつかまえて、

「支那の道州というところは、どういふ土地のかげんか、背の

低い人が出るのだそうですね、大人になつて身の丈が三尺しかないのが出るのだそうです。で、それを矮奴わいどと名付けて、年々、朝廷に奉たてまつることになつていたのです」

「背の低い人間を天朝様へ上げるの。そうして、天朝様では、それを何にするの」

「珍しいから朝廷へ置いて、お給仕にでも使うんだろうと思います、それを道州任土貢じんどうこうといいました」

「ジンドコウ？」

「ええ、土地の産物を貢物みつぎものにするという意味なんでしょう」

「そうですか」

「その度毎に悲劇——が起るんですね。つまり任土貢に売られるものは、親も、子も、兄弟も、みんな生別れです、嫌ということができません」

「それは無理でしょう」

「無理です。それですから白楽天が歌いました、任土貢寧^{むじ}口^{かく}斯^{そん}ノ如クナランヤ、聞カズヤ人生ヲシテ別離セシム、老翁ハ孫ヲ哭^くシ、母ハ児ヲ哭ス……ある時、その道州へ陽城という代官が来ました」

「支那にもお代官があるの」

「ええ、お代官といったものでしょうか、日本のお大名ともちがうし……お代官よりは、もう少し格がいいんでしょう。その陽城という人が、道州を治めに来ました時、この任土貢^{じんどこう}を、どうしても天朝様へ納めることをしませんでした」

「その時には、生憎^{あいにく}、背の低い人が見つからなかったのです」

「そうではないのです……陽城公は考えがあつて、ワ、ザとその背

の低い人を朝廷へ奉らなかつたのです。そうすると、天子様から再三の御催促がありました、ナゼ任土貢を奉らないのだと……」

「お代官も困つたでしょう」

「ところが、陽城公が詔に答えていうのは……臣、六典ノ書ヲ按ズルニ、任土ハ有^うヲ貢シテ無^むヲ貢セズ、道州ノ水土生ズル所ノ者、タダ矮民^{わいみん}有^あツテ矮奴^{わいど}無^なシ……とキツパリとお断わり申し上げてしまつたのですね。つまり、私は昔の書物を調べてみましても、任土貢というものは、その土地に有るものを献上すること、無^ないものを献上すべきものではござりませぬ、わが道州には矮民というものは有るが、矮奴というものは無い、無いものを献上することはできませんと、天朝に向つて、キツパリとお断わりを申し上げてしまつたのです」

弁信法師はこういつて、感慨深く息をついて、

「ところが聖天子は、それを御感心あつて、それより以来、矮奴を貢とする^{みつぎ}ことを悉く^{ことごと}おやめになつてしまいました。賢臣と明主との間はいかなければならない事です。道州の民のその後の喜びはどのくらいでしょう、老いたるも、若きも、みな喜んで、そこで一家団欒^{だんらん}の楽しみが永久に保たれるようになりましたものですから……道州ノ民、今ニイタルマデソノタマモノヲ受ク、使君^{しきん}ヲ説カント欲シテ先ズ涙^{なみだ}下ル、ナオ恐ル児孫ノ使君ヲ忘ルルヲ、男ヲ生メバ多ク陽ヲ以テ字トナス……道州の民は今に至るまで、陽城公の徳を慕うて、そのことを語らんとするにまず涙が下るといった有様で、後の子孫がそれを忘れてはならないというところから、男の子が生れると、多くはそれに陽の字をつけました」

ひとりで説明し、ひとりで感心している弁信法師。それを聞

いていた清澄の茂太郎は、退屈もしないが、さのみ感心した様子もなく、弁信の説明が一段落になった時に、例の般若の面を頭の上にのせて、つと立ち上つて庭へ踊り出しました。

いっちく

たっちく

ジンドコウ

有るものは有るように

無いものは無いように

陽城公が申し上げ

道州民が救われた

天朝様はお見通し

いっちく

たっちく

ジンドコウ

と歌いながら、三重塔のある宮の台に走せ上りました。

その時、宮の台の原には、がんりきの百蔵が石に腰うちかけて、思案の体です。

この野郎、先刻は未練気もなく月見寺を出て行つたはずなのに、まだこんなところにひつかかっているところを見ると、何か思いきれないものが残っているのかも知れない。

「おれという野郎も、わからねえ野郎じゃねえか」

といつて柄がらにもなく頬杖をついて、いささか悄気しよげに見えるのは、

近頃はどうも思うようにがんりきの眼が出ないで、あつちへ行つては鼻を明あかさされ、こつちへ来ては又、カ、ヨ、口をつかませられ、

これも思いきれないで、血眼ちまなこで東西南北を駈けめぐつて、なにほどかモノにしようと焦あせっているのが、兄貴の七兵衛の物笑い

の種となるばかりでなく、御当人も、少しは気がさしたものらしい。

「さて今晚のところは……」

といつて頬杖を外し、身を起しかけたのは、今晚これからの塙ねぐらの心配でしょう。

「うっかりドジを踏んで、糸くめの親分にでも見つかるうものなら……事だ」

百蔵は真黒な犬目山いぬめやまの方を横目に睨にらんで見たのは、この男にとつては、この郡内は最も危険区域であり、ことに鳥沢くめの糸くめという親分には、頭も尻尾も上らないで、いつぞやは、裸にされて、甲州名代の猿橋の上から逆さまにつるされたことがある。その辺を心配してみると、この危険区域には、うっかり碇いかりを卸せなくなるはずです。

で、結局、どう思案がついたか腰を浮かしながら、

「待てよ……あの寺で、おれの姿を見ると、慌^{あわ}てて縁の下へ隠れたのは、ありや清澄の茂太郎だ」

とつぶやきました。なるほど、がんりきほどの眼力^{がんりき}で、子供の隠れんぼを見落すはずもあるまい。

その時分、幸か不幸か茂太郎は、

いっちく

たっちく

ジンドコウ

そういいながら、ちょうど、この宮の台の原へ馳^はせ上って、ほとんど、がんりきの眼前咫尺^{しせき}のところまでやって来たものですから、

「おい——茂坊」

「おや？」

清澄の茂太郎が、ギョツとして立ち止まりました。

「茂太郎」

「あ、お前は……」

「お前こそ、どうしてこんなところに来てるんだい、両国橋にいれば、ああして人気の上に祭り上げられて、栄耀^{えいよう}栄華^{えいが}が尽せるのに、なんだってこんな山ん中へ逃げて来ているんだい。叔父さんと一緒に帰^{けえ}らねえか、親方もお前を待ちきつてるぜ、御^ご臍^ひ尻^き筋^{すじ}もお前をさがしている。江戸へ行けば、お前は人気の神様で、金の生^なる蔓^{つる}を持つているのに、なんだってこんなところに隠れてるんだい。さあ、叔父さんと一緒に帰らねえか」

悪獣毒蛇を恐れない茂太郎が、この時、面^{かお}の色を真青^{まつさお}にして返事ができませんでした。

清澄の茂太郎は、アツとばかりに立ちすくんでしまいました。
が、んりきの百蔵は、立ち上つて左の手で茂太郎の右の手首を
つかまえてしまひますと、

「叔父さん」

茂太郎は悲しい声を出しました。

「何だ」

「堪忍かんにんしておくれよ」

「堪忍するもしないもありやしねえ、お前をよくしてやるんだ
ぜ」

「だつて」

「こんな山の中に隠れているより、江戸へ出りやあ——両国橋
へ帰りさえすりやあお前、いい着物を着て、うまいものを食べ
て、人にちやほやされて……」

が、ん、り、き、の百蔵は、やさしく言つて聞かせるように、

「楽ができて、うまいものが食べられて、人からは、やんやといわれて、それでお金が儲もうかるんだ」

といいました。

「叔父さん、あたいは、この方がいいんだよ、こつちにいたんだから……」

「何をいつてるんだ」

が、ん、り、き、の百蔵が、茂太郎の言い分をとりあわないのは、あながち、この子供のいやがるのを拉らし去ろうというのではなく、

自分の推量で、つまり、いま言つた通り、江戸へ帰りさえすれば、楽ができて、うまいものが喰べられて、いい着物が着られて、人から可愛がられるのに、こんな山の中へ拐かどされて来ているのを、不憫ふびんがる心もいくらかあるのです。だから、物やさし

い声で、

「それから茂坊、お前には御ごひいき鼻肩なかながあることを忘れやしめえ。貴婦人——というのはなんだが、しかるべき後家さんや、御殿女中なんてのが、お前を可愛がりたがつて、やいのやいのをきめていることを忘れやしめえ。叔父さんが話してやるから帰んな……よ、お寺へ話をしてやろう。お寺の誰に話をすりやいいんだえ」

「叔父さん、御免よ、あたいは江戸へ帰りたくないんだから」
「わからねえことを言いつこなし」

「いいえ。じゃあね、叔父さん、弁信さんに相談して来るから、待っていて頂戴」

「弁信さんてなあ誰だい」

「あたいのお友達……今、縁側に腰をかけていたでしょう」

「あ、あの、小さい坊さんか」

「ええ、あの人に相談して来るから、待っていて下さい」

「それには及ばねえよ」

が、り、きの百蔵は、茂太郎の左の手を容易には放そうとしな
いで、

「おいらが行つて話をつけて上げるから。もともとお前はこつ
ちのものなんだ——こつちといつては少しなんだが……親方の
ところへ帰る分には、誰も文句のいい手がなからうじゃねえか」

「でも……」

「いいッてことよ」

が、り、きは茂太郎の手を引張りました。

「ああ、弁信さあん」

茂太郎は声をあげて助けを求めるの叫びを立てようとするの

を、がんりきの百蔵が早くも、合羽かつばの中へ抱え込んでしまつて、
「おとなしくしな」

哀れむべし。清澄の茂太郎は、無頼漢ならずものの羽搔はがに締められて、
進退の自由を失つてしまいました。せめて、口笛でも吹くだけ
の余裕があつたならば、こういう時に、狼が来てくれたかも知
れない。

しかし、がんりきの百蔵とでも、この子供を、そうむごく扱
うつもりでしているのではないことは、おおよその挙動でも知れ
る。誰かに拐かどわかれて、こんな山の中へ連れ込まれて、動きが取
れないでいるのを、再び世に出してやるのだというくらいな腹
はあるらしい。だから、むしろ親切でしてやるつもりが見える。
そうして、とうとうがんりきの百蔵と、清澄の茂太郎とは、ど
こかへ行つてしまいました。

一方、弁信法師が狂氣のように騒ぎ出したのは、それから後のことであります。

弁信は、報福寺の提灯ちようちんをともして、寺の門を駈け出して、

「茂ちゃあーん」

と幾度か叫び、幾度かころげましたけれども、返事とはありません。

「茂ちゃあーん」

宮の台の、たった今まで百蔵がいた石のところまで来て、またころんで起き上った弁信は、提灯を拾い取って見ると、幸いにまだ火は消えておりませんでした。

「茂ちゃん、どこへ行ってしまった、悲しい」

といって弁信が泣きました。

もう呼んでも駄目だと思つたのでしよう、提灯をさげたまま、しよんぼりと、宮の台の原の真中に立ちつくしています。

「^{かどわか}拐されたんだよ、連れて行つたのは、さきほどお寺を見に来た旅の大工だといったあの人に違いない、それだから茂ちゃんが隠れたのだ、わたしも訝^{おか}しいとは思いました、訝^{おか}しいとは思つたけれど、まさか……と油断していたのが過^{あやま}ちでした」

弁信は、なお暫くの間、そこに立つたままです。

一時は気がつくと、ハツとして狂氣のように驚いたけれども、その驚いた間にも、提灯をつけて飛び出したほどの弁信です。なぜならば、盲目^{めくら}であり、勘のよいことにおいて倫^{りん}を絶^{ぜつ}している弁信自身が、提灯をつけなければ夜歩きのできないはずはな

いのです。それを、その際^{きわ}どい場合にも、寺の名の入つた提灯をつけて、そうして飛び出したほどの弁信ですから、いかなる

感情の切迫の際でも、理性は冷静に働いているのです。冷静に働く理性と、判断力と、記憶力と、それに倫を絶した勘という直覚力が加わると、他に向つてあせることの愚なのを考えて、自らの能力に訴えることの有利なるを悟らないわけにはゆきません。

弁信は、宮の台の原のまんなかに立つて考えました。時々、ほうねんあたまその法然頭を左右に振りながら、そうして、せつかくの提灯ちようそくの中の蠟燭が、早や燃え尽きようとするのに、動き出そうともしません。

ラ、ジオは現代の科学が発明する以前、何千万年の間、この空間に存在していたものであります。けれどもその時代には、各人がアンテナを持つというわけにゆかず、ただ特殊の人だけが、それを聞くことができたのです。天才と修練とによつて、透徹

された心耳しんにを有する人は、この宇宙のラジオを、アンテナも、レシーヴァーもなしに聞くことができ、それを人間に伝えた時に、人間がそれを神秘とし、奇蹟としました。ある特殊の人は、いつでも、限られたる人の聞くことができな音を聞き、限られたる人の見ることでできない世界を見ているのです。ですから、きようもん経文の世界は、大覚者にとっては夢の世界ではなくして、現実の世界です。

ここにお喋りしゃべの弁信法師は、暗中に立つてその特有のアンテナを働かしている。

ちようちん

提灯は、とうとう消えてしまいました。蠟燭ろうそくがその使命を果

して、光明の犠牲を払い尽したから……しかし、それが弁信法師にとつてはなんでもありません。光明には光明の使命があり、暗中には暗中の自由がある。特に弁信にあつては、明暗二つの

差別が意味をなしません。

その翌日になると弁信法師は、しよぼしよぼとして檀家廻りだんかをはじめました。

「ええ、皆様のおかげで、長々と御厄介になりましたが、昨晚、茂太郎の行方ゆくえがわからなくなりましたものですから、私はこれから、それをさがしに参らねばなりません、お雪ちゃんの帰るまでは、とお約束をしたようなものですけれども、これも余儀ない事情でございますから、あとのところをよろしくお願い申しますでございます……御縁があらば、また直ぐに立帰つて参りますが、御縁がないならば、これがお別れになるかも知れません」

信濃の国、白骨の温泉の宿の大きな炉辺で、しきりに猪を煮ているのは、思いがけなく繰込んで来た五人連れのお神樂師かぐらしと称する一行のうちの、長老株の池田といった男と、それからう一人は、北原という同行の男——他の三人の姿の見えないところを以てすると、それは安房峠あぼうとうげを越えて、飛驒ひだの方面へ行つてしまったのかも知れない。

残された二人は、悠々寛々ゆうゆうかんかんとして猪を煮ているところを見れば、この二人だけはここにとどまって、冬を越すの覚悟と見える。

「こんにちは。なかなかお寒うございますね」

そこへあいそうよく入りこんで来たのは、お雪ちゃんです。

「おや、お嬢さん、おあたりなさいまし」

と北原が、薪を折りくべながらいいますと、

「御免下さいまし」

いつか、相当の馴染なじみになつていると見えて、お雪はすすめられるままに、炉辺へかしこまり、

「先生」

と言つて、池田の方へ向きました。

「え」

長い火箸で火を掻かいていた池田は、お雪ちゃんから、思いがけなく先生と呼ばれたので、ちよつと驚いた眼つきをすると、

「少々、お願いがございますのですよ」

お雪は相変らず人懐ひとなつこい言葉づかい。池田は少々恐縮の色で、
「何ですか、改まつて、私を先生とお呼びなすつたり、お願いだなんておつしやつたり、痛み入りますよ」

という。

「いいえ、お隠しになってもわかっておりますよ、守口さんがお帰りの時に素晴らしいました、あの池田先生は良斎といつて、京都では国学の方で指折りの先生だから、よく教えてもらいなさいって……ですから、先生にお願いに上りました」

お雪からこういわれて、池田良斎先生が頭を掻きました。

「守口の奴、よけいなことをいったものだ、なるほど、少しは国学もやるにはやりましたが、指折りの先生だなんて、いやはや」
「先生、わたくしは和歌うたをつくりたいと思つていますけれど、思うように出来ませんが、どうしたらよろしくございましょう」

「それは御同様ですよ。また思うように和歌うたが出来た日には、人麿ひとまろや、貫之つらゆきが泣きますからね」

「それはそうでしょうけれども、せめて形だけでも、ほんの門

の中へ入つてみるだけでもよろしいんです……和歌うたを作るには、まずどういふ順序で作つたらよろしうございましょう、それからお聞かせ下さいまし」

「そうですね……ああいうものは天分ですからね、上手じょうずに手引をしてもらつたからといって、またたくさんに本を読んだからといって、よい歌が作れるというわけのものではありませんが……まあ多く古今の人の名作を読み、同時に自分も多く作り、そうして、しかるべき人に見てもらふのが何よりでしょうと思ひます。今まで何かお作りになりましたか、ここへ来て何かお詠よみになりましたかね、お作があるなら、それを拝見したいものです」

池田じゆんじゆんは諄々として答えました。

「二ツ三ツ、詠んでみましたが、とても人様にお目にかけられ

るような品ではありません」

「遠慮はいけませんよ、出過ぎるのはなおいけませんけれど、人に見られるのを恥かしがつては上達はしません」

「それでは後刻お目にかけましょうが、先生、古人の和歌では、どなたをお手本にしたら、よろしうございましょうか」

「誰を……というのは、ちよつと返答に困りますが、万葉集は読まねばなりません。万葉を御覧になりましたか」

「あ、万葉集はここへ持つて参りました」

「それは、よい本をお持ちでした、万葉集一卷あれば、三年こやまごもの山籠りをしていても、飽きるということはありませんまい」

「ですけども、先生、わたくしには、まだ万葉集の有難味がよくわかりませぬ」

「追々に研究してごらんなさい……私共にもまだまだ、ほんと

うに万葉集を読みこなす力は無いのです。この冬仕事にひとつ、お互いにあれを読み砕いてみましょうか」

「お待ち下さい、今、本を持って来てみますから」

お雪は欣然きんぜんとして、立って本を取りに自分の部屋へ出かけました。

そのあとで、猪いのししが煮え出したものですから、池田良斎といわれたのは箸の先で、ちよいとつまんで風味を試み、

「うまい」

と言いました。北原謙次が、

「山陽の耶馬溪やばけい図巻ずかんの記を読むと、猪を食うところがありますね」

「そうそう、今でもそのあとに、喫猪亭きつちよていというのがある」

「耶馬溪へおいでになりましたか」

「行きました」

「どうですか、いいところですか」

「そうさ、人によつてだが、わたしはあまり好かないよ。山陽にいわせると、天下第一等のところになつてゐるが、山陽という男が、その実あんまり歩いてはいないのだから。それに漢学者流の誇張で書きまくつてゐるのだから、行つて見て感心する人より、失望する者が多いだろう」

「山陽は足跡海内そくせきかいだいにあまねしとか、半ばすとか傲慢をしていますが、この辺までは来たことはないでしょう」

「ないとも。耶馬溪を見てさえあのくらいだから、この辺からかみこうざか神高坂、穂高、槍、大天井あたりの景色を見せたら、仰天して、心臓を破裂させてしまうかも知れない。妙義だつて、よくは見
ていないのだ……うんむかいめい雲霧晦冥の時の妙義を、上州と信濃のある地

点から見て見給え、とても、耶馬溪あたりの比ではないのだよ」
「時に、四面もうみな雪ですね」

「ああ、四面みな雪で懷ろだけが、こうしてあたたまつている」
二人は猪をパクつきながら、一盞いっさんを試みている。

万葉集を行李こうりの中から取り出して、ここに持ち来すべく出て
行つたお雪は、廊下でバツタリと男妾おとこめかけの浅吉に出逢いました。

浅吉は、氣の抜けたような面かおをして、手に櫛箱くしばこを提げながら、
通りかかつて来たものですから、

「浅吉さん、どちらへ」

「お雪ちゃん、お寒くなりましたね」

「ええ、寒くなりました、お風呂ですか」

「いいえ、これから、あなたのところへお伺いしようと思つて

いるところですよ」

「そうですか……」

と言ってお雪は、浅吉の手に抱えている櫛箱に眼をつけますと、
「お内儀かみさんにいいつけられたものですから、仕方なしに……」

「何ですか、浅吉さん」

「あなたのところの先生にお髪ぐしを上げておやりなさいって、お内儀さんからいいつけられたのですよ」

「まあ、うちの先生に？」

「ええ」

浅吉は浮かぬ面かおに、一種の恐怖をさえ浮べておりました。

「それは御苦労さま」

「ええ、お前は髪ゆを結うのが上手だから、先生の髪を結ってお上げなさいと、お内儀かみさんにいいつけられたものですから……」

「そうですか、それは御苦労さまでした」

お雪は愛嬌にいつて、浅吉と連れ立って自分の部屋へやつて来ましたが、そこへ近づくと、浅吉の恐怖と嫌厭けんえんの色が一層深くなつて、ゾツと身ぶるいをしました。

浅吉をつれて自分の部屋へ戻つて来たお雪は、障子をあけて見て、

「おや、先生がいらっしゃらない」

いるとばかり思つていた机竜之助がいませんでしたから、お雪も案外に思い、浅吉も、

「おや、どちらへおいでになつたでしょう」

櫛箱をさげたまま、ぼんやり立っていると、お雪が先へ入つて、

「風呂にでもおいでになつたのか知ら。まあ、お入りなさい、浅

吉さん」

そこで二人は入りました。浅吉はぼんやりと櫛箱をそこに置いて、炬燵こたつの前にかしこまっこたつていると、お雪は戸棚をあけて行李こうりを取り出し、その中から、あれか、これか、と書物をさがしました。

「お雪さん」

それを、ぼんやり見ながら浅吉が言葉をかけたものですから、お雪は本をさがしながら、

「はい」

「あの、お雪さん、済みませんが、油を持っておいででしたら、少し分けて下さいませんか……頭へつける油を」

「油ですか、ええあります、あります、油なら上等のがありますよ」

「切らしてしまったものですからね、どうぞ、少しばかり」

「油なら上等の椿油がありますよ」

「椿油ですか」

「ええ」

「それは結構ですね」

「それも本物の大島の椿油なんですよ、伊豆の伊東の人からいただいたのがありましたから、それを持って参りました、まだたくさんあります」

「そうですか、大島の椿油なら本物です、ずいぶん、椿油といつてもイカサマ、ものがありますからね」

「それにね、髪へつけるばかりじゃありません、刀の油とぎをするのに、椿油がいちばんいいんですってね」

「そうですか……刀にはちようじ丁子の油がよいと聞きましたが、椿油

でもいいのですか」

「椿の方がいいんですとさ」

といいながら、お雪は戸棚の隅から油壺に入れた椿の油を取り出して、浅吉の前に置き、

「たくさんお使いなさいまし」

「有難うございます」

お雪は再び書物の数を読んで、都合六冊ばかりの本を取揃え
ると、

「では、わたし、ちよつと下へ行つて参りますから、一人でお
待ちなすつて下さい」

「お雪ちゃん」

お雪が立つて下へ行こうとする袖を、引き留めるようにして
浅吉が、

「お雪ちゃん、もう少しここにいて下さいな」

「でも、わたし、よい歌の先生が見つかりましたものですから、教えていただきたいと思います」

「それにしても、私は一人じゃ淋しいから、少しの間ここにいて下さいな」

「いいえ、うちの先生もそのうちに帰るでしょうから」

「お雪ちゃん……後生ごしようですから」

浅吉は拝むようにいいましたけれども、お雪は笑って取合わず、

「浅吉さん、弱い人ね、もう少し強くないと、鼠に引かれちまいますよ」

お雪は、新しい知識のあこがれがいつぱいで、本を抱えると、
欣いそいそ々として下へおりて行きました。

それを追いつがるほどの元氣もなく、そのあと浅吉は、ぼんやりとして、お雪から与えられた備前焼の油壺を取り上げて、そつと香いをかいでみました。

そうして、また油壺を前にして、ぼんやりと、かしこまっていたましたが、誰も戻つては来ません。当の人がいないのを幸いに、立帰るほどの元氣もなく、主なき炬燵こたつに膝を入れるほどの勇氣もなく、油壺を前にして、ぼんやりと、立つていいのか、坐つていいのか、わからなくなりました。

こうして取残された男妾おとこめかけの浅吉は、いくら待っても、誰も戻つては来ません。

待ちあぐんでしまった浅吉は、しばらくのこと、ひとまず引取つて、また出直そうという氣になりました。

そこで、油壺を取り上げて、戸棚へ仕舞い込んでおこうとす

る途端に、行李こうりの中で、パツと自分の眼を射るものを見つけた。
した。

お雪が取急いだものですから、行李の中に残された本が整理しきれず、手軽に投げ込まれてあつた中に、眼を眩惑げんわくするような、極彩色の浮世絵の折本が一冊、ほころびかかっているのを見たものですから、油壺をそこへ差置くと、その折本をたぐつてみました。

見れば、それは源氏の五十余帖を当世風に描いたもので、絵は二代豊国あたりの筆。版も、刷りも、なかなか精巧で、そこらあたりの安本とは、趣の変つた情味がゆたかです。

浅吉は吸い入れられるように、その絵本に見入りました。

お雪ちゃんという子も、これだから油断がならない。

浅吉は怖る怖る、その折本を下へ持ちおろして、最初から一

一枚一枚見てゆくうちに、浮世絵の情味が、自分の身からだの中に溶け込んで、しばらく、われを忘れてしまいました。

「お雪ちゃんという子もわからない子だ、無邪気で人なつこく、同情心が深くって、神様のような心持かと思っていれば、こんな本を内密ないしよで見ているんだもの。それでも、年頃だから、こんな美しい当世風の浮世絵を見ていれば、悪い気持もしないのでしょう、にくらしい」

浅吉はこの時、お雪を憎らしい子だと思いはじめました。

事実、浅吉にあつては、このごろ中からお雪ちゃんというものが、読めたような、読めないような、心持になっているのです。

もう、年ごろなのに、無邪気で清々せいせいとした子供のすいような気分——かと思っていると、なにもかも見抜いて、粹すいを通して

ようなところもあるし——あの目の見えない人を先生と呼んでいるが、何の先生だか、浅吉にはよくわからない。親類の人でもあるようだし、全く他人でもあるようだし、隔てのないほどにあまえた口を利く^きかと思えば、全く改まった扱いをしているのを見ることもあるし——私たちの間だつて、つまり主人の後家さんの性質や、心持まで、ちゃんとのみこんでいながら、その心持で外^そらさず附合っているのかと思えば、全くその辺のことは御存じがなく、ただ自分は、むずかしい御主人のお供をして来ているのだとばかり、信じきっているようでもある。

お雪ちゃんという子はわからない子だ、と浅吉は、これまでも幾度か首をひねらせられたのですが、今という今、ほんとに憎らしい子だ、と思いはじめました。

けれどもなお、一枚一枚と見てゆくうちに、お雪ちゃんを憎

らしいと思う心が、いつか知らず絵本の中の主人公に溶け込んで、ついには今様源氏の光ひかるの君きみが憎らしくなりました。女という女から可愛がったり、可愛がられたり、さして深い煩惱ぼんのうも感ぜず、大した罪という自覚もないくらいだから、罪も作らず、最後には自分の可愛がった女を集めて、いちいちに局つぼねを与え、それに花を作らせて楽しむという生涯。男と生れたからには、この光源氏の君のようなのが男冥利の頂上だと、浅吉は、羨うらやましくなりました。そこで勢い浅吉は、一人の後家さんから完全に圧服されてしまつて、グウの音も出ない自分というものの意気地無さかげんに、軽少ながら憤りの心をさえ起してみました。

「私だつて男だ」

という義憤がむかむかと湧き起つたのは、この男としては珍しいことです。といつて、こういう男の義憤も、一概に軽んずる

というわけにはゆきますまい。

「私だつて男だ」

浅吉は、わくわくとして、ひとり憤りを発していましたが、まだ誰も帰つて来ません。自分ひとり、腹を立てているのだということがわかりました。

三十

机竜之助はこの日、湯の宿を出て小梨平の方へ歩いて行きました。

かたばみの紋のついた黒の着流しのままで、頭と面かおは、頭巾ずきんですつぽりとつつんではいるが、その頭巾なるものが、宗十郎というものでもなく、山岡でもなく、兜頭巾かぶとずきんでもなく、また山

国でよく用うるかんぜん帽子というものでもなく、ただ、あたりまえの黒縮緬くろちりめんの女頭巾を、ぐるぐるとまいて山法師のかとうを見るように、眼ばかり出したものです。

四面はみな雪ですけれども、山ふところは小春日こはるびより和。

白樺や桂かつらの木の多いところをくぐり、ツガ、ザク、ラの生えたところをさまよい、溪流に逢つては石をたたいて見、丸木橋へ来ては暫くその尺度をうかがつて、スルスルと渡りきり、雑草多きところでは衣裳を裾模様のように染め、ある時は呼吸せわしく、ある時は寛々ゆるゆるとして、上りつ下りつして行きました。

このごろは、だいぶ身体からだもよくなつたせいでしよう、こうしているところを前から見ても、横から見ても、誰も病人と見る者はないほどに、姿勢もし、やんとしているし、カーヴの甚だ急に変ずるところでない限り、杖を使わないで歩いて行くところ

を見れば、誰も、これが盲目めくらの人だとはおもいますまい。

竜之助の、さして行かんとするところは小梨平に違いない。それより遠くへは冒険になるし、それより近いところには、たずねて行つて見ようとするものもない。

小梨平にはあぶみじや鎧小屋というのがありました。先日、竜之助は雪の案内で、そこまで散歩を試みたことがあるのです。さればこそ、今日はこうして手放しで、山谷の間を、ひとり歩きができるということになつているのでしよう。

白昼に見るせい、今日はたしかに人間の歩き方になつてゐる。本体を宿へ置いて、遊魂そのものだけが街頭に人を斬つて歩く時とは違い、少なくとも人間そのものが、足を大地に踏まえて歩いているように見える。

方二町ばかりの小沼の岸に立つた時に、乗鞍のりくらヶ岳たけが、森林の

上にその真白な背を現わしました。雪をかぶった乗鞍ヶ岳の背は、名そのままの銀鞍ぎんあんです。銀鞍があつて白馬はいずこへ行つた。それはこれより北に奔逃ほんとうして、越後ざかいに姿を隠している。

沼に沿うて銀鞍が再び森に沈んだところに、いわゆるあぶみじや鐙小屋があります。

竜之助はこの間お雪に導かれて、ここに來た時のことを思い出しました。

「ねえ、先生、ここに綺麗きれいなお池がありますのよ。ごらんない、この水の澄んでいて静かなこと、透き通るようですわ。あれ、大きな魚が……山魚やまめでしょうか。おお、つめたい、この水のつめたいことをごらんない、指が切れるようです、あたりまえの水の何倍つめたいことでしょう。後ろを振返つてごらん

なさい、真白な山、あれが乗鞍ヶ岳ですとき。先生、あなたは、あの山に登ってみたいとお思いにならない……お思いになつても駄目ですわね、あなたには登れませんから。あたし、女でも登ってみたいと思いますわ。今は、雪があつて登れませんから、来年、雪が解けた時分には、きつと登ってみますわ。あのお山は一万尺からあるんですつてね……木曾の御岳山とどちらかだつていうじゃありませんか。あなたは一万尺の山にお登りになつたことがありますか。そらごらんなさい、この金剛杖にも『一万尺権現池』と焼印がおしてありますよ。ああいけませんでした、あなたにはおわかりにならない、あの高い山も、この綺麗な水も、金剛杖におされた焼印も……ほんとにお気の毒さまですね」

と言われたのはちょうど、このところです。

山登りをする者が誰も携えて行く金剛杖、八角に削った五尺余りなのを、今日も竜之助は携えて来ました。

ここは日当りがことによくて、風の当りも少ない。竜之助は目的のあふみこや鑑小屋へ行くことを忘れて、暫くそこに立っていました。

高山のふもと麓、腹、頂などには、太古以来といつていいほどの小

屋掛けが、思いがけないところに散在する。それがあつた時はせつしようごや殺生小屋であり、ある時は坊主小屋であり、あるいはしんぶつこんごう神仏混淆に似たるむろどう室堂であつたりする。

由来、坊主小屋は樹下に眠り、石上を枕とする捨身無一物の出家が、山岳を行く時にかりの宿りと定めた名残で、なごり殺生小屋は山をめぐつて、生きとし生けるものを殺しつくす生業のなりわい猟師が、かて糧を置くところと定めていたものだという。持戒者と殺生者とが隣合わせに住むのは、あながち塵の浮世のちまた巷のみではな

い、高山の上にも、人間が足あとをつける限り、このアイロニーが絶えなかったものと見える。

ここ、小梨平、無名ななしの沼のほとりに立てられた鍔小屋は、いつの世、誰によつて、何の目的のために立てられたかわからないが、今でも人が住んでいる。

けれども、この鍔小屋までは、まだこの沼づたいに相当の距離がある。無名ななしの沼の岸を机竜之助は金剛杖をついてではない、それを提げて——静かに歩んで行くと、不意に空を切つて飛んで来た礫つぶてが、鏡のように静かで、そして透き通る無名ななしの池の中に落ちて、ザンブと音を立てて波紋が、ゆるやかに広がりました。

そこで、竜之助はハツとして歩みをとどめました。仰いで見たところで、岩石の落ち来るべきところではない、俯ふして見た

ところで、人の氣配のないところ。

そこで竜之助は歩みをとどめて、石の降つて来た方面に面をおもて振向けると、第二に飛んで来た石が竜之助の面をかすめて、再び沼の中に落ちて音を立てました。

第一のものは、いかなるところから、いかなるハズミで飛んで来た外それ石か知れないが、第二のものは、たしかに心あつてしたものに相違ない。何か自分をめあてに、仕掛ける意図があつての仕業しわざに相違ない。それにしては力の無い石だと思いました。けれども、竜之助の心が動きました。そうして手に提げていた金剛杖の真中を取つて、矢止めの型で軽く振つてみた。その杖先に第三の石が飛んで来てカチリと当つて下に落ちました。

「ホホホ、驚いたでしょう」

と行手に立つて言葉をかけたのは、聞覚えのある声です。いつ

のまにか叢くさむらの上に立つてこちらを見ているのは、例の、飛驒の高山の穀屋こくやの後家さんであります。その声を聞くと、竜之助が身み顫ふるいをしました。今の悪戯いたずらはこいつだ。年とし甲斐がいもない噪はしやぎ方だ。

「ねえ、先生」

と言つてこの後家さんは、そろそろと少し高い所から下りて来て、なれなれしく話しかけました。竜之助を先生と呼ぶのは、お雪ちゃんにカブれたものでしょう。

「貴船きふねさま様の前まで出て見ますと、あなたのこちらへおいでになるのが、よく見えたものですから、急いで、あとを追っかけて参りましたよ」

竜之助のそば近く歩んで来るこの水っぽい後家さんは、よほど急いで来たと見えて、額のあたりに汗がにじみ、まだ息がせ

いせいしている。

誰にたのまれて、そう急いで来たのだ。

「ねえ、先生」

と後家さんは、いよいよなれなく近づいて来て、息を切り、

「今日はお一人ですか。鐙小屋^{あぶみどや}へいらっしゃるのでしょうか。留

守ですよ、あそこは。神主様は室堂^{むろどう}へ行つて、おりません……ええ、

先廻りをして見届けて参りました。この間はお雪ちゃんに

手を引いていただいておいでになりましたのに、今日はお一人

でよく道がおわかりなさいましたこと。鐙小屋においになつ

ても詰りませんから、このお池の周囲^{まわり}を歩いてごらんになりま

せんか。いいお天気で、ホカホカとして春先のような心持が致

しますね。このお池を廻つて御一緒に宿へ帰りましょう。それ

ともこんなお婆さんと一緒ではおいや……」

竜之助でなくてもゾツとしましょう。

無名ななしの沼のほとりを、肪あぶらぎった後家婆さんと、竜之助とは、ブ

ラブラと歩いて行きました。

「ねえ、先生、あなたはこの間、お雪ちゃんに護身の手というのを教えておいでになりましたね、あれを、わたしにも教えて下さいましな」

「お前さんが習ってなんにする」

「覚えておいて害にはなりますまい、いざという時……」

「そうです、覚えておいて害にはなりますまい。けれども、あれは若い娘たちのためにするものです。若い時分には、どうも危険はずがありがちだから、もしこういう場合には、こうして手を外すとはずか、この場合にはこうして敵を突くとか、二ツ三ツの心得を、お雪ちゃんに話してみせただけのものです」

「若い時分に限ったことはございますまい、誰だつて、あなた、いつ、どういう危ない目に逢うか知れたものじゃありません」

「ははあ……」

竜之助はそれを聞き流しながら、

「お前さんなんぞは、かつぶくがいいから、そのかつぶくで敵を押しつぶしてしまつたら、たいがいの男はつぶれてしまうでしょう」

「御冗談を……」
ごじょうだん

後家さんは、まじめに取合われないのを、ちよつとすねてみました、

「ねえ、先生」

暫くして、また改まつたように、甘えた口調くちようで呼びかけました。

「ねえ、先生、あなたは人を殺したことがおありなさる？」

後家さんの^{あぶら}肪ぎった面^{かお}に、小さい銀色の粒が浮いて来ました。

「何ですって？」

竜之助は、わざと聞き耳を立てました。

「先生、あなたは人を殺したことがおありなさるでしょう」

「どうして、そんなことを聞くのです」

「でも……」

ちようと、道が沼の岸を離れて林の中に入る時分に、後家婆さんは、後ろの方をそつと顧みて、

「それでも、人を殺してみないと、度胸が定まらないっていうじゃありませんか」

「そんなはずはあるまい、人を殺さなくても天性度胸のいい者
はいい、^{おくびよう}臆気な奴が、かえって大事をしでかすこともあるもの

さ」

「それはそうでしょう。けれどいちど、人を殺すと、それから毒を食^{くら}えば皿までという気になって、腹が出来るというじゃありませんか」

「そうか知ら」

「真剣ですよ、先生、わたしは、真剣で先生にお話し申しもし、先生からお聞き申しもしたいものですから、この通り、話しながらも動悸^{どうき}が高くなっているのですよ」

「そうかといつて、おれは人を殺しました、と答える奴もあるまい」

「そうおつしやられてしまえば、それまでですけれど、先生には、わたし、このことをお尋ねしてもいいと思っているから、それでお尋ねしているんですよ。つまり、わたしは、あなたは、

たしかに人を殺しておいでなされると見込みをつけてしまったものですから、こんなことを臆面もなくお聞き申すんですが、あなたがお返事をして下さらなければ、わたしの方から白状してみましようか。それでも、わたし、人殺しをしたことがありますのよ」

こういつて、後家さんは忙がしそうに、四方を盗み見あたりしましたけれど、そこは一鳥も鳴かぬ無人のさかいであります。

強しいて人に物を問いかけるのは、必ず自分の身に相当の不安があるからであります。

「幾人！」

その時、竜之助が反問したのを、後家さんは充分に聞き取れないほどせき込んで、

「幾人って、あなた……」

鸚鵡返しに、
おうむがえ

「そう幾度も悪いことができるものですか……わたしは、それでも今は度胸がすっかりすわりましたよ……ですから先生、自分に覚えがあるものですから、人を見れば直ぐにわかりますのよ……この人は人を殺したことがあるかないか、心の底がちゃん、と、わたしには読めるようになりました。ここまで申し上げたら、あなたも、懺悔ざんげ話をして下すつてもいいでしょう」

ここに至つて、後家さんの腹がおちついて来たらしく、言葉が浮いて来て、

「それで、そういう人を見ると、わたしはなんだか、自分の味方を見つけてもしたように、無性むしようにたのもしくなつてしまつて……なんでもかでも、すっかりぶちまけて、その人にやつてしまいたいような気になるのですね、おかしいでしょう」

道はようやく沼を離れてしまつて、林の中深く入つて行くようです。

「先生、わたしにばかり白状させてしまつては罪ですよ、懺悔話をお聞かせください、ぜひ、どうぞ」

度胸がおちついたとはいふものの、手ごたえがないので、不安が不安を追つかけるように、後家さんは竜之助に促うながしました。

けれども、何としてか、竜之助は答えることなしに、少し歩みを早めて、ずんずんと後家さんより先に立つて木立の中深く進んで行くものですから、後家さんは、肪あぶらぎった大きな身体からだをそれに引きずられるように、追いつがるように歩いて、

「あんまり奥へおいでになつてはいけません……お池の方へ戻りましょうよ」

その時、沼のあなたに当つて、こだま 咄を返す一つの呼び声があり

ました、

「お内儀かみさん——お内儀さん、どちらへおいでになりました」

それは林を隔て、沼を隔てて呼ぶ浅吉の声にまぎれもありません。

この声を聞くと後家さんが、いまいましそうな、また、いっ
になく怖ろしそうな顔になって、声のする方へ向き直ったけれ
ども、そちらへ足をめぐらそうとはしません。

机竜之助もまた、その時、ずんずんと進んでいた足をとどめ
て立っている、

「お内儀かみさん——お内儀さん、お迎えに参りましたよ、お一人
歩きをなさると、お危のうございますよ」

甲かんに高い浅吉の呼び声は、感情もまたたかぶって、沼のほと
りを、あちらこちらとさがし廻っている様子が、なんとしても

穏かには響きません。

「お内儀さあ——ん……」

聞いていると、どこまでも嫉^{ねた}みを持つてものを追い求める声です。

「ねえ、先生……」

後家さんは、半ば恐怖の色を以て、竜之助にすがるように、
「あれは、うちの浅公ですよ……御存じでしょう、わたしの雇人
ですが、このごろ、どうしたものか、わたしを恨んでいます……
恨んではいるけれども、口に出しても、手に出しても、何もす
ることはできない意気地なしなんです、ああいう意気地なし
が思いつめると、また何をしでかすかわかったものではありません
……この間の晩も……」
といって、後家さんの唇の色が変って、舌がもつれました。

「ねえ、先生、この間の晩、夜中に、どうも変ですから、ふいに眼がさめて見ますとね、あの野郎がわたしのこの咽喉のどをおさえて、こうして……わたしを絞めようとしていたんですね、吃驚びつくりして、起き直って、わたしが、とちめてやりますと、泣いてあやまりましたが、あんなのがかえって怖いのかも知れません。ですから、先生、ぜひ、あの護身の手を一つ教えておいてくださいまし、もし、不意に咽喉でも絞めに来るとか、また刃物でも持つて向つて来た時には……」

後家さんが、再び、護身の手のことをいい出した時、竜之助はその左の腕を後家さんの背後から伸ばして、その襟えりを取ってグツと絞め、

「左様、後ろから絞められた時は……」

不意でしたから後家さんが、よろよろとよろけかかりました。

不意のことでしたから、後家さんも仰天^{ぎょうてん}して、よろよろ
けかかるのを竜之助は、

「もし、これを強く絞めようと思えば、こう親指を深く入れて、
べつだん力を入れずにグツと引きさえすれば……動けば動くほ
ど深くしまるばかりだ」

と言いながら、後ろから腕を深く入れると、後家さんは、

「あ、あ」

といって息を吹くばかりで口が利^きけません。後家さんの聞こう
とするのは、深く絞める仕方ではなく、絞められた時に、振り
ほどく手段なのです。ですから、いったんしめた手をゆるめて、
その解^とき方を示すべき時に、竜之助は、無意味にその手をゆる
められなくなりました。

この男には、かりそめの絆^{ほだし}が、猛然たる本能を呼び起すこと

は珍しくないので、活殺の力をわが手に納めた時に、それを無条件でつっぱなしきれなくなるのがあさましい。かりそめにしめあげた腕はゆるめなければならぬのに、人間の肉が苦しみもがく瞬間の、はげしい運動と、熱い血潮に触れると、むらむらとして潜在の本能がわき上ります。

「苦しいか」

「く、く、苦……」

後家さんは、必死となつて竜之助の腕にすがつて、その蛇のような腕を振りほどこうともがいたが、それは、さいぜん予告しておいた通りに、もがけばもがくほど深く入るだけで、力を入れるそのことが、いよいよ敵に糧かてを与うる理法となつて、いることを知らない。

はっ！ と落ちたか、落ちない時に、それでも竜之助は手を放

しました。手を放すと、肥満した女の骸が、朽木のように、自分の足もとに倒れたことを知りました。

しかし、それは、ほんの少しの間たつと、倒れた後家さんは半眼を見開いて、

「先生、あんまり酷い^{ひど}」

といいました。死んだのではなかったのです。

「あんまり酷いじゃありませんか、殺さなくつてもいいでしょう、お雪ちゃんに教える時にも、こんなになさつたの……？」

半醒^{はんせい}のうちに、後家さんは、竜之助に怨^{えん}じかけました。地獄をのぞいていまかえつた人というような見^み得^えで……

それから、やがてまた二人が相並んで、林の中をそぞろ歩きして行くのを見かけます。

その時分、林のあなたでは、^{おとこめかけ}またも男妾の浅吉が烈しく呼ぶ

声、

「お内儀かみさん、どちらへおいでになりましたんですよ、一人歩きは危のうございますよ、お迎えに上りましたよ」

多分、二人の耳には、以前から、その金切声が再々入っているはずですけども、あえて耳を傾けようとはしませんでしたが、「お内儀さあ——ん」

そこで後家さんが小うるさくなつて、

「気が違やしないか知ら、浅公——」

とつぶやきました。

しかし、その浅公も、もうかなり呼び疲れたと見えて、それからしばらく呼び声が絶えてしまいました。

「ねえ、先生、そういうわけですから、意気地なしほど思い込むと怖いかも知れませんよ。用心のために……殺しちゃいけま

せんよ、今のうちに殺さないで、殺しに来るのを避ける法を教
えて下さいましな、あれを外す^{はず}仕方を教えて下さいましな」

といって、もうケロリとして、今の苦しかった地獄の門を忘れ
てしまったようです。事実、或いは苦しかったのではないかも
知れない。上手にしめられると苦しいと感ずるのは瞬間で、そ
れから後は恍惚^{こうこつ}として、甘い世界に入るように息がとまってゆ
くそうな。こういう図々しい女は、再びその甘い死に方をして、
また戻つて来る氣分を繰返してみたいのかも知れない。

「それを外^{はず}すのは雑作^{ぞうさ}もない」

といって、竜之助は再び後家さんの首を後ろから締めにかかる
と、

「先生、殺しちゃいけませんよ」

今度は後家さんも覚悟の前ではあるし、竜之助も心得て、以

前ほど強くは締めず、ゆるやかにうしろから手を廻して、

「これをこうすれば袖車……」
そでぐるま

「もつと強く締めて下さい」

その時、サツと木の葉をまいて、風のような大息をつきながら、そこへ馳はせつけたものがありました。

「お、お、お、お、お内儀さん——」
かみ

真蒼まつさおになつて、ほとんど口が利きけないで、そこに踏みとどまりながら、吃どもつていましたから、竜之助も手をゆるめ、後家さんごけさんも向き直つて見ると、それは男妾の浅吉でありました。

「お内儀さん、あぶない——」
かみ

「浅吉、お前何しに來たの？」

「え、え」

「何しに來たんですよ、たのまれもしないに——」

「でも、お内儀さん、この節は、お一人で山歩きをなさるのは、お危のうございますよ」

「子供じゃあるまいし」

後家さんは、ひどく邪慳じゃけんな色をして、浅吉に当りました。

「でも、お内儀さん、私は、あなたが今、この方に殺されているのだばかり思つたものですから……」

事実、浅吉はそう思つて、その主人の急場を救わんがために駈けつけたものに相違ない。ところが来て見れば、当の御本人が至極平気で、かえつて助けに来た自分を邪慳にし、

「そんなわけじゃないよ、お前こそ、わたしを殺したがつているくせに……」

「どう致しまして」

「さつきから、なんだつて、あつちこつちでわたしを呼び廻つ

ているの。山の中だからいいけれど、世間へ出たら外聞が悪いじゃありませんか」

「どうも済みません」

「いいから、お帰り、お前ひとりでお帰り、わたしはこの池を廻って帰るから……」

「ですけど、お内儀かみさん……」

「何です」

「お危のうございますよ」

「何が危ない。しつこい人だ、お前という人は。うるさい！」

「けれども……」

「大丈夫だよ、お前こそ一人歩きをして、熊にでも食われないように、気をおつけ」

後家さんは、こういつて浅吉を振りつけて行こうとすると、

浅吉の眼の色が少し変りました。

「お内儀さん……どうしても危ない、あの方と一緒に歩いてはいけません」

「何をいつているんだい、失礼な」

「どうぞ、わたしと一緒にお帰りなすつて下さいまし」

浅吉は、とうとう後家さんの袖をつかまえてしまいました。これほどに思い込んで引留めることは、この意気地無しには珍しいことです。

「お放し」

それを振りもぎつて、振向いて見ると、たつたいま自分の首を締めた人が、そこに見えない。

「おや？」

後家さんは、慌あわてて、四辺あたりを見廻したけれども、その姿は消

えてしまっている。林の中にも、沼の岸にも、それらしいものが見えないから、

「おや、どこへおいでになった？」

後家さんが、狼狽うろたえしていた時、浅吉は透すかさず再びその袖を取つて、

「お帰んなさいまし、わたしと一緒に帰れば生命いのちに別条はございません」

「何をいつてるんだよお前は。お前こそ、わたしにとつては氣味が悪いよ」

といつて、後家さんはせきこんで、林の中へ駈けて行こうとするのを、浅吉が後ろから必死の力で抱き止めて、

「お内儀さん、あなたは死神につかれていきます、死神に……」

男妾の浅吉の必死の力を、さしも大兵だいひょうの後家さんが、とうと

う突き飛ばしきれず、それに取押えられてしまいました。

ほどなく薯虫いもむしが蟻に引きずられて行くように、この大兵の後家さんが、男妾の浅吉に引っぱられて、沼の岸を逆に戻って行く姿が見えましたが、やがて鑑小屋あぶみごやの前へ来ると、断わりなしにその戸をあけて二人が中へ入りました。

小屋はかなりの広さに出来ていて、正面には神棚があつて、御幣ごへいの切り目も正しくして新しい。

浅吉は、小屋の中へ御主人を誘いざなつて、自分はいがいく一方の炉に火を焚きつけて、向い合つて話をはじめました、

「ねえ、お内儀さんかみ、私はなにも人様の讒訴ざんそをするわけではございませんが……あの方の人相をごらん下さい。昨晚も夢を見ましたよ。私は毎晩のように、このごろは夢を見ますのは、みんなほかの夢じゃございません、お内儀さんも私も、あの方に

殺されてしまう夢なんです……昨夜もね、ちょうどそれ、あの
ななしぬま

無名沼なんですよ、あの沼の中に何か白いものが光って見えま
すから、私が近寄って見ますと、それがあなた、お氣にかけな
すつちやいけませんよ、お内儀さんの死骸なんです。あなたが
殺されて、あの沼の中へ投げ込まれているのを、私はまざまざ
と見たものですから、それが氣になつてたまらないでいるとこ
ろへ、今日、こうして、あなたが沼の方へ、ズンズンとおいで
なさるものですから、遠くで私が見ていますと、なんのことは
ない、あなたは、沼にすむ魔物に引寄せられておいでなさると
しか見えないものですから、私は我を忘れて、あなたの跡を追
いかけて参りました、そうして大きな声をして、あの通りにお
呼び申してみました。それでもようございました、危ないところ
をお助け申しました。これからは決してお一人歩きをなさら

ないようになさいまし、どうぞ……」

浅吉は一生懸命でこのことをいいますのに、後家さんは案外平気で、

「お前、このごろ、どうかしているよ」

「いいえ、わたしより、お内儀かみさん、あなたがどうかしておいでなさるのですよ」

と浅吉は例になくせわしく口を利きいて、

「あなたは魔物に引摺ひきずられておいでなさるんですよ」

「ばかなことを言っちゃいけないよ、どこに魔物がいます」

「いけません、お内儀さん、危ないのは、魔物にひっかかったと思う時よりも、魔物をひっかけたと思っている時の方が危ないのです」

「わけのわからないことをお言いでない、魔物なんてこの世の

中にありやしませんよ、みんなあたりまえの人間ですよ、人間並みにつきあつていさえすりや、怖いものなんてあるものか」

「そ、そ、それがいけないのです、お内儀さん、御当人にはわかりませんが、傍^{はた}で見ていると、よくわかります、あの人は、今にきつと、お内儀さんも、私も殺してしまう人ですよ、早く逃げないと……」

「逃げたけりや、お前ひとりでお逃げ、お前こそ、わたしを殺そうとしたじゃないか、この間の晩のあのざまは何です」

「あれは、お内儀さん、その、夢ですよ。その怖い夢を見たものですから、思わず知らず力がはいつて、あんなことになりました。お詫^わびをして許していただいたじゃありませんか。もうあれつきり、あのことをおっしやつて下さらないはずじゃありませんか」

「いいよ、そう申しわけをしなくったつて。ちつとも怖かないから……第一、お前に人を殺すだけの度胸がありや頼もしいさ」
「お内儀かみさん、それをおつしやらないで下さい、私だつて……」
「私だつて、どうしたの」

浅吉がギウギウ問ひ詰められている時に、小屋の裏戸が鳴りました。

裏口の戸をガタピシとあけて、そこへ現われたのは、狩衣かりぎぬをつけて、藁わらはばき、藁靴はを履いた、五十ばかりの神主体かみぬしの男。金剛杖を柱に立てかけて、

「これはこれは」

おのれが留守中の来客を見て、挨拶の代りに、これはこれはいつて、

「は、は、は、は……」

とさも陽気に笑いました。

「お帰りなさいまし、お留守中に失礼を致しました」

浅吉が申しわけをすると、

「なんの、なんの、そのままにしていらつしやい。いやどうも、
いいお天気で、は、は、は……」

と、いいお天気そのもののように、神主は明るく笑いました。

「あんまりいいお天気だものですから、こうしてブラブラと遊びに出かけました」

と後家さんがいうと、神主は、

「ああ、そうでしたかい、そうでしたかい、よくおいでたの。わしは昨晚、室堂^{むろどう}へ泊りましての、御陽光を拝みましての、御分身がすっかり身にしみ渡りましたので、よろこんで下山を致して参りましたわい。さあさあ、もつと火をお焚きなされ、火を

たいて陽氣になされませ」

こういつて神主は藁靴、藁は、ばきをとつて、炉辺に坐り込み、薪を炉の中にくべました。

「お山の上はずいぶん雪が深うございましたろう、よくおのぼりになりましたね」

「ええ、ええ、もう、積雪膝を没するばかりで、風でも吹いてごろうじろ、とても上り下りのできるものではございません、当分は室堂へお籠^{こも}りのつもりで出かけましたが、今朝は御陽光がすっかり身にしてみて、この通りの上天気だものですから、一気に室堂から下つて参りましたわい」

「御修行でおいでなさればこそ、とても並みの人にはできません」

と後家さんが感心してお世辞をいうと、浅吉が、これに継ぎ足

して、

「ほんとに、お羨ましうございます、わたしなんぞは、こんな若いくせをしまして、火の傍ばかり恋しがっているのに、この寒空を、あの高い山まで楽々と上り下りをなさるのは、恐れ入りました、御修行とはいいながら、大したものですよ」

「なんの、なんの……修行というほどのことではございせん、誰にもできることですよ。高いお山の上へ登って御陽光を分けていただきますと、もうこの心持が嬉しくなつて、世間が晴々しくなつて、この足が自分ながら躍り立つように軽くなりましてな、山坂を上ることも、下ることも、寒さも風も苦にはなりませんわい。こうして小屋へ帰つて、焚火の光を見ますと、火の光がまた、なんともいえない陽気なもので、嬉しくなります、は、は、は……」

神主は嬉しくてたまらないように、しきりに喜んでいたが、ふと浅吉の顔を見て、

「若衆さん、お前さん、また何か鬱ふさぎ込んでいますな、いけま

せん、一人鬱ふさいでいると、室内がみんな陰気になりますから、おやめなさい、人間、陰気ということがいちばんいけないのです……人は陽気がゆるむと、陰気が強くなります。陰気というのは、つまりけがれのこと、けがれは、つまり気を枯らす気け枯れということでござつてな、お天道様の御陽光が消えると、けがれが起るのじゃ。お前さん、陰気だ、陰気だ、これはいけない、いけない、陽気にならっしゃい、ちと外へ出て御陽光を吸つておいでなさい……お前さんがいるために、この小屋の内までが変に陰気くさくなっていましたわい、ドリヤお祓はらいをし

て進ぜよう」

と言つて元氣に老神主は立つて、神棚の前の御幣を持つて来て、「朝日権現は万物の親神……その御陽光天地に遍満し、一切の万物、光明温暖のうちに養い養われ、はぐくみ育てらる……」と言つて、二人の頭の上で、しきりにその御幣を振りかざしました。

この幣束へいそくで、お祓はらいをしてもらったのだか、祓はらい出されたのだか、二人はほどなく小屋の外へ出てしまいました。

「ごらん、お前があんまり陰気な顔をしているもんだから、あの神主様にまでばかにされてしまった」

といつて、後家さんが浅吉をこづきました。浅吉はよろよろとして踏みとどまるところを、後ろから行つて後家さんがまたこづきました。

「ホントに陽気におなりよ、意気地なし、陰気はけがれだと神

主様も言ったじゃないか、お天道様の御陽光が消えると、けが
れが起ると神主様がそうおっしゃったよ、ホントにお前はけが
れだよ」

「だって、お内儀さん……」

恨めしそうに後ろを向きながら、浅吉がまたよろよろとよろ
けて踏みとどまると、

「お前がいると陰気くさくっていけないって、体ていよく追っ払わ
れたんじゃないか、外聞が悪い」

といって後家さんが三たびこづくと、浅吉がまたよろけました。

「意気地なし」

後家さんから四たび突き飛ばされて、二間ばかり泳いで踏み
とどまった浅吉は、

「それは御無理ですよ」

やはり恨めしそうに振返ったけれど、あえて反抗しようでもなければ、申しわけをしようでもありません。小突かれれば小突かれるように、むしろこうして虐待されたり、凌辱されたりすることを本望としているかの如く、極めて柔順なものです。

そうして、突き飛ばされて、突き飛ばされて、二人の姿は小梨平から見えなくなりました。

そのやや暫くあとで、机竜之助は、林の蔭から、こつそりと身を現わして、あふみしや 鐙小屋に近いところの岩間から湧き出でる清水を布に受けて、ずきん 頭巾を冠かぶったなりで、うつむいては頻しきりに眼を冷し冷ししていると、小屋の中から手桶をさげて出て来た神主が、
「これは、これは——」

といって、竜之助の仕事を立って見ていましたが、

「それは利ききますよ、水でなけりやいけません、湯では本当の

修行になりませんな……白骨の温泉の雌滝めだきに打たれるより、この水で冷した方が、そりや利き目がありますよ」

「どうも、しみ透るほど冷たい水だ」

と竜之助が眼を冷しながら答えると、神主が、

「トテモのことに、室堂の清水まで行つて御覧になつてはいかがです、これどころじゃありません……それから一万尺の権現のお池へ行つて、神代ながらの雪水をむすんでそれを眼にしめして、朝な朝なの御陽光を受けてごらんさい、癒なほりますよ」

「御陽光というのは何だね」

「朝日権現のお光のことでございます、黒住宗忠様が天地生き通しということをおっしゃいましたのを御存じでしょう」

「知らない」

「三月の十九日に、宗忠様は、もう九死一生の重態の時に、人

に助けられて、湯浴ゆあみをして、衣裳を改めて、御陽光をお拝みに
なりましたから、家の人たちは、もうこの世のお暇いとまご乞いを申し
上げるのだらうと思っていましたところが、御陽光が宗忠様の
胸いっぱいになって、それより朝日に霜の消えるが如く、さし
もの難病がことごとく御平癒になりました」

「ははあ」

「久米の南条の赤木忠春様は、二十二歳の時に両眼の明を失い
しましたが、宗忠様の御陽光を受けてそれが癒りましたよ」

「ははあ」

「御陽光に背そむいてのびる人間はなし、御陽光を受けて癒らぬ病
人というのはございません……まあ、一度、この乗鞍ヶ岳へお
登りなさいませ、そうして、朝日権現の御前に立つて、蕩々とうとうと
のぼる朝日の御陽光を拝んで御覧あそばせ、それはそれは、美

麗とも、莊嚴そうげんとも……」

と言いかけて、美麗莊嚴はこの人に向つて、よけいなことだと気がつきました。

三十一

宿では、お雪ちゃんが炬燵こたつに入つて人形に衣裳しているところへ、竜之助がフラリと歸つて来ました。

「あ、先生、お歸りなさいまし」

衣裳人形を片手にして、お雪は歸つて来た竜之助を見上げると、竜之助は刀を床の間へ置いて、静かにお雪ちゃんと向い合
わせた炬燵に手を入れました。

お雪はにつこりと笑つて、

「お迎えに上ろうと思いましたが、たぶんあふみしや鐙小屋だろーと思つてやめました」

「そうでしたか、わたしも、お雪ちゃんを誘つて行こうと思つたが、歌に御熱心のようだから、一人で出かけましたよ」

「ええ、ずいぶん、あの先生偉い先生よ、お歌の方の学問では京都でも指折りの先生ですつて……」

「それはいい先生が見つかつて仕合せだ」

「全く仕合せよ、あなたには武術の護身の手というのを教えていただくし、あの池田先生には歌を教えていただくし……」

お雪は心から、自分の今の身の上の幸福を感じているらしい。そうして、今ちよつと手を休めた衣裳人形の着物の襟えりを合わせはじめると、竜之助が、

「お雪ちゃん、どうだ、乗鞍ヶ岳へのぼつてみようではないか」

「え、お山登りですか、結構ですね。ですけれども……」

お雪は人形の手を袖へ通して、

「けれども今はいけませんね、せめて春先にでもなってからでしょう」

「ところがいま登ってみたいのだ」

「この雪の深いのに……」

「左様……あの鎧小屋の神主が案内をしてくれるといいました」

「あの神主様が案内をして下さる？ それだって、先生、今は行けやしませんよ」

「どうして？」

「どうしてとおっしゃったって……ここには雪はありませんが、外へ出てごらんさい、山はみんな真白ですよ、吹雪でもあったらどうします」

「それでも、あの神主は、昨晚室堂へ泊つて易々と帰つて来た」

「そりゃ、仙人と並みの人とはちがいますよ、山で修行している人と、たまにお客に來た人とはちがいますもの」

「だから、その山で修行した人が先達をしてくれればいいわけではないか」

「そりゃそうかも知れませんが……わたしは女ですもの。それに先生……」

と言つてお雪は人形の衣裳の前を合わせ、

「あなたは、いったい、山登りをしてどうなさるの、いい景色をござらんになるわけではなし、朝の御來光を拝みなさるわけではなし……それこそ、骨折り損じやありませんか。それよりは、おとなしく、炬燵こたつに入つて休んでおいでなさい、わたしが面白い本を読んでお聞かせしますから……」

お雪は慰め顔に言いましたが、竜之助が何とも返事をしませんから、なんだか気の毒になって、

「ねえ、先生、わたしが今、何をしているか御存じ？」

「知りません」

「それでも当ててごらんなさい」

「歌を作っているのですよう」

「いいえ」

「それではお裁縫^{しきと}？」

「いいえ」

「わからない」

「あのね……お人形さんに着物を拵^{こしら}えて上げているところなのよ、さつき、梅の間の戸棚をあけて見ますと、この衣裳人形がありましたから、有合わせの切れを集めて、こんなに拵えました」

竜之助は、それを聞いて驚いてしまいました。この娘は自分の周囲に、今、どんな人間がいて、その立場がどうであるかということはいつこう念頭になく、深山の奥で、近づく限りの人を友とし、知り得る限りのことを学び、愛すべきものを愛し、弄ぶべきものを弄ぼうとして、恐るることを知らない。

この間、池田良斎は、お雪ちゃんの持つて来た万葉集を見てこういいました。

「ああ、これは寛永二十年の活字本で珍しいものだ、今日の万葉集はすべてこれを底本ていほんにしているが、普通には千蔭ちかげの略解本が用いられている、よほど好書家でないとこれを持つていない」

そうして、北原賢次とお雪ちゃんのために、日本の活字の来歴を一通り話したことでありました。同時に、活字本と、普通

の木版本の相違をも、よく説明して聞かせたことでありました。

活字は、すべて一字一字ずつとりはずしのできるもの。普通の木版は、一面に文章そのままを平彫ひらぼりにしてしまうもの。良斎の説によると、日本の活字の最初は、平安朝以前にあったが、最も盛んなのは徳川家康の前後ということ。また近代西洋式の流し込みの活字を創造したのは長崎の人、本木昌造ということになっているが、実は播磨はりまの人、大鳥圭介けいすけがそれより以前に実行している……というようにことまで知つているところを見ると、この人は国学のみならず、現代の知識にもなかなか明るい人と見える。

その翌日から万葉集の講義が始まりましたが、その講義は良斎らの座敷を選ばず、名物の炬燵こたつを仲介することもなく、この炬辺をそのまま充あててることになりました。

一冊の万葉集を真中に置いて、炉の一方には良斎先生が陣取り、それと相對して北原賢次とお雪ちゃん——陪聴はいちやうの役として留守番の喜平次も顔を出せば、お雪ちゃんの連れの久助さんも並んでいる。

池田良斎は、燃えさしの粗朶そだの細いところを程よく切つて、それをやや遠くの方から万葉集の字面に走らせ、

こもよ

みこもち

ふぐしもよ

みふぐしもち

この岡に

菜摘なつます兒こ

家きかな

名のらさね

そらみつ

やまとの国は

おしなべて

吾こそをれ

しきなべて

吾こそませ

われこそはのらめ

家をも名をも

一通り訓よみをして、それからいちいち字義の解釈を下して、全体の説明にうつりました。

「この歌は、雄略天皇様が、あるところの岡のあたりで、若菜を摘んでいる愛らしい乙女を呼びかけておよみになった歌で、こ

れ、そこに籠^{かご}を持ちくしを持つて菜を摘んでいる愛らしい乙女よ、お前の家はどこじゃ、聞きたいものじゃ、名乗れ、自分はこの国を支配する天皇であるぞよ……というお言葉、いかにも上代の平和にして素朴な光景、一国の元首が、名もなき乙女に呼びかけ給う壮大にして、優美な情調が一首の上に躍動している。すべて万葉の歌は……」

と講義半ばのところへ、大戸を押し開いて、あわただしく駆け込んだものがありましたから、講義が一時中止になりました。

「惜しいことをした、ホンのもう一息のところ……」

と言つて、講義半ばの空気を壊したことをも頓着せず、炉辺へしがみつくようにやって来て、

「熊を一つ取逃がしてしまった、突くにはうまく突いたが、槍がよれたから外^それちまった、危ねえところ——」

獵師は手首の負傷を撫でて、すんでのことに熊の口から助かつて、命からがら逃げて来た記念を見せる。鉄砲を持たないこの辺の獵師は、熊を見つけると充分に引寄せて、のしかかつて来る奴を下から槍で胸か腹を突く、突っ込んだ瞬間に逃げる——そのあとで熊は突かれた槍を敵と思い込んで、抜くという知恵がなく、かえって自分で抉^{えぐ}つて、自分で死ぬという。

熊の襲来で、万葉集の講義が一段落となりました。

そうしてこの獵師の報告によつて、件^{くだん}の熊の運命について、おのおのその見るところを語りはじめました。ある者は、熊というものは到底、刺された槍を抜き取るだけの知恵のあるものではない。浅かれ、深かれ、槍を立てた以上は、自分で抉つて、自分で傷を深くするだけの器量しかないのだから、これは当然どこかに倒れているに相違ないと言う。

ある者はまた、それも程度問題で、突き方が非常に浅ければ振りもぎつてしまふし、木の根や岩角に当つて、おのずから抜け去ることもあるのだから、無事に逃げ去つてしまつたらうという。

どつちにしても、もう少しその運命を見届けて来なかつた獵師に落度がある——という結論になつて、獵師が苦笑いする。

池田良斎はそれを聞いて、

「とにかく、熊の下腹まで行つて槍を突き上げるとは非常な冒険だ、へたに運命を見届けているより、獲物えものは外それても、逃げて歸つたのが何よりだ」

と言いましたけれども、獵師は、なかなか諦めあきらきれないらしい。宿の留守居連中も集まつて来て、諦められない獵師を、いつそう諦められないものにする——というのは、熊一頭を得れば

一冬は楽に過せる、山に住む人の余得として、これより大きいのはない、それを取外とりはずした猟師のために、やれやれ気の毒なことをしたと悔みを言うものですから、猟師がいよいよ諦めきれなくなりました。

「ちえッ、もしかすると、そこいらに斃たおれていやがるか知れねえ、もう一ぺん出直してみよう」

この連中にとつては、自分たちの生命の危険よりは、熊一頭が惜しいように見える。猟師は、そこでふたたび鎗さびやりをかつぎ出しました。こうなると力をつけた連中も気を揃えて、それに加勢をすることになると、最初には、たしなめた池田良斎すらが、この機会にその熊狩見物を面白いことにして、同行をすることになると、万葉集の講演が、そのままお雪ちゃんだけを残して、熊狩隊に変わってしまいました。

そこで宿に秘蔵の、鉄砲一挺も持ち出されることになる。この鉄砲とても、いつぞや、塩尻峠のい、のじヶ原で持ち出されたわざもの業物と、弟ていたり難く、兄けいたり難い代物しろものですが、それを持ち出した留守居の源五の腕だけは、あの時の一軒屋の亭主よりも上らしい。

こうして鉄砲が一挺に槍が二本、同勢六人で押し出した熊狩隊は、行く行く熊の話で持切りです。

熊は必ず一頭では歩かない、親の行くところには必ず子が従うということ。熊てのひらの掌の肉がばかに美味うまいということ。熊の胆いの相場。熊は山を歩くにも、猪や、鹿のように、どこでもかまわぬという歩き方をしない、だから、ここを追えばここへ出るという待ち場所はちゃんとしまっている——というようなことを話し合う。

池田良斎はそれを聞いて、商売商売だと思う。よく朝鮮征伐の物語で、勇士が虎に接近した昔話を読むが、この辺の猟師もそれに負けないことをやる。そうしてかれらは、それを冒険だとも、手柄てがらだとも思っていない。かえってその冒険よりも、熊一頭の所得を偉大なものだと思っていることを不思議がる。

暫く進んで、ようやく山深く分け入った時、

「ソラアいた、いた——ソレ、あすこで動いてるのを見ろやい」
一人が叫び出すと、すべての眼の色が緊張する。

「一発ブツくらわしてみろ」

そこに獲物えものの影を認めて、早くも追出しの鉄砲を一発打つと、意外にも向う遙かに人の声、

「人間だよ、人間が一人いるから、気をつけておくんなさいよ」

そこで、熊狩りの一隊が呆あきれました。

彼等が呆れているところへ、お椀帽子わんぼうしを冠かぶつて、被布ひふを着た旅の男が一人、のこのこと歩いてくるのは、「人間ですよ」と自ら保証した通り、人間が一人、抜からぬ顔をして現われて来ました。

「一体、どうしたんです、旅のお客さん、今時分こんなところを、どこから来てどこに行くのです……危ないこつた」と熊狩りが狩り出したその人間を取巻いて、詰問ていもんの体。

「わしどもは、旅はいかいしの俳諧師はいかいしでございましてね、このたび、信州かしわばらの柏原いっさそうしやうの一茶宗匠いっさそうしやうの発祥地おうちみを尋ねましてからに、これから飛騨ひだの国へ出で、美濃みのから近江おうみと、こういう順で参らばやと存じて、

この山越えを致しましたものでございますが……ふと絵図面を見まして、これよりわずかのところに白骨温泉のあることを承知致しましてからに、道をまげて、これよりひとつ、その白骨の温泉に温^{ぬく}もつて参らばやとやって参りました」

「それは、それは」

熊狩りの一行は、この俳諧師の出現に機先を折られた様子。

ともかく、この俳諧師一人をノコノコと平気で歩かせてよこした方の道には、とうてい熊はいないと鑑定しなければならぬ。そこで熊狩りの一隊は、陣形と策戦の方針を一変しなければならぬ。

獲物中心の連中が、ガヤガヤとその陣形と策戦の方針を語り罵^{のの}りながら、方向転換をやっている時、見学の池田良斎は、やや離れて後からくつついて、新たに出現した俳諧師を生捕つて

しまいました。

「あなた、俳諧をおやりなさるのですか」

「へ、へ、へ、少しばかり……」

年の頃は、まだ三十幾つだろうが、その俳諧師らしい風采ふうさいが、年よりは老ふけて見せた上に、言語拳動のすべてを一種の飄逸ひょういつなものにして見せる。

「信州の柏原の一茶の旧蹟を尋ねて、只今その帰り道なのでございます」

「ははあ、なるほど、一茶はなかなか偉物えらぶつですね」

「え」

「といって俳諧師は眼を円くし、

「失礼ながら、あなたにも一茶の偉さがわかりですか」

「それは、わたしにも、いいものはいいい、悪いものは悪いとう

つりますよ」

池田良斎が答えると、俳諧師は驟雨にわかあめにでも逢ったように身顫みふるいをして、

「では一茶の句集でもごらんになったことがございますか」

「あります、あります、『おらが春』を読みましたよ」

「おらが春——たのもし、あなたが、そういう方とは存じませんでした」

俳諧師は着物の襟をさしなおして恐悦ちゅううれがりました。仲間ちゅうげんみた

ような風采をしていた良斎の口から、一茶を褒めほられて、自分の親類を褒められたような気になったのでしよう。有頂天うちようてんになつ

た俳諧師は、

「おらが春を本当に読んで下されば、一茶の生活と、人間と、発句ほつくの精神とはまずわかります、わかるにはわかりますがね、

人によつてそのわかり方の違うのはぜひもあります。あなたは、一茶という人間を、どういうふうにごらんになつていますか、それを承りたい」

「そうですね」

池田良斎がこの質問に逢つて、少しく首を捻ひねりますと、俳諧師はそれにかぶせて、

「どうですか、一茶の偉いというのは、太閤秀吉の偉いのは違います、日蓮上人の偉さとも違います、また近代のこの信濃の国の佐久間象山の偉さとも違います、一茶の偉さは、英雄豪傑としての偉さではありませんよ、人間としての偉さですよ、信濃の国の名物中の名物は俳諧寺一茶ですよ……いや、信濃の国だけではありません、この点において一茶と並び立つ人は天下にありません、一茶以前に一茶無く、一茶以後

に一茶なしです……」

俳諧師の言葉に熱を帯びてきました。

一方の熊狩りはどこへ行つたか姿が見えません。かれらは一頭の熊のために、一頭の熊が与うる生活の資料のために、ちまなこ血眼になつてゐるから、山を眼中に置かない。

こちらは歌人——とは断定できないが——と俳諧師とは、古人を論じて来時の道を忘るるの有様です。

しかし、どうやら間違ひなく二人は白骨の宿へたどりつくと、池田良斎が東道とうどうぶりで、炉辺に焚火の御馳走を始めました。

ところで、この俳諧師の、俳諧寺一茶に対する執着は容易に去らない。

「古人は咳唾がいだたま珠を成すということをいいましたが、一茶のは咳唾どころじゃありません、呼吸がみな発句ほつくになつてゐるのです、怒

れば怒つたものが発句であり、泣けば泣いたのが発句となり……横のものを縦にすれば、それが発句となり、縦のものを横に寝かせば、それがまた発句です。その軽妙なること俳句数百年間、僅かに似たる者だに見ずと、時代を飛び越した後人がいいましたけれども、それでも言い足りません。一茶の句は滑稽味が多しとおっしゃるのですか。それはやはりあなたも素人観しろうとかんの御多分に漏れません。よく一茶を惟然いねんや大江丸おおえまるに比較して、滑稽詩人の中へ素人しろうとが入れたがります。『おらが春』の序文を書いた四人山人しやうじんというのが、それでも、さすがに眼があつて、これを一休、白隠と並べて見ました。それでも足りないのです。また一茶の特色を、滑稽と、軽妙と、慈愛との、三つに分けた人もあります、慈愛を加えたのが一見識でございましょう。一茶の句をすべて通覧してごらんになると、森羅万象がことごとく詠よまれぬ

というはありません、その同情が、蚤のみ、虱しらみ、蠅はえ、ぼ、う、ふらの類たぐいにまで及んでいることを見ないわけにはゆきますまい。それとまた一方に、一茶を皮肉屋の親玉のように見ている人もあります。つむじ曲りの、癩癩かんしゃくも持ちちの、ひねくれ者のように見ている人もあります。勸農の詞ことばなんぞを読んで、聖人の域だと感心している人もあります。しかし、それはみんな方面観で、当っているといえ、凡すべて当っているし、間違っているといえ、凡てが間違っているのです。本来、一茶のような人間に定義をつけるのが間違いなのです……ごらんない、これは天明から文政の間、まあ一茶の盛りの時代に出た全国俳諧師の番附ですが」といって俳諧師は、行李こうりの中から番附を取り出して良斎に見せ、「本来、風流に番附があるべきはずのものではありませんが……俗世間には、こういうものを拵こしらえたがる癖がありましたね。こ

の番附には一茶が入っておりません、たまに入っているかと思えば、二段目ぐらいのところへ申しわけに顔を見せているだけです。しかし、これは仕方がありません、点取り宗匠連が金を使つて、なるべく自分の名を大きくしておかないと商売になりませんからね、一つは商売上の自衛から出ているのですが、面白いのは、一茶の子孫連中が、その祖先の有難味にいつこう無頓着で、一茶が最後の息を引取った土蔵——それは今でも当時のままに残っておりますが、左様、土蔵といったところで、一間半に二間ぐらいのあら壁^{かべづく}作りのおんどるみたようなもので、本宅が火事に逢ったものだから、一茶はこの土蔵の中に隠居をして、その一生涯を終りました、その土蔵の中へ、ジャガタラ芋^{いも}を転がして置きました、たまに、わたしどもみたような人間が訪れて礼拝するものですから、その子孫連中があきれて、何の

ためにこんな土蔵を有難がるのか、わからない顔をしている有様が嬉しうございました……西洋の国では、大詩人が生れると、その遺蹟は国宝として大切に保護しているそうですが、日本では、一茶のあの土蔵も、やがて打壊されて、桑でも植えつけられるが落ちでしょう。一茶というものは、時代とところを離れて、いつまでも生きているものだから、遺蹟なんぞは、どうでもいいようなものですけれど……一茶の子孫の家ですか、それは柏原の北国街道に沿うて少し下ったところの軒並の百姓家ですが、今も申し上げた通り、自分の先祖の有難味を知らないところが無性^{むしよう}に嬉しいものでした。家を見て廻ると、あなた、驚くじやありませんか、流し元の窓や、唐紙^{からかみ}の破れを繕^{つくろ}った反古^{ほぐ}をよくよく見ると、それがみんな一茶自筆の書捨てなんですよ。知らずにいる子孫は、いい反古紙のつもりで、それを穴ふさぎ

に利用したものです。あんまり驚いたもんですから、わたしどもはそれを丁寧（ていねい）にひつぺがしてもらつて、こうして持つて帰りました。それからこの渋団扇（しぶうちわ）、これもあぶなく風呂の焚付（たきつけ）にされる所でした。ごらんさい、これに『木枯（こから）しや隣（とな）といふも越後山』——これもまぎろう方（かた）なき一茶の自筆。それからここに付木（つけぎ）葉（は）があります、これへ消炭（けしずみ）で書いたのが無類の記念です。一茶はああした生活をしながら、興が来ると、炉辺の燃えさしやなにかを取つて、座右にありあわせたものに書きつけたのですが、こんなものをその子孫が私どもに、屑（くず）つ葉（は）をくれるようにくれてしまいました。あんまり有難さに一両の金を出しますと、どうしても取らないのです、そういう不当利得を受くべきはすのものじゃないと思つてるんですな。これは、先祖の物を粗末にするというわけじゃない、その有難味のわからない

い純な心持が嬉しいですね。それでも一茶自身の書いた発句帳、これはその頃の有名な俳人の句を各州に分けて認めたもの、下へは罫紙けいしを入れて、たんねんにしてあった、これと位牌いはい、真中に『釈一茶不退位』とあつて、左右に年号のあるもの、これだけは大切に保存していました」

俳諧師は、話しながら、渋団扇だの、付木つ葉だのを取り出して良齋に見せました。

その時分、お雪ちゃんは、ただ一人で広い湯槽ゆづねの中につかつておりました。

今、髪を洗ったばかりと見えて、それをいいかげんに背から湯槽の縁ふちへ載せ、首だけだして身体からだをすつかりと湯につけています。

ここの湯槽は、一間に一間半ぐらいなのが八つあつて、その八つの湯槽には、それぞれ名前がついているのだが、そのなかで疝氣せんきの湯がいちばん熱く、綿の湯というのが名前の如く、やわらかくてぬるいことになっているが、それは盛りの時分のことで、今はどれも同じようなもので、お雪はやわらかな綿の湯につかりながら、白骨しらほねの名の起る白い湯槽ゆぶねの中を見ていました。この湯槽は石灰分がくつついているせいか、どれも白くおぞんでいて、湯の水も白いように見えるが、流れ出す湯口を見ると無色透明で入浴の度毎に飲むと利きき目があるということだから、お雪も今、それを少しばかり飲んでみました。

いつもならば、こうしていると誰か入りに来るのですが、今日は全宿の大部分は熊狩りに出勤してしまっているし、三階の牡丹ぼたんの間へ間替えをした浮気ッぽい後家さん主従は、別段物争

いの音も立てず、炉辺で話をしているのは国学者と俳諧師ですから、どう間違つても掴つかみ合いになる心配はなし、昼日中ひるひなかが太古のような静かさで、お雪は自分一人がこの温泉にいるような、いい気持になってしまいました。

そのうちに、お雪ちゃんが思い出しておかしくてたまらないのは、この間お雪が、竜之助から護身の手を教わったという話を聞いて、宿の留守番の嘉七という若い剽ひょうきん軽者が、

「わしらはハア、剣術もなにも知らねえが、敵が前から斬りかけて来た時は、ハア、額で受けらあ、後ろから斬りかけて来た時は背中であけまさら」

とすました顔でいったことです。

お雪は、その時の嘉七の言葉と顔付がおかしいといつて、ころげるほど笑いましたが、今もそれを思い出すと、ひとりおか

しくなつて、おかしくなつて、ことに嘉七の額が少しおでこだ
ものですから、額で受けらあという言葉が一層利いたので、今
も湯槽ゆづねの中でその思出し笑いが止まらないのです。

三十三

さてまた弁信法師は一面の琵琶を負うて、またもうらぶれの
旅に出でました。

ここは峽中こうちゆうの平原、遠く白根の山の雪を冠かぶつて雪に揺曳ようえいする
ところ。亭々たる松の木の下に立つて杖をとどめて、悵然ちやうぜんとし
て行く末とこし方をながめて立ち、

「茂ちゃん、お前のいるところはわたしには、ちゃんとわかつ
ているようで、それで、どうしても逢えないの。今も、わたし

のこの耳に、お前が、わたしに逢いたがつているその声が、よく聞えるんですけれども、わたしにはお前のいるところがわからない」

弁信は松の梢こすえの上を仰いでこういいました。これはこの法師にとつては珍しいことではありません。いつでも、人なきところ
ろに人を置き、声なきに声を聞いては、それを有るものの如く
応対するのが、このお饒舌しやべり坊主の一つの癖であります。

「ですから、昨日きのうもああしてお前に逢えないで過ぎました、今日も逢うことができないで暮れようと致します、明日はどうでしょう……どうかして、わたしはお前をたずねだして逢いたい
と思うけれども、今日ここで逢えないように、明日彼かのところ
で逢えないかも知れません、或いは今生こんじょうこの世で逢えないのかも知れません……といつてわたしは、それを悲しみは致しませ

んよ、今生に逢えなければ後生ごしやうで逢いましょう、ね、茂ちゃん」
弁信はこういつて暫く声を吞みましたが、また、ねんごろに
言葉をつづけました。

「茂ちゃん、お前は後生しやうというのを知っていますか……人間に
生を受けたこの世は長くても百年。五十年を定命じやうみやうと致すそうで
ございます。けれども生命の流れは曠劫かうこくより来つて源みなもとを知るこ
と能あたわず、未来みらいに流れてその尽頭じんとうを知ることができないので
すよ。五十年百年の命は、この長き生命の流れに比べますと、
電光朝露でんこうちやうろうよりも、なお速すみやかなものだと思いませんか……後生が
ないという人は、一日の間に昼夜がないというのと同じこと
で、死は暫くの眠りでございます……」

ここに至ると弁信は、茂太郎に向つて語るのだから、それとも、
他の見えざる我慾凡俗しゆじやうの衆生に向つて語るのだから、わからない

心持になつたと見えて、

「皆様、人間の死は一つの眠りでございます、眠りの間にも生命は働いているのでございます……ただ一日の夜は、正確な時間の後に万人平等に来りますけれども、人間の死にはきまりというものがございませぬ、死の来る時だけは、人間の力で知ることができず、制することもできません。皆様、それを恨むのは間違ひです、人は病気で死んだ、災難で死んだといひますけれども、この世で病気に殺されたり、災難に殺されたりした者は一人もあるものではございませぬ……いいえ、いいえ、お聞きなさい、そうです、そうです、人間は決して病気や災難で死んだものではありません、この世につかわされた運命が、そこで尽きたからそれで死ぬのです……今生の善根が、他生の福德となつて現われぬということはなく、前世の禍根が、今生の業縁と

なつてむくわれぬというためしはございませぬ……十善の戒行かいぎようを修しゆした報うけいが、今生において天子の位に登ると平家物語から教えられました、『十善天子の御果報申すもなかなかおろかなり』と平家御入水ごじゆすいの巻にございます。帝王の御身ですら、御定業ごじようごうのがれさせ給わず、ましていわんや……この小智薄根のわたくし……いかなる前生の罪か、この通り不具の身として、人間界に置かれましたわたくし……」

と言つて、弁信法師は嗚咽おえつして泣きました。涙がハラハラと雨のように落ちます。たまらなくなつたと見えて、杖の上に置いた手の甲に顔をうずめて泣きましたが、

「ねえ茂ちゃん、お前がよく歌つた、あの九つや、ここで逢わなきゃどこで逢う、極楽浄土の真中で……という歌が、わたしの耳に残つて、今ぞ胸の蓮華れんげの開くように沁しみ渡ります」

後註

- 一 「柏筵様」は底本では「柏筵様」
- 二 「負」は底本では「追」

底本：「大菩薩峠 8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 3 月 21 日第 1 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 五」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2004 年 1 月 9 日作成

2006 年 5 月 19 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。